島原市文化財調査報告書　第13集

小原下（おばるしも）遺跡 Ⅱ

―株式会社東洋機工製作所工場建設に伴う発掘調査報告2―

２０１１

長崎県島原市教育委員会

島原市文化財調査報告書　第13集

小原下（おばるしも）遺跡 Ⅱ

―株式会社東洋機工製作所工場建設に伴う発掘調査報告2―

２０１１

長崎県島原市教育委員会

発刊にあたって

本書は株式会社東洋機工製作所の工場建設に伴って実施した小原下遺跡の発掘調査報告書です。

小原下遺跡は、昭和４１年から断続的に発掘調査がおこなわれ、縄文時代の遺跡として知られていましたが、平成１８年度の調査で、縄文時代後期の竪穴住居や土器・土偶などが発見され、同時代の集落跡であったことが判明しました。

このたび、株式会社東洋機工製作所第二工場拡張工事が計画され、埋蔵文化財の発掘調査について協議をおこない、同社の理解が得られ発掘調査を実施いたしました。

今回の調査では、弥生時代の竪穴住居や鉄器が発見され、過去の調査と併せて考えると、縄文時代から弥生時代まで継続して人々の生活が営まれた場所であったことが判明しました。

最後になりましたが、今回の調査に協力いただいた株式会社東洋機工製作所ならびに関係の皆様に心より感謝申し上げ、発刊のことばといたします。

平成２３年１０月

島原市教育委員会
教育長　清水　充枝

例　言

1　本報告は2011(平成23)年に実施した株式会社東洋機工製作所の工場建設に伴う長崎県島原市有明町に所在する小原下遺跡2区の緊急発掘調査の報告である。

　調査は株式会社東洋機工製作所の依頼を受けて、島原市教育委員会が実施した。

2　調査は2011(平成23)年1月12日から1月21日まで、範囲確認調査を実施し、その結果をもとに同年3月22日から5月27日まで発掘調査をおこなった。

3　調査体制は以下のとおりである。

調査主体　　**島原市教育委員会**

教育長	清水充枝	
社会教育グループ長	中村義則	(平成22年度)
社会教育グループ長	松下英爾	(平成23年度)
主査	宇土靖之	〔調査･整理担当〕

㈱埋蔵文化財サポートシステム

長崎支店長	山口勝也	本社調査部次長	城野一郎
長崎支店技師	竹田ゆかり〔整理担当〕	本社調査部主任	大坪芳典　〔調査･整理担当〕
		本社調査部技師	嘉村哲也　〔調査担当〕

4　発掘調査及び関連作業は㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託し、測量･グリッド杭設置は同社の山口･小石龍信･江口喬裕が担当した。遺構実測は嘉村･藤崎伸一郎が主に担当し、中尾陽介･中田裕樹･松尾昌広が行った。航空写真撮影は藤田勝一、遺構写真撮影は大坪が担当した。遺物実測は竹田･内業作業員、遺物図デジタルトレースは古賀栄子が担当した。

5　発掘調査の掘削作業は木村光江･中尾精市･荒木恵子･花川チヨ子･森本正利･菅篤実･浜口義夫･渡部タツエ･山下文正･城台圭司郎･倉本好美･倉永新子･宮崎キヌエ･大津栄郎･内山貴有･宮崎こずえが行った。また、遺物整理作業･遺物実測は松本幸美･森崎シゲ子･本田円香･毛利順子･牧美穂･林田博之が行った。

6　調査の遺物･図面等は島原市埋蔵文化財収蔵庫･大野原遺跡展示館で保管･展示している。

7　本書の執筆は第Ⅰ章第2節・第Ⅱ章第1節の一部を宇土靖之、第Ⅲ･Ⅳ章の土器を大坪芳典･嘉村哲也、石器を竹田ゆかりが担当し、それ以外を大坪が担当した。また、本書の編集は宇土靖之と大坪芳典が行った。

凡　例

1　小原下遺跡の遺跡略号は「OBS」と表記する。当遺跡の調査はすでに1区の調査が実施されており、前調査区の1区の遺構と混乱を避けるために、調査区名を新設した「小原下遺跡2区」を「OBS-2」と表記することにした。また、遺構名はローマ字による遺構分類略号と遺構番号との組合せで表記した。詳細は「第Ⅰ章 第3節」に記している。

2　原則として遺構の測定値はm単位を使用した。

3　表示した方位はすべて国土座標第Ⅱ系による座標北(G.N.)である。

4　遺構実測図の縮尺は竪穴住居を1/80で、土坑を1/40で、埋甕を1/20を基準とし、遺構の状況に応じて適宜その縮尺を設定して掲載した。遺物実測図の縮尺は1/3を基準として、大型土器を1/6で、石器･鉄器･土版と一部の遺物を1/2で掲載した。

5　土色の表記については『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社）を基にした。

6　出土遺物に関しては下記の文献の分類･編年を参考にした。

宇土靖之･大坪芳典　2011「小原下遺跡出土の（縄文時代後期後半）土器編年の考察
とその他の出土遺物について」『小原下遺跡』　島原市教育委員会

清田純一　1998　「縄文後･晩期土器考 - 中九州の縄文後･晩期土器とその並行型式について - 」
『肥後考古』第11号　肥後考古学会

宮崎貴夫　1984　「弥生土器および古式土師器について」『今福遺跡Ⅲ』　長崎県教育委員会

西健一郎　1983　「黒髪式土器の基礎的研究」『古文化談叢』第12集　九州古文化研究会

中園聡　2004　「土器の分類･編年と様式の動態（中部九州）」『九州弥生文化の特質』　九州大学出版会

なお、調査および本書の刊行にあたっては以下の方々から御協力、御指導を頂いた。記して謝意を表します。

地元各位　株式会社東洋機工製作所　長崎県教育委員会

本文目次

第Ⅰ章　調査の経過……1
第１節　過去の調査……1
第２節　調査に至る経緯……1
第３節　発掘調査の経過と方法……2

第Ⅱ章　地理的・歴史的環境……3
第１節　地理的環境……3
第２節　歴史的環境……4
第３節　調査の概要……6

第Ⅲ章　遺構と遺物……8
第１節　縄文時代の遺構と遺物……8
第２節　弥生時代の遺構と遺物……14
第３節　中世の遺構と遺物……34
第４節　近世の遺構と遺物……35
第５節　その他の出土遺物……36
遺物観察表……43

第Ⅳ章　総括……45
第１節　小原下遺跡2区の出土遺物……45
第２節　小原下遺跡2区の遺構……49

挿図目次

第 1図　小原下遺跡位置図(1/2,000,000)…… 3
第 2図　小原下遺跡周辺遺跡分布図(1/50,000)…… 4
第 3図　調査区位置図(S=1/5,000)…… 5
第 4図　小原下遺跡基本土層模式図…… 6
第 5図　小原下遺跡2区遺構配置図(S=1/200)…… 7
第 6図　SB25竪穴住居実測図(S=1/80)…… 8
第 7図　SB25出土遺物実測図(S=1/3)…… 9
第 8図　SB27竪穴住居実測図(S=1/80)…… 9
第 9図　SB27出土遺物実測図(S=1/3)…… 9
第10図　SB58竪穴住居実測図(S=1/80)……10
第11図　SB59竪穴住居実測図(S=1/80)……11
第12図　SB59出土遺物実測図(S=1/2)……11
第13図　SK07土坑実測図(S=1/40)……11
第14図　SK09土坑実測図(S=1/40)……11
第15図　SK29土坑実測図(S=1/40)……12
第16図　SK29出土遺物実測図(S=1/3)……12
第17図　SK40土坑実測図(S=1/20)……12
第18図　SK40出土遺物実測図(S=1/6)……12
第19図　SK60土坑実測図(S=1/20)……13
第20図　SK60出土遺物実測図(S=1/6･3)……13
第21図　SX46出土遺物実測図(1/3)……13
第22図　SB01竪穴住居実測図(S=1/80)……15
第23図　SB01出土遺物実測図(S=1/3･2)……15
第24図　SB02竪穴住居実測図(S=1/80)……16
第25図　SB02出土遺物実測図(S=1/3)……16
第26図　SB03竪穴住居実測図(S=1/80)……17
第27図　SB03出土遺物実測図(S=1/3･2)……18
第28図　SB10竪穴住居実測図(S=1/80)……19
第29図　SB10出土遺物実測図(S=1/3)……19
第30図　SB24竪穴住居実測図(S=1/80)……20
第31図　SB24出土遺物実測図(S=1/3)……20
第32図　SB30竪穴住居実測図(S=1/80)……20
第33図　SB30出土遺物実測図(S=1/3･2)……20
第34図　SB33竪穴住居実測図(S=1/80)……21
第35図　SB33出土遺物実測図(S=1/3)……21
第36図　SB35竪穴住居実測図(S=1/80)……21
第37図　SB37竪穴住居実測図(S=1/80)……22
第38図　SB37出土遺物実測図(S=1/3)……22
第39図　SB38竪穴住居実測図(S=1/80)……23
第40図　SB39竪穴住居実測図(S=1/80)……23
第41図　SB39出土遺物実測図(S=1/3･2)……24
第42図　SB43竪穴住居実測図(S=1/80)……24
第43図　SB43出土遺物実測図(S=1/3)……24
第44図　SB50竪穴住居実測図(S=1/80)……25
第45図　SB52竪穴住居実測図(S=1/80)……25
第46図　SB52出土遺物実測図(S=1/3)……25
第47図　SK08土坑実測図(S=1/40)……27
第48図　SK17土坑実測図(S=1/40)……27
第49図　SK19土坑実測図(S=1/40)……27
第50図　SK23土坑実測図(S=1/40)……27
第51図　SK26土坑実測図(S=1/40)……27
第52図　SK49土坑実測図(S=1/40)……27
第53図　SK54土坑実測図(S=1/40)……28
第54図　SK55土坑実測図(S=1/40)……28
第55図　SD05区画溝実測図(S=1/150･80)……29
第56図　SD05出土遺物実測図(S=1/3･2)……30
第57図　SD06溝実測図(S=1/150･80)……30
第58図　SD06出土遺物実測図(S=1/3)……30
第59図　SD11～16溝状遺構群実測図(S=1/150･100)･31
第60図　SD11出土遺物実測図(S=1/3)……31
第61図　SX36不明遺構実測図(S=1/80)……33
第62図　SX36出土遺物実測図(S=1/3)……33
第63図　SX44不明遺構実測図(S=1/80)……33
第64図　SX44出土遺物実測図(S=1/3)……33
第65図　SX45不明遺構実測図(S=1/80)……33
第66図　SX45出土遺物実測図(S=1/3)……33
第67図　SX47不明遺構実測図(S=1/80)……33
第68図　SX18出土遺物実測図(S=1/2)……34
第69図　SB04掘立柱建物実測図(S=1/80)……34
第70図　SB04出土遺物実測図(S=1/3)……34
第71図　SK20土坑実測図(S=1/40)……35
第72図　SK20出土遺物実測図(S=1/3)……35
第73図　SK31土坑実測図(S=1/40)……35
第74図　SD32溝状遺構実測図(S=1/200･80)……35
第75図　SD32出土遺物実測図(S=1/3)……35
第76図　範囲確認調査出土遺物実測図(S=1/2･3)･･･37
第77図　遺物包含層(1･2層)出土遺物実測図
(S=1/3･2)……38
第78図　遺物包含層(3層)出土遺物実測図①
(S=1/3･2)……39
第79図　遺物包含層(3層)出土遺物実測図②
(S=1/3)……40
第80図　遺構検出面出土遺物実測図(S=1/3･2)……41
第81図　小穴出土遺物実測図(S=1/3･2)……42
第82図　小原下遺跡における土偶編年表(S=1/4)･･･45
第83図　小原下遺跡2区における弥生時代中期の土器
編年表(S=1/6･160)……47
第84図　小原下遺跡縄文時代後期後半竪穴住居群
(S=1/1,000)……49
第85図　小原下遺跡2区主要遺構(竪穴住居)
変遷図(S=1/500)……50
第86図　関連資料　景華園遺跡出土遺物(S=1/6)
と景華園遺跡写真……52

表目次

表 1　遺物観察表……43　　表 2　遺物観察表……44

写真図版目次

写真図版 1　01. 小原下遺跡2区と周辺(北東から)……55
写真図版 2　02. 小原下遺跡1･2区(1区のみ画像合成)(北東から)……56
03. 小原下遺跡2区全景(南東から)
写真図版 3　04. 範囲確認調査　05. 表土掘削後……57
06. 遺構検出面　07. SB01検出
08. SB01床面　09. SB01土層
10. SB01周堤焼土　11. SB01完掘
写真図版 4　12. SB03土層　13. SB03完掘……58
14. SB03遺物　15. SB03遺物
16. SB03遺物　17. SB10土層
18. SB10完掘　19. SB10遺物
20. SB30完掘　21. SB24土層
22. SB24完掘　23. SB27完掘
写真図版 5　24. SB25完掘　25. SB33土層……59
26. SB43土層　27. SB43･33、SX47完掘
28. SB43遺物(石皿)　29. SB02･37～39検出
30. SB02･38土層　31. SB39土層
32. SB39遺物　33. SB02･37～39･52完掘
34. SB58土層
写真図版 6　35. SB59土層･完掘　36. SB04完掘……60
37. SK23完掘　38. SK26完掘
39. SK54完掘　40. SK40埋甕
41. SK60埋甕　42. SK20土坑
43. SD05土層　44. SD05完掘
45. SD06完掘
写真図版 7　46. SD11～16完掘　47. B-98グリッド出土杭……61
48. C-99グリッド出土遺物　49. 調査区北西壁面土層
50. 調査区完掘　51. 出土遺物①
写真図版 8　52. 出土遺物②　53. 出土遺物③……62
54. 関連資料(景華園遺跡出土遺物)
写真図版 9　55. 発掘作業　56. 遺物整理……63
写真図版10　57. 現地説明会　58. 北より小原下遺跡を望む……64

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　過去の調査

遺跡周辺は畑地であり大正時代から昭和40年代頃まで、牛蒡栽培が盛んだった。この牛蒡栽培により地表から70㎝から80㎝程の深さまで堀削されることにより、地中の遺物が地表に露頭していた。発見の動機は永松実氏（現長崎市歴史民俗資料館館長）の熱心な遺物採集により、縄文時代後期の遺物や土偶が発見されており、昭和41年、有明町教育委員会から有明町大三東小原下木下2843番地－1に所在する縄文時代後期の西平式土器から御領式土器の包蔵地として発見届が提出された。

過去の調査は、本調査区の南西に隣接する地区において3次実施されている。

1次調査は昭和41年12月から昭和42年1月に島原高等学校国見分校（現長崎県立国見高校）と有明町教育委員会により実施され、昭和42年5月に長崎県立国見高等学校から報告書が刊行された。この調査により製鉄遺構の存在を提起された。

2次調査は昭和45年、遺物包含予察地一帯の宅地化・牛蒡栽培地の拡大という事態に対応し、当時の県文化財課と有明町とで協議し、県教育委員会と有明町と共催により同年11月に調査を実施した。調査地は1次調査によって製鉄遺構の指摘がされ、再調査まで埋戻されていた地点である。本調査と同様に縄文時代後期後半の遺物が多く出土している。また、炉状遺構の問題については晩期の所産であるものの、一方で、当遺構の直上まで牛蒡栽培の際に鉄滓が混入していた。

3次調査は平成18年３月及び6月に範囲確認調査を実施し、同年9月から平成19年3月にかけて本調査を実施した。調査対象面積は2,900m^2であった。調査では縄文時代後期の30軒あまりの竪穴住居や、それに伴う土坑や埋甕・溝などの集落跡が主に確認できた。今回の調査区の資料と混同を避けるために、3次調査の調査区を1区(第3図)と定めて、本報告の4次調査を2区とした。

第２節　調査に至る経緯

株式会社東洋機工製作所から第二工場拡張工事の埋蔵文化財の届出(工事届)が提出され、平成23年1月12日から21日にかけて、事前に範囲確認調査を実施した。

工場建設予定地に6ケ所(TP１～6)、緑地部分に2ケ所(TP7・8)の調査坑を設定し確認調査を行い、全ての調査坑から縄文時代の土器・石器が出土した。また、TP3・6からは溝状遺構が確認された。

範囲確認調査により、遺跡の存在が確認できたため、株式会社東洋機工製作所と島原市教育委員会で協議を重ね、本調査については、工場建設予定地のうち工事による堀削が遺構等に影響を及ぼす部分について実施し、周囲の緑地部分は地表面より下部には堀削が行われないことから現状で保存することで合意した。

今回報告する2区の本調査は平成23年3月22日から5月27日まで実施した。掘削・遺構実測等は5月27日まで行い、続けて6月3日までは6月5日に実施した現地説明会の準備等を行った。また、確認調査・本調査の整理作業と報告書作成は2011(平成23)年10月まで行った。

第３節　発掘調査の経過と方法

遺跡名は小原下遺跡で、その遺跡の略号を「OBS」として台帳及び遺物整理の段階で用いた。当遺跡の調査はすでに1区の調査が実施されており、前調査区の1区の遺構と混乱を避けるために、調査区名を新設した「小原下遺跡2区」を「OBS-2」と表記することにした。遺跡は広範囲に広がるため、1区及び調査地一帯を包括した形で、調査グリッドの設定を行った。グリッドは国土座標第Ⅱ系を基準にX＝－17,676m、Y＝78960mの交点を始点とし、8m方眼を最小単位として設定した。南北行はアルファベットで表示し、始点から南の行へA→B→C…の順に、始点から北の行へZZ･ZY･ZX…の順に使用した。東西列は算用数字2桁で表示し、始点から東の列へ1･2･3…の順に、始点から西の列へ100･99･98…の順に使用した。各々のグリッドの名称は「行名称－列名称」で表記し、発掘調査における遺構配置図や遺構図の作成、所属不明な遺構検出面で出土した遺物や表面採集等の取り上げ、報告文中における遺構説明など、全て今回設定したグリッドに基づいて行った。

遺構名の表示については次の表示を採用した。遺構番号は先頭に遺構分類番号を附記して、その後に続けて2桁の通し番号を付して最終的な遺構名とした。この遺構名に使用する遺構分類略号には広域的かつ厳密に統一されたものがないため、ここで使用したものは島原市教育委員会による独自分類である。この独自遺構分類略号にはSA：柵列、塀、SB：掘立柱建物･竪穴住居、礎石建物、SC：石蓋墓、周溝墓、SD：溝、溝状遺構、SE：井戸、SK：土坑･埋甕、SR：周溝状遺構、ST：古墳、墳丘墓、SW：石垣、石積、SX：その他、不明遺構、P：小穴、柱穴、TP：調査坑、範囲確認調査坑がある。以上の要件で表記された遺構名は、例えば「SB01」、「SK02」のようになる。

調査はバックホウを用いて表土剥ぎを行った。その後、グリッドを設定して人力により遺構検出を行った。遺構検出面までの遺物包含層の遺物を取り上げた後に、主に中世･弥生時代中期･縄文時代後期の遺構面を人力で検出して、掘削の過程と掘削後に個別遺構図と遺物出土状況図(1/10、1/20)、堆積土層図(1/20)の作成を行った。遺構写真の撮影も随時行った。調査区全体写真は6×6㎝判白黒フィルム、6×6㎝判カラーリバーサルフィルムを用いて、遺構完掘後にラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。

整理調査は島原市教育委員会の整理場で実施した。遺物の洗浄後に注記作業と接合･復元作業を行い、その後、遺物実測を行った。遺物について資料的価値が高いと判断される公開展示遺物や実測遺物をⅠ種、それ以外のものをⅡ種に分類し、収蔵用のプラスティックコンテナに収納した。Ⅰ･Ⅱ種のコンテナを判別し易いように、Ⅰ種には赤ラベルを、Ⅱ種には青ラベルを貼り付け、出土遺構･遺物の内容を明記している。出土資料及び全ての記録資料は平成23年度現在、島原市埋蔵文化財収蔵庫及び大野原遺跡展示館で保管･展示している。

第Ⅱ章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境（第1図）

島原市の位置する島原半島は長崎県南東部の有明海と橘湾に胃袋状に突き出した半島である。半島の規模は東西24㎞、南北32㎞、面積463㎢で、中央部は雲仙岳を中心とした国立公園であり、海岸線一帯は島原半島県立自然公園となっている。半島は地質･地形的には北部の雲仙火山地域と南部の南島原火山地域に大別できる。半島の4分の3を占める雲仙火山群の溶岩円頂丘を中央として北部･東部･南東部に火山性扇状地が発達して、裾野は有明海に延びる。南部の南島原火山地域は第3紀層を安山岩や玄武岩を主体とする溶岩が覆う火山性台地であり、起伏に富む地形をなしている。海岸線の総延長は130㎞であり、半島の主要道路･鉄道（島原鉄道）は主に海岸線に沿って走るものと、主要道路の複線として広域農道のグリーンロードが走る。また、島原半島の1市16町あった行政区分は平成の市町村合併により島原市･雲仙市･南島原市の3市に合併された。

島原市は島原半島の北東部に位置し、北に雲仙市、南に南島原市と接する。有明海を隔てて東には熊本県が位置する。地勢は先述した通り、火山性の扇状地であり、遺跡が所在する島原市有明町は雲仙火山群を構成する舞岳（702m）を頂点として、東の有明海に向けて扇状地に広がる。また、舞岳を水源とする数条の河川は湯江川を除いては小河川であり、水田はこれらの河川の流域に沿って分布するが流域面積は貧弱で水田面積は狭小である。台地上の耕作地についても水利が悪く地下水を汲み上げて対処しても、畑作を営むのが限界である。しかし、クロボクと呼ばれる土壌は畑作に適しており県内有数の畑作地帯となっている。漁業では地元で有明ガネと呼ばれるカニ漁と、遠浅の海岸を利用した海苔養殖が盛んである。このように雲仙火山により形成された独特な地質･地形をもつこと、またそこに住む人々はたびたび火山災害にみまわれながらも、温泉や湧水等の火山の恵みを利用した生活を営み、火山との共生による文化･産業をつくりだしていることが評価されて、平成21年8月に「島原半島ジオパーク（Unzen Volcanic Area Global Geopark）」は世界ジオパークとして認定されている。

小原下遺跡2区は島原市内の東に位置し、有明海の海岸の洪積世段丘上の島原市有明町大三東字木下846番地1と847番地1の一部に所在する。調査面積は703.6m²で、検出面の標高は16.6～18.7mであった。遺跡周辺は集落や工場、農場などが密集する。遺跡の北側に位置する段丘上には当遺跡と同時代の縄文時代後期及び弥生時代中期の大野原遺跡が所在する。当遺跡は東に有明海が面しており、海を挟んで対岸の熊本県には縄文時代後期後半の標式遺跡である太郎迫遺跡･三万田遺跡･御領遺跡や上南部遺跡がある。これらの熊本県の大遺跡と当遺跡は海を隔てて直線距離にして約30㎞である。

第1図　小原下遺跡位置図(1/2,000,000)

【参考文献】

宇土靖之･竹中哲朗編 2001 『一野遺跡Ⅱ』　有明町教育委員会

第２節　歴史的環境(第2図)

遺跡周辺の主だった遺跡については明確な旧石器時代の遺跡は確認されていないが、縄文時代に入ると一野遺跡(20)で縄文時代早期の一野式土器や弘法原式土器が出土した。この遺跡の資料を基に「一野式土器」が設定された。遺跡の北に位置する大野原遺跡(16)では縄文時代後期後半の多量の遺物や粘土貯蔵穴や焼土土坑が出土した。その他、縄文時代後期の遺跡としては中田遺跡(12)がある。

弥生時代の遺跡については一野遺跡・大野原遺跡などで石棺・甕棺等が発見されている。また、妙法塚遺跡(11)では壺棺が出土している。景華園遺跡(37)は島原半島で初めて青銅器が出土した遺跡である。遺跡から出土した遺物は弥生時代中～後期のもので、青銅器が銅剣3本・銅鉾2本と鉄製鋤先で、その他貝輪・勾玉や管玉の玉類などが出土している。妙法塚遺跡・大野原遺跡・景華園遺跡などの中～後期にかけての遺跡の立地は海岸に面する丘陵上の遺跡という点で、小原下遺跡の立地と類似している。

古墳時代については墳丘が僅かに残存し、玄室と前室の一部が残存する平山古墳(8)がある。その他、一野遺跡で8基の古墳を検出して調査を行った。妙法塚古墳では石棺から5世紀前半代と考えられる鉄鏃が2個出土した。また、前方後円墳の可能性があったものに、三会の大塚古墳(47)がある。

古代については当遺跡より南東に近接する松尾遺跡(22)があり、8世紀代の須恵器や土師器・甑・カマドの一部が出土した。大野原七反畑遺跡では8世紀前後の須恵器や土師器等に伴い柱穴群や井

第2図　小原下遺跡周辺遺跡分布図(1/50,000)

戸状の廃棄土坑が確認されている。大野原遺跡は縄文時代･弥生時代･古代の複合遺跡で、奈良時代の遺物が出土している。

中世については有明町の島原市立有明中学校や周辺宅地に位置する大野城跡(13)がある。大野城は16世紀後半、龍造寺氏と有馬氏との沖田畷の戦いにおいて、高来の直轄地の最終端であり龍造寺氏の兵站基地であった。龍造寺軍の敗退後、大野城の城主であった大野山城守はこの城の軍需物資を有馬晴信に提供することにより助命された。その他、大野城跡の南東には空閑越後守(有馬家臣)の東空閑城跡(17)があり、当遺跡の周辺には中世･戦国時代の城郭が点在する。

【参考文献】

有明町　1987　『有明町史』上巻

諫見富士郎　1993　『概要報告書　大野原七反畑遺跡』　有明町教育委員会

諫見富士郎　2001　『大野原遺跡』　有明町教育委員会

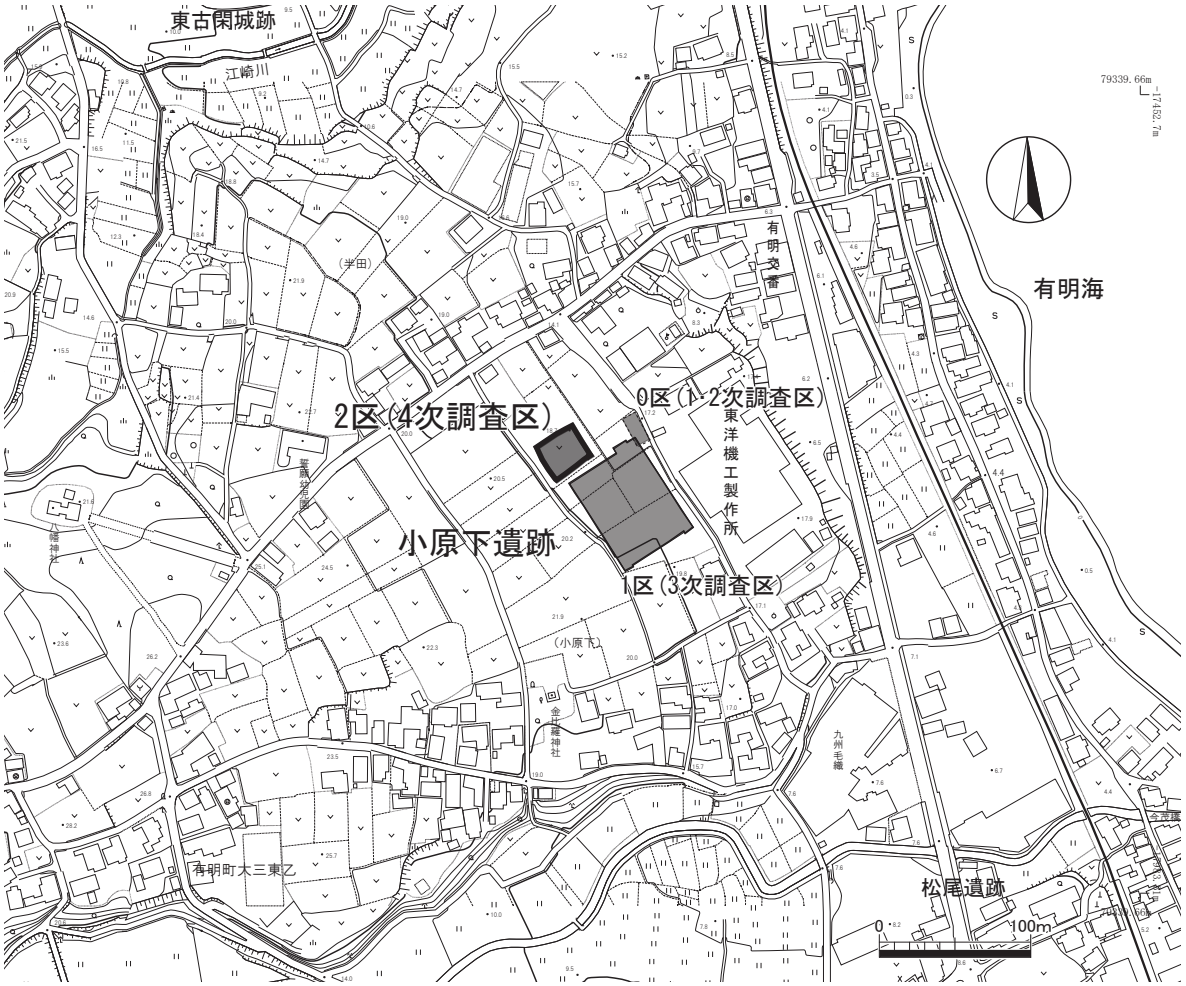
宇土靖之･竹中哲朗　2001　『一野遺跡Ⅱ』　有明町教育委員会

宇土靖之･大坪芳典　2011　『小原下遺跡』　島原市教育委員会

浦田和彦編　1992　『一野遺跡』　有明町教育委員会

松田毅一･川崎桃太訳　1979　『フロイス　日本史10』西九州編Ⅱ　中央公論社

長崎県教育委員会　1997　『原始古代の長崎』資料編Ⅱ



第3図　調査区位置図(S=1/5,000)

第３節　調査の概要(第3～5図)

小原下遺跡2区(4次調査)は島原市内の東に位置し、有明海の海岸の洪積世段丘上の島原市有明町大三東字木下846番地1と847番地1の一部に所在する。2区の調査面積は703.6m^{2}で、検出面の標高は16.6～18.7mであった。

縄文時代及び弥生時代の遺構は基本層序3(3a)層の遺物包含層を掘削後に、基本層序4層上面で確認した。厳密には4層上面もしくはほんの僅か数センチ上で検出したが、今回の調査における土層観察では明確に確認することができなかった。今後の課題としては土色が大きく変化する4層直上面まで掘削すれば遺構は比較的安易に確認することができるが、その僅か数センチ上から遺構が検出できる点に注意して、遺構が集中する基本層序3層の分層を行う必要がある。過去に株式会社東洋機工製作所工場の東側の崖が工事によって土層が露頭していたことがあり、この時の状況によれば本調査で確認できた基本土層3層より上層の黒色土層と共通する雲仙火山灰層が確認できて、基本土層4層より下に上から吾妻層、阿蘇4火砕流堆積物層、竜石層の順で堆積していたことが確認されている(田島2001)。

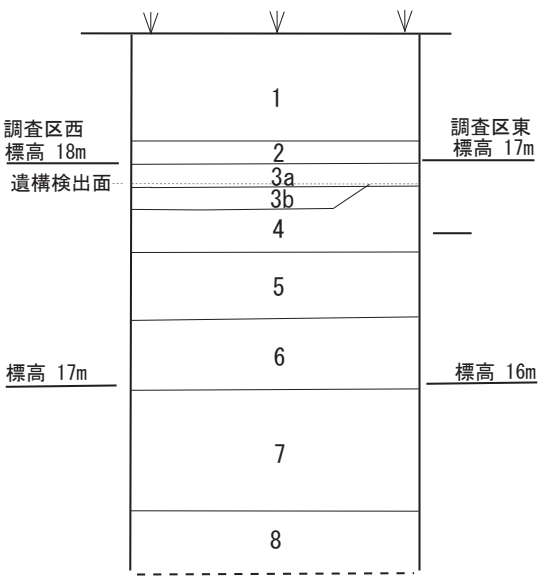
本調査では主に弥生時代中期の時期の遺構･遺物が確認できた。当調査区は前回の調査区の1区とも南東で隣接していることもあり縄文時代後期後半の遺構･遺物も確認した。その他、中世･近世の遺構や遺物も出土している。

調査で確認できた縄文時代の遺構は竪穴住居が4軒、土坑が3基、埋甕が埋設された土坑が2基、性格不明遺構が数基であった。弥生時代の遺構は竪穴住居が14軒、土坑が8基、溝が2条、溝状遺構群が1群、不明遺構が10基近くであった。弥生時代と縄文時代の遺構は同一検出面であり、弥生時代の遺構が縄文時代の遺構を切って確認できる遺構もあった。その他、中世の掘立柱建物1棟や土坑1基を確認した。近世の遺構は溝が1条、土坑1基、性格不明遺構が1基確認した。

これらの状況から、1区から2区にかけて広がる縄文時代の集落は、その頃よりこの地に住み始めて、その後、2区で主に確認できた弥生時代中期の集落を経て中･近世の集落へと連続して住み続けたと考えられる。本調査はその小原下集落の変遷過程を確認できる良好な遺跡であり、島原半島においても弥生時代の集落構造を掴める貴重な遺跡と言える。

【参考文献】

田島俊彦　2001 「雲仙火山の火山噴出物について」『大野原遺跡』　有明町教育委員会

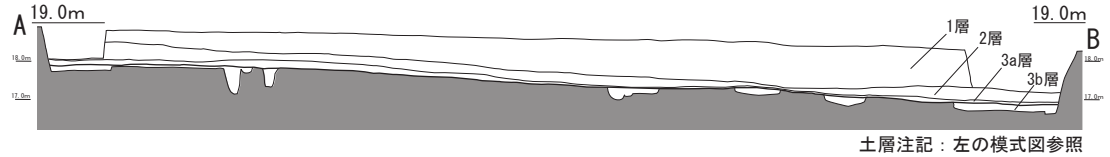


【基本土層注記】

1層：明褐灰色土
　表土・耕作土
2層：黒色土
　遺物包含層（弥生時代中期以降）
3a層：にぶい黄褐色土
　縄文時代後期～弥生時代中期包含層
3b層：にぶい黄褐色土
　縄文時代後期～弥生時代中期遺構埋土
4層：明黄褐色土
　僅かに遺物を含む　混入か
5層：暗褐色土
　鉄分層
6層：黄白色土
　ブロック状の塊　カシノミ層
7層：淡黒色土
　カシノミ層
8層：赤褐色粘質土

第4図　小原下遺跡基本土層模式図

基本土層図



土層注記：左の模式図参照

第5図　小原下遺跡2区遺構配置図(S=1/200)

第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は基本層序3(3a)層の遺物包含層を掘削後に、基本層序4層上面で確認できた。縄文時代の遺構は弥生時代と同じく4層上面で確認できたが、検出状況が弥生時代の遺構に切られて確認できたものが多い。

本調査において確認できた縄文時代の遺構は竪穴建物が4軒、土坑が5基、性格不明遺構が数基であった。その竪穴建物は全てが住居と考えられる。また土坑は5基の内、2基は埋甕を埋設する遺構であった。

１　竪穴建物

SB25竪穴住居(第6図)

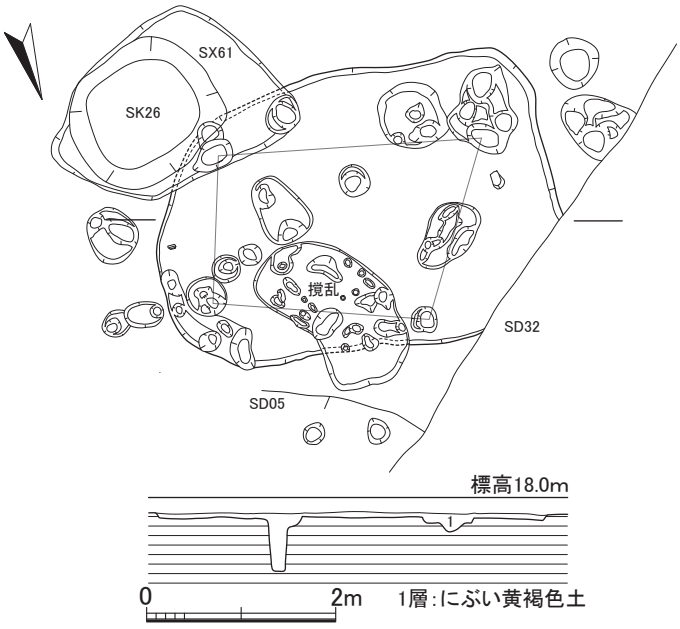
A･B-100グリッドに位置し、隅丸方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は17.95ｍで、規模は長径4.21ｍ、短径3.00ｍ、深さ0.05ｍである。遺構の切り合い関係はSD32･SK26･SX61(樹痕)に切られて検出した。遺構を切る撹乱も樹痕と思われる。

住居内は支柱穴を含む多柱穴であったが、検出状況から主柱穴は4本柱で構成すると考えられる。遺構の壁面には壁溝の可能性がある小溝が僅かに確認できた。

遺構の埋土からは縄文時代後期後半の口縁部に「ノ」字状の貼付文を付した太郎迫式土器や三万田式土器、粗製無文土器(1)が出土している。縄文時代中期から後期前半にかけての阿高系土器(2)は混入したものと考えられる。その他、石包丁様石器(3)が出土した。

SB25出土遺物(第7図)

1は縄文時代後期後半の粗製無文土器の深鉢である。若干上げ底気味の平底で、厚手である。内外面にナデを施し、底面に貝の圧痕が見られる。内面に煤が付着する。2は縄文時代中期から後期前半にかけての阿高式系土器の深鉢である。外面にヨコナデを施し、内面･底面にナデを施す。胎土に滑石を含む。3は非常に薄い板状節理の安山岩片を素材とした石包丁様石器である。弧状の側縁に両面加工で刃部を作出する。上面の一部には刃潰し状の二次加工があり、刃部との間に平坦部



第6図　SB25竪穴住居実測図(S=1/80)

を挟む。折断により大きさを調整している。表裏の平坦な節理面には手擦れ痕と思われる摩耗が見られる。

SB27竪穴住居(第8図)

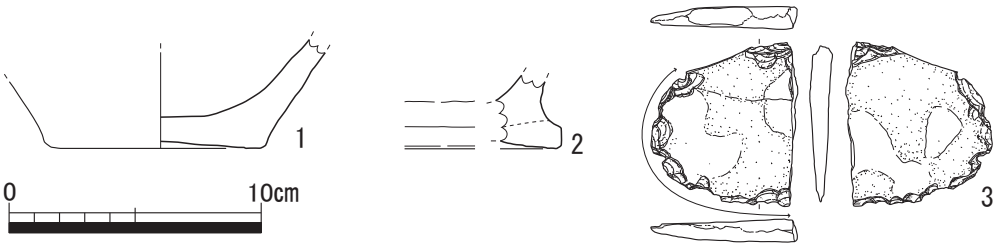
B-1グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は17.79mで、規模は長径2.82m、短径2.67m、深さ0.33mである。他遺構との切り合い関係は認められない。

住居内からは支柱穴を含む柱穴も疎らに確認できたが、検出状況から主柱穴は2本柱で構成すると考えられる。主柱穴内には敲石などを転用した根固めの礫が出土した。遺構の中央には焼土と炭化物を含む土坑が確認できたことから、炉の可能性もある。その傍らには石皿片が出土している。

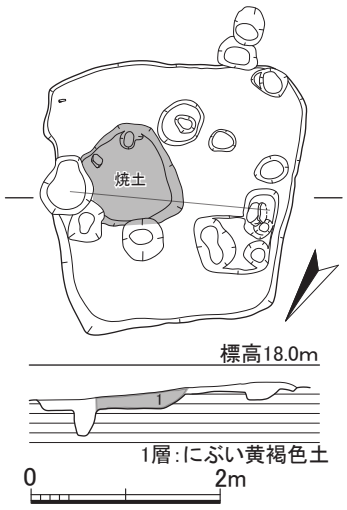
埋土からは縄文時代後期の太郎迫式土器や石錘(1)・磨石が出土した。

SB27出土遺物(第9図)

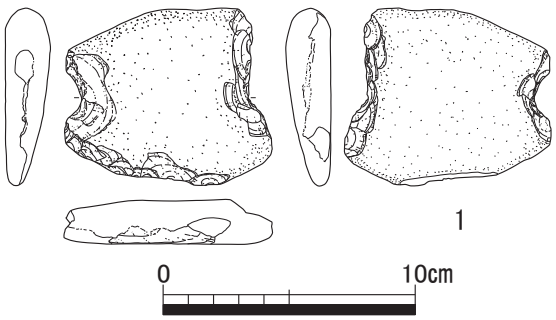
1は扁平な砂岩の水磨礫を素材とした石錘である。長軸の両端に抉りを入れている。下縁には器体整形加工が施されている。当遺跡では漁労関係の遺物が極端に少なく石錘も、この1点のみの出土で、糸巻きなどの漁労具以外で使用された可能性も考えられる。



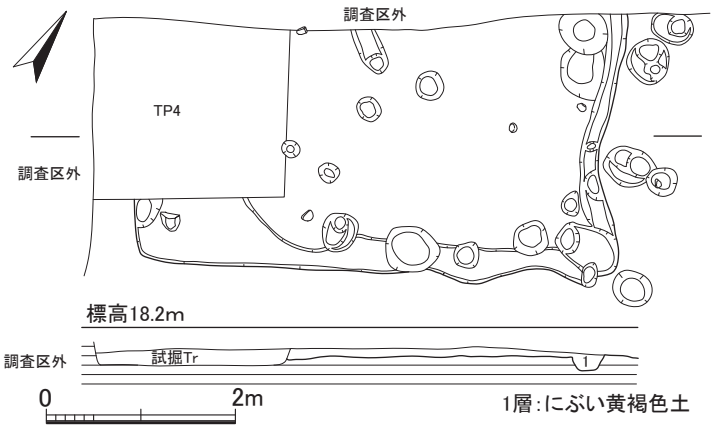
第7図　SB25出土遺物実測図(S=1/3)



第8図　SB27竪穴住居実測図(S=1/80)



第9図　SB27出土遺物実測図(S=1/3)



第10図　SB58竪穴住居実測図(S=1/80)

SB58竪穴住居(第10図)

A-98グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は18.05ｍで、規模は長径4.96m、短径2.75m以上、深さ0.12ｍである。他遺構との切り合い関係は認められない。

柱穴は主に住居の壁面付近で確認できて、中央部では疎らに確認できたが、いずれの柱穴が主柱穴かは判断つかなかった。調査区の壁面には壁溝の可能性がある小溝が僅かに確認できて、もう一方の壁面には小溝が確認できず、段状(テラス)になっていた。その段上からは石皿片を確認した。

遺構からは範囲確認調査の際の調査坑(TP4)から、縄文時代後期の西平式～太郎迫式土器併行期の土版が出土した。その他、磨石･敲石･打製石斧が出土した。

SB59竪穴住居(第11図)

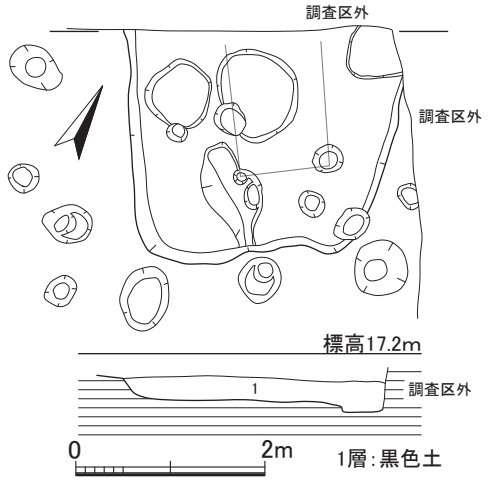
ZZ･ZY-100･1グリッドに位置し、隅丸方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は16.98ｍで、規模は長径2.85m以上、短径2.47ｍ、深さ0.25ｍである。他遺構との切り合い関係は認められない。

住居内からは支柱穴を含む柱穴も疎らに確認できたが、検出状況から主柱穴は2本柱以上で構成すると考えられる。土坑状の窪みも確認できるが炉であるのかの判断はつかなかった。

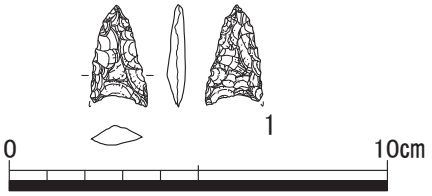
埋土からは縄文時代後期土器が多く出土しており、特に粗製土器が多い。その他、石鏃(1)や磨石･敲石が出土した。

SB59出土遺物(第12図)

1は安山岩製の石鏃である。抉りは浅い弧状で、長さが幅の2倍近い長三角形である。先端は小突起状の作り出しがみられる。



第11図　SB59竪穴住居実測図(S=1/80)



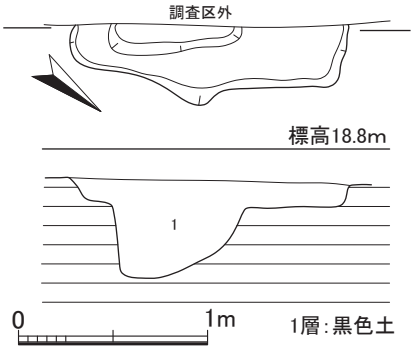
第12図　SB59出土遺物実測図(S=1/2)

２　土坑

SK07土坑(第13図)

C･D-99グリッドに位置し、長方形を呈する土坑である。検出面の標高は18.66ｍで、規模は長径1.45ｍ、短径0.42ｍ以上、深さ0.52ｍである。切り合い関係はSD06に切られて検出した。遺構の傍らには石皿が出土している。

埋土からは縄文土器片と思われるものが1点のみ出土した。

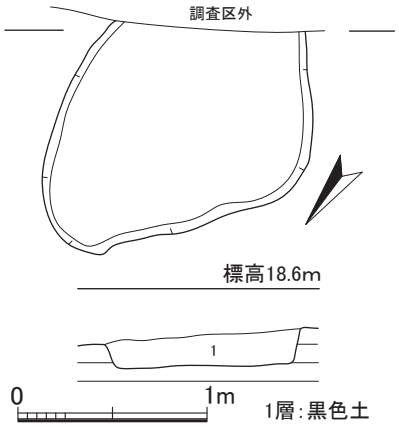


第13図　SK07土坑実測図(S=1/40)

SK09土坑(第14図)

C-100グリッドに位置し、楕円形を呈する土坑である。検出面の標高は18.33ｍで、規模は長径1.15ｍ以上、短径1.06ｍ、深さ0.17ｍである。他遺構との切り合い関係は認められない。

埋土には縄文時代後期の太郎迫式土器の土器片を含んでいた。



第14図　SK09土坑実測図(S=1/40)

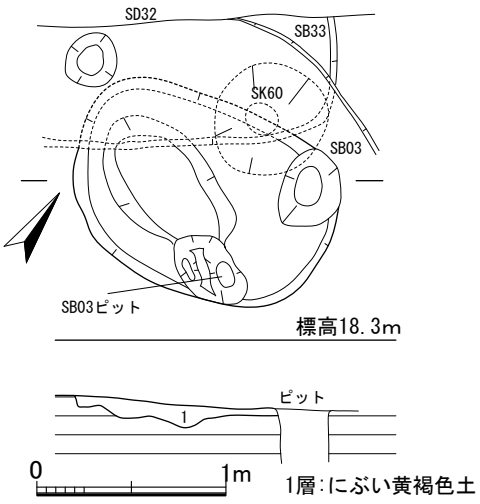
SK29土坑(第15図)

B-99･100グリッドに位置し、楕円形を呈する土坑である。検出面の標高は18.04ｍで、規模は長径1.41ｍ、短径1.07ｍ、深さ0.12ｍである。切り合い関係はSK60を切り、SB03･33に切られて検出した。SK60から出土した浅鉢(SK60(2))は当遺構から埋甕内に落ち込んで混入した可能性がある。

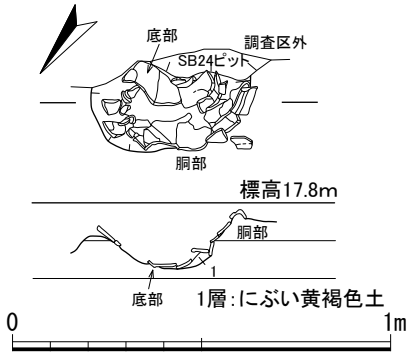
埋土からは縄文時代後期の鳥井原式土器(1)が出土した。

SK29出土遺物(第16図)

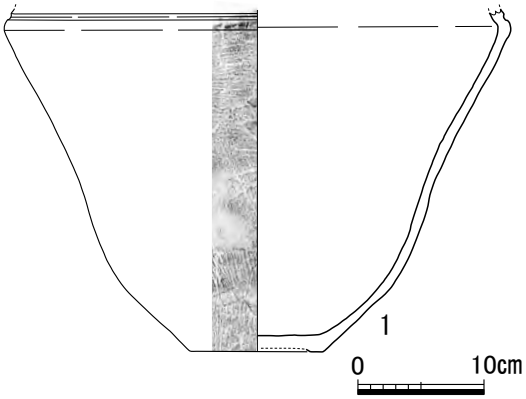
1は縄文時代後期の鳥井原式土器の小型浅鉢もしくは注口土器の可能性もある。形状から容器の用途があると考えられる。口縁部から屈曲部付近にかけての外面に凹線文どうしが接することにより視覚的に稜をなして見える稜線文を4条巡らせる。外面･底面にミガキ調整を行い、内面にナデを施す。



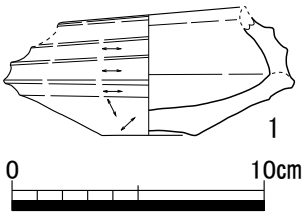
第15図　SK29土坑実測図(S=1/40)



第17図　SK40土坑実測図(S=1/20)



第18図　SK40出土遺物実測図(S=1/6)



第16図　SK29出土遺物実測図(S=1/3)

SK40土坑(第17図)

B-1グリッドに位置し、楕円形を呈する土坑である。土坑内には埋甕(1)を埋設する。検出面の標高は17.75mで、規模は長径0.43m、短径0.26m以上、深さ0.14mである。切り合い関係は土坑と埋甕の上半部をSB24に切られ、さらに下半部の半分をSB24の柱穴に截ち切られている。SB24は弥生時代と縄文時代の遺構が上下で重複している可能性があるため、SB24が縄文時代後期の住居であった場合には、その廃絶後に当遺構が埋設された可能性がある。

SK40出土遺物(第18図)

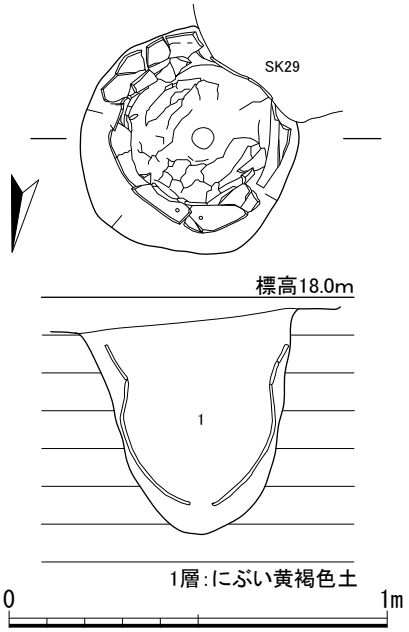
1は縄文時代後期の鳥井原式土器の埋甕(深鉢)である。胴部に凹線文を1条巡らせる。胴部から底部の外面に不定方向の条痕ケズリを施し、ナデ消さずに条痕文として文様を残す。内面はナデ調整を行う。外面には煤が付着する。底部はやや上げ底気味の平底である。

SK60土坑(第19図)

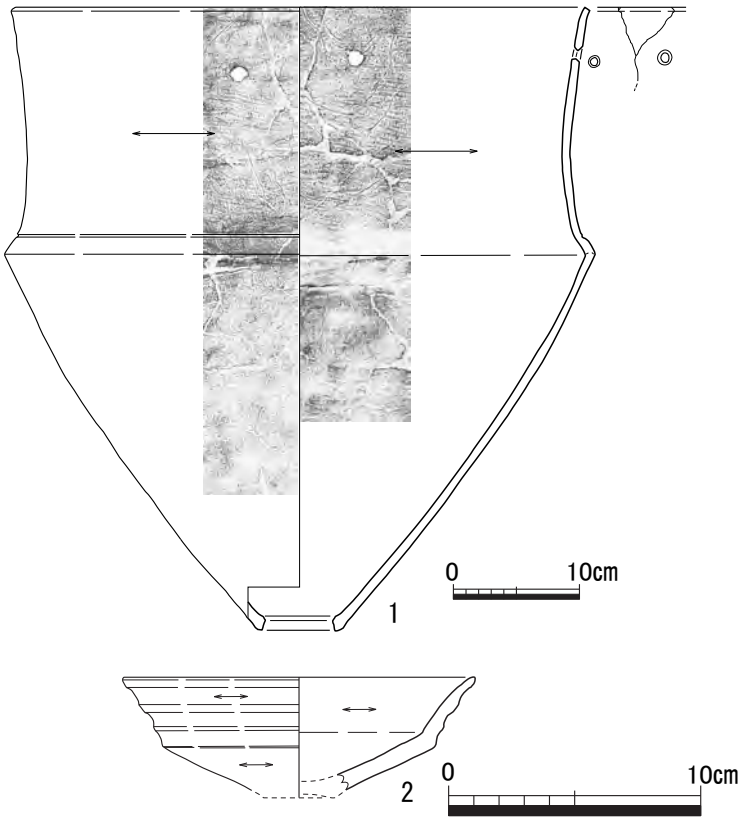
B-99･100グリッドに位置し、円形を呈する土坑である。土坑内には埋甕(1)を埋設する。検出面の標高は18.97mで、規模は長径0.60m、短径0.59m、深さ0.57mである。切り合い関係はSB03･33、SK29に切られている。当遺構から出土した浅鉢(2)はSK29から落ち込んだ混入品の可能性がある。またSB03･33の弥生時代中期の竪穴住居により、遺構上端を僅かに削平を受けている。

SK60出土遺物(第20図)

1は縄文時代後期の三万田式土器の埋甕(深鉢)である。胴部に沈線文を1条巡らせる。内外面ともに、胴部の屈曲部より上半に横方向のミガキ調整を行い、下半にナデを施す。口縁部の2つの穿孔はその間の割れを補強するための補修孔と考えられる。その補修孔の下付近に黒斑が見られる。外面は全体的に煤が付着し、疎らに赤色顔料が付着する。底部は平底で、内外面の両方向から打ちかいて円形に穿孔している。恐らく、水抜き孔と考えられる。2は縄文時代後期の鳥井原式土器の浅鉢である。口縁部から屈曲部付近にかけての外面に凹線文どうしが接することにより視覚的に稜を



第19図　SK60土坑実測図(S=1/20)



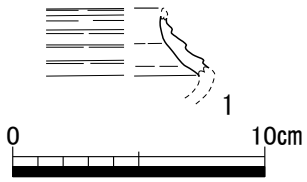
第20図　SK60出土遺物実測図(S=1/6･1/3)

なして見える稜線文を3条巡らせる。内外面にミガキ調整を行う。内面のみ全面に赤色顔料が付着するために顔料等を入れる容器の可能性もある。

その他の不明遺構出土遺物(第21図)

SX46出土遺物

1は縄文時代後期の鳥井原式土器の注口土器である。口縁部から屈曲部付近にかけての外面に凹線文どうしが接することにより視覚的に稜をなして見える稜線文を4条巡らせる。外面にミガキ調整を行い、内面にナデを施す。



第21図　SX46出土遺物実測図(1/3)

第２節　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は基本層序3(3a)層の遺物包含層を掘削後に、4層上面で確認できた。弥生時代の遺構は縄文時代と同じく4層上面で確認できたが、検出状況が縄文時代の遺構を切っているものが多い。

本調査で確認できた弥生時代の遺構は竪穴建物が14軒、土坑が8基、溝が2条、5～6条の溝状遺構からなる畠と考えられる溝状遺構群が1群、性格不明遺構が10基近くであった。

その竪穴建物は全てが住居と考えられる。土坑は8基の内、土壙墓が1基で、貯蔵穴2基であった。溝は2条で、集落内を区画し排水機能を備えている。ただし、SD16は溝状遺構群に加えているが、SD11～15に比べて方向や長さと言う点で異質であるため、SD06溝と同じ性格の溝の可能性もある。

１　竪穴建物

SB01竪穴住居(第22図)

A･B-1･2グリッドに位置し、円形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は17.40ｍで、規模は長径7.97ｍ、短径2.92ｍ、床面までの深さ0.22ｍ、貼床掘削後の深さ0.33ｍである。遺構の切り合い関係はSD05上層に僅かにSB01の周堤の一部が覆い被さるようにかかっているのみである。

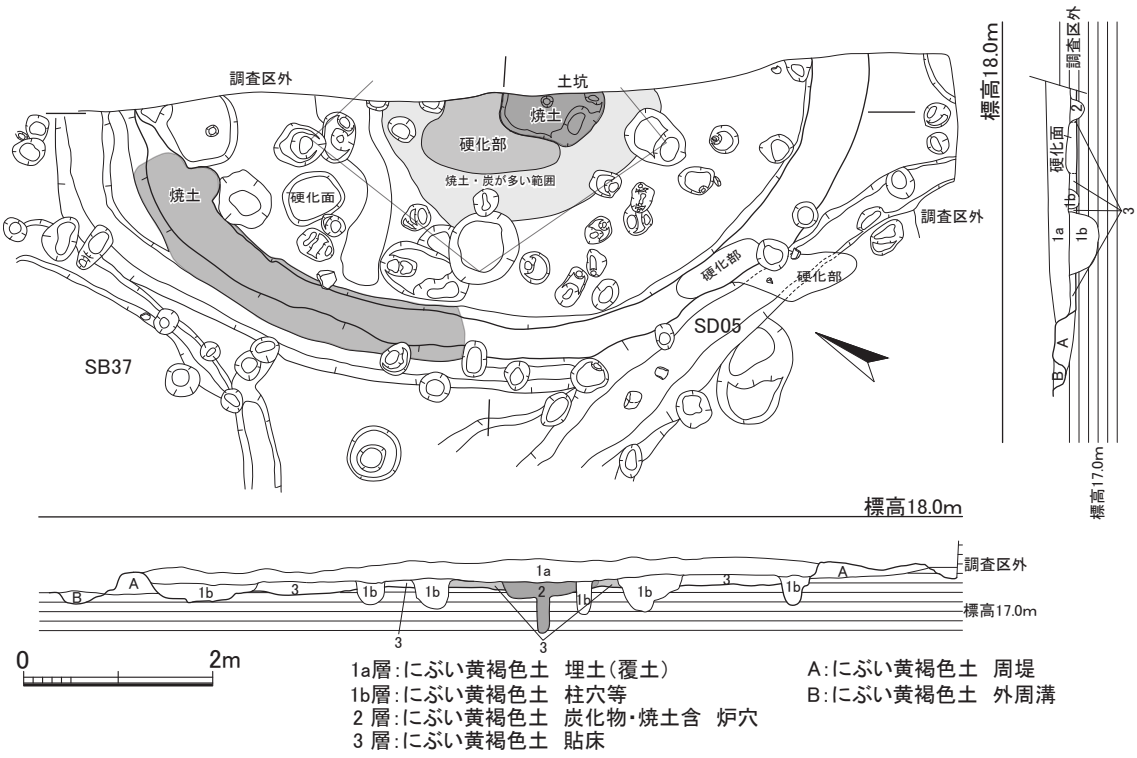
住居内は支柱穴を含む多柱穴であったが、検出状況から主柱穴は3本確認できた。その主柱穴の配置から調査区外にもう1本存在することが考えられ、4本柱で構成すると考えられる。それら主柱穴の中央には焼土や炭化物を多く含む土坑状に炉と考えられる遺構が確認できた(SB01の2層)。この土坑を取り囲むように、その周囲は極度に硬化していた。住居の床面は貼床(SB01の3層)が確認できており、硬化した面が広がる。本調査で貼床が確認できたのは当遺構のみである。床面は特に炉を中心に炭化物や焼土が広がり、壁面付近へ向かうにつれて少なくなる。壁溝は確認することができなかった。

本報告で特筆すべき事は当遺構において周堤と外周溝が確認できたことである。周堤は円形の竪穴住居を取り囲み、その外側に外周溝が巡る。周堤は断面形状が台形状を呈し、周堤には焼土や炭化物を含む。周堤の長さ約4ｍに渡り被熱により赤化したと思われる硬化した部分がある。被熱を受けた原因は不明である。外周溝は排水的機能以外に、住居建築段階において周堤を造るために土採りを兼ねていた可能性がある。

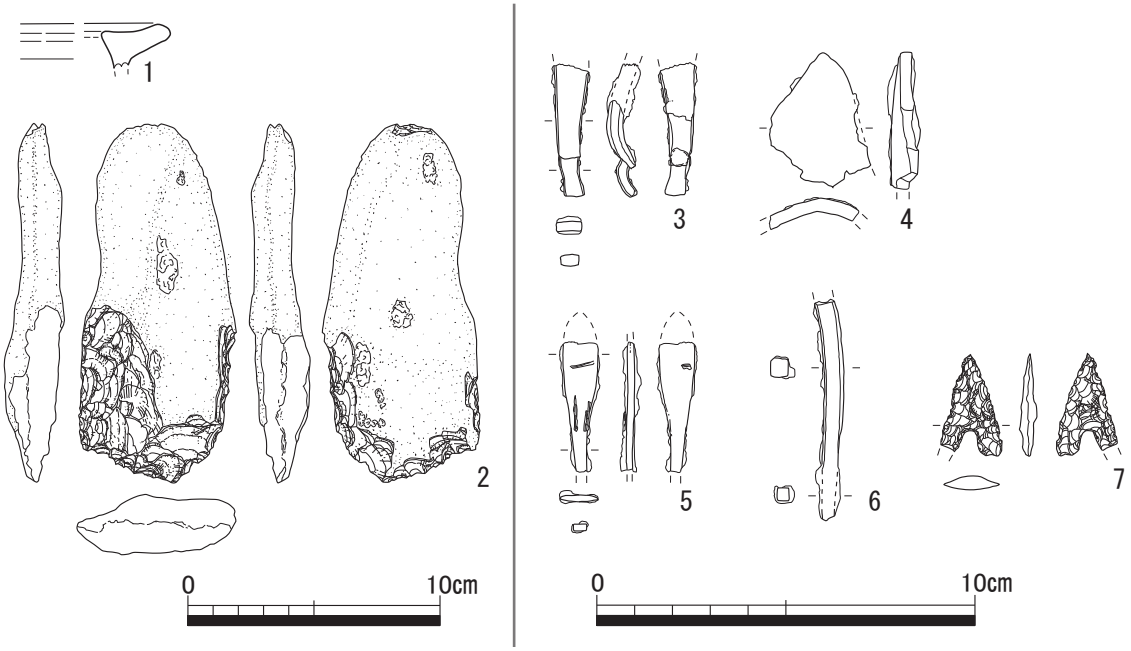
遺構からは床面より弥生時代中期の須玖Ⅰ式土器併行の黒髪式土器(1)が出土した。その他、埋土からは打製石斧(2)や鉄鏃･鉄製品(3～6)が出土した。周堤盛土からは石鏃(7)が出土したが住居を造る際に混入したと考えられる。また弥生時代中期の土器の他に、縄文土器が混入して出土した。

SB01出土遺物(第23図)

1は弥生時代中期の須玖Ⅰ式土器併行の中九州系の黒髪式土器の甕である。鋤先状(逆L字状)口縁部が内湾気味に上向き、器壁が肥厚して、口唇部がやや丸みをもつ。内外面にヨコナデを施す。2は石斧の形状に類似した水磨礫を素材とした打製石斧である。先端部に刃部加工を施している。両側縁の一部には刃潰し状の加工を行っている。3は鉄鏃と思われる。鏃身部を欠損している。茎部は折れたものがサビにより再付着している。断面長方形である。4は不明鉄製品で、鉄鏃の鏃身部に似た形状だが、刃部はなく、厚さ3㎜ほどである。横断面は僅かに屈曲部を持ちカーブしている。5･6は鉄鏃である。5は小形な柳葉形を呈し、鏃身先端部と茎部の一部を欠損している。僅かに樹皮が付着している。6は茎部である。断面はほぼ正方形である。6は4と同じ地点から出土したた



第22図　SB01竪穴住居実測図(S=1/80)



第23図　SB01出土遺物実測図(S=1/3･1/2)

め、同一個体の可能性もある。7は黒色黒曜石製の石鏃である。長三角形を呈し、抉りは深いU字形で、片脚先端を欠損している。

SB02竪穴住居(第24図)

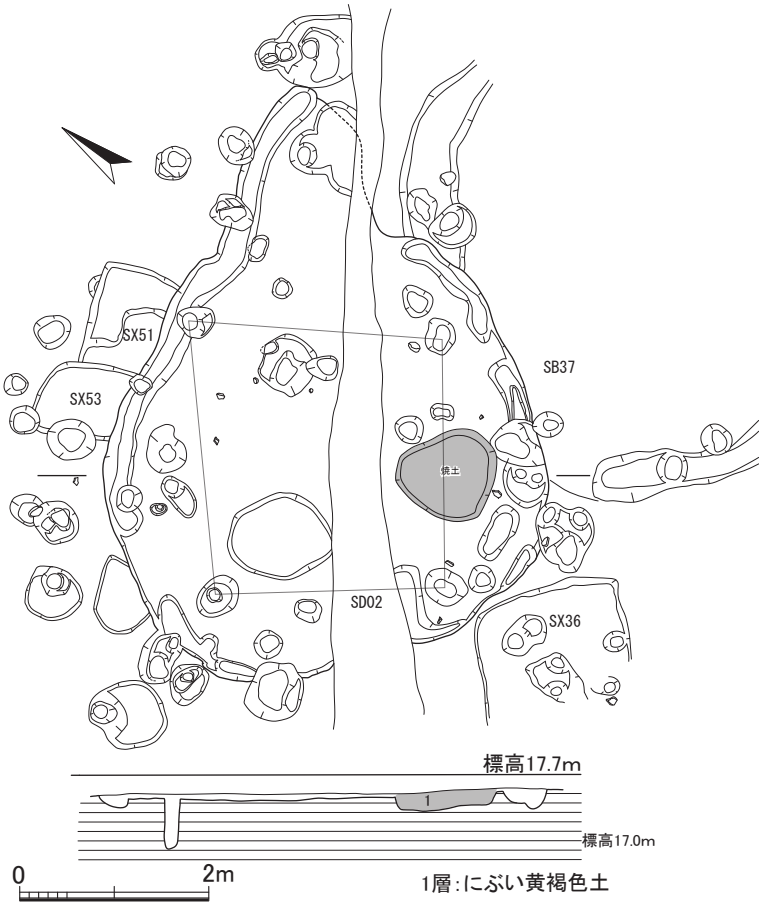
A-100・1グリッドに位置し、基本形状は円形(厳密には柄鏡形)を呈する竪穴住居である。検出面の標高は17.57ｍで、規模は長径6.27ｍ、短径4.70ｍ、深さ0.08ｍである。遺構の切り合い関係はSX51・53(樹痕)を切り、SD32の近世溝に切られて検出した。

住居内は支柱穴を含んで疎らに柱穴が点在し、検出状況から主柱穴は4本柱で構成すると考えられる。住居の外周には竪穴外柱穴が多数確認できた。遺構の壁面には壁溝の可能性がある小溝が確認できた。住居の片隅には焼土や炭化物を多く含む土坑状に炉と考えられる遺構が確認できた。

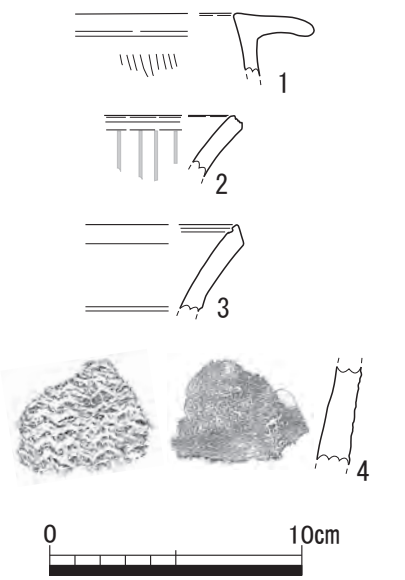
遺構からは床面より弥生時代中期の須玖Ⅱ式土器(1・2)が出土している。埋土からは石皿か台石片が出土している。その他、縄文時代後期土器(3)が出土し、縄文時代早期の押型文土器(4)が床下より出土したが、いずれも混入である。

SB02出土遺物(第25図)

1・2は弥生時代中期の須玖Ⅱ式土器である。1は甕で、鋤先状口縁部は長くのびて下に傾き、器壁が薄い。外面にハケメ調整を行い、内面と口縁上面にヨコナデを施す。2は広口壺で、口縁部が外反し、稜角付口唇部である。外面はヨコナデ後に暗文を施し、内面にヨコナデを施す。3は縄文時代後期の太郎迫式土器の鉢である。内外面に丁寧なナデを施す精製無文土器である。口縁部文様帯は無文であるが、赤色顔料が確認できる。胴部には沈線文が巡る。4は縄文時代早期の弘法原式土器の円筒形深鉢である。外面に横方向に山形文の押型文を施し、内面はヨコナデを施す。内面から断面にかけて1cm程の砂粒もしくは種子の痕跡の窪みが見られる。



第24図　SB02竪穴住居実測図(S=1/80)



第25図　SB02出土遺物実測図(S=1/3)

SB03竪穴住居(第26図)

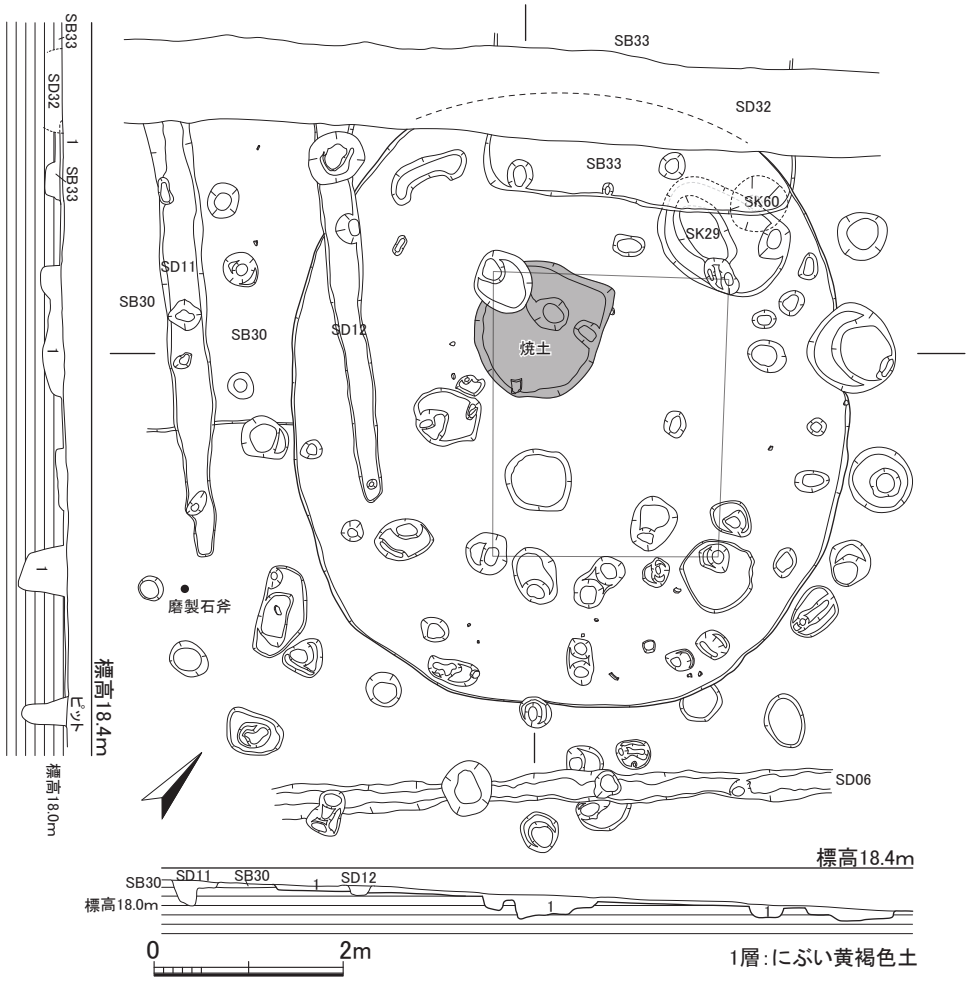
B・C-99・100グリッドに位置し、円形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は18.25ｍで、規模は長径5.97ｍ以上、短径5.81ｍ、深さ0.06ｍである。遺構の切り合い関係はSB30・33、SK29・60を切り、SD12に切られて検出した。

住居内は支柱穴を含んで疎らに柱穴が点在し、検出状況から主柱穴は4本柱で構成すると考えられる。住居の外周には竪穴外柱穴が多数確認できた。遺構の壁面には壁溝の可能性がある小溝が部分的に確認できた。4本の主柱穴の内側には炉の可能性がある2つの土坑を確認した。大型の土坑内には僅かに焼土や炭化物を含み、傍らに石皿が出土した。

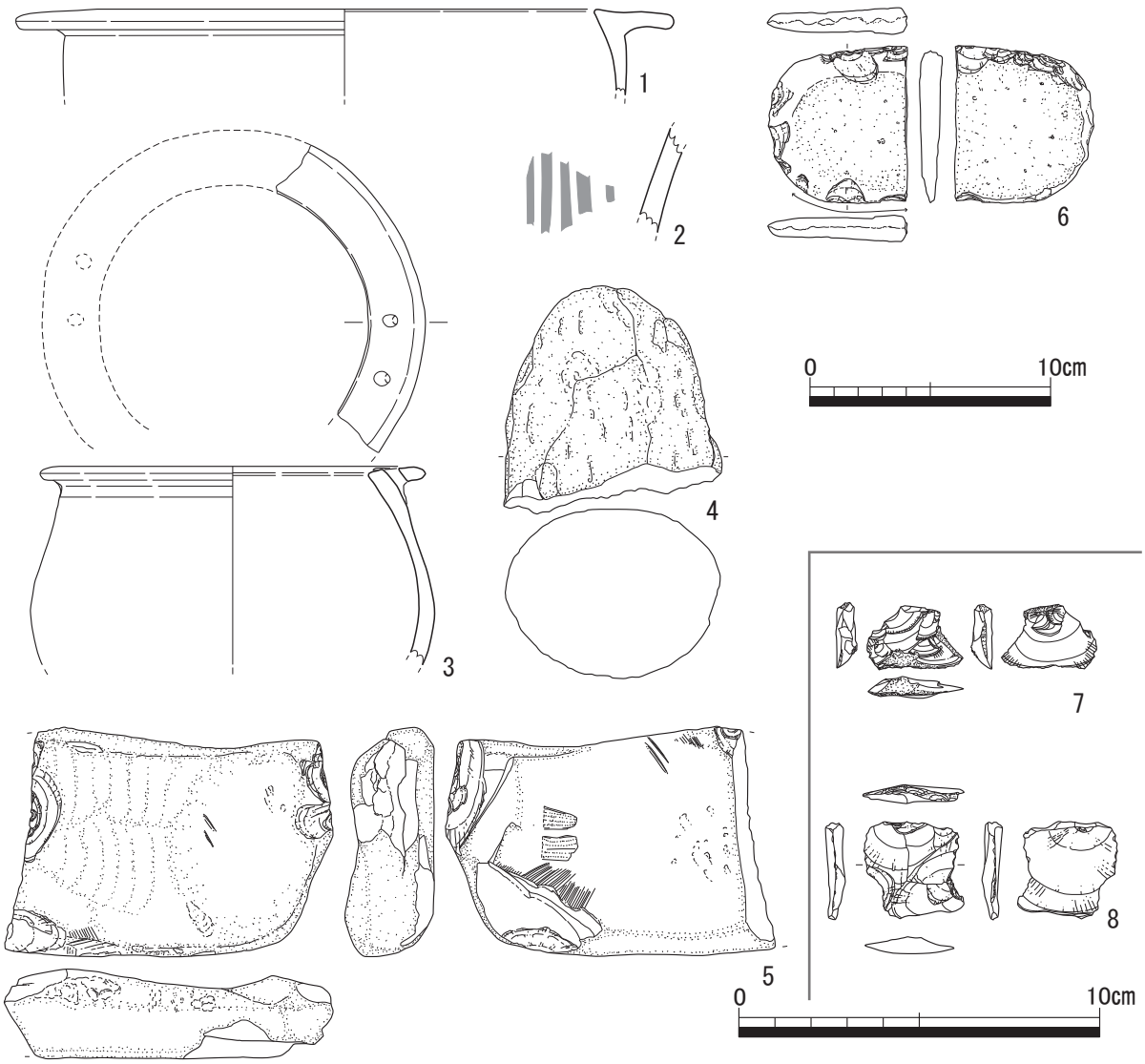
遺構からは床面より、弥生時代中期の須玖Ⅱ式土器(1･2)が出土した。また柱穴より須玖Ⅰ～Ⅱ式土器の丹塗土器(3)が出土している。埋土からは石皿(5)や石包丁様石器(6)などが出土している。また縄文土器が混入して出土した。

SB03出土遺物(第27図)

1･2は弥生時代中期の須玖Ⅱ式土器である。1は甕で、鋤先状口縁部は長くのびてやや下に傾き、器壁が薄い。内外面にヨコナデを施す。口唇部付近に煤が付着する。2は広口壺で、口縁部が外反する。外面にナデ施文後に丹塗と暗文を施し、内面にナデを施す。3は弥生時代中期の須玖Ⅰ～Ⅱ式土器の無頸壺である。内外面はナデ調整後に丹塗を施し、口縁部に2個の穿孔を施す。4は安山岩の円礫で、破損か折断により1/2ほどを欠損している。住居に伴う搬入品と思われ、被熱による変色やクラックがみられることから支脚などに使用された可能性も考えられる。5は長方形の砂岩の水磨礫を素材とした石皿である。使用により中央がすり減っている。両面に被敲打痕や敲打痕が見られ、裏面は平坦な滑面である。多目的に使用されたと思われる。6は石包丁様石器である。安山岩の薄い板状節理片を素材としている。下縁の片面から簡単な刃部加工を施し、上縁は刃潰し状に加工が施されており、折断により大きさを整えている。周縁やエッジ部分が著しく摩耗しており、



第26図　SB03竪穴住居実測図(S=1/80)



第27図　SB03出土遺物実測図(S=1/3･1/2)

平坦面の一部にも摩耗がみられる。7･8は微細剥離を有する剥片である。7は黒曜石の自然面打面から剥離された小形の不定形剥片で、正面の末端部分に微細剥離がみられる。8は無斑晶質玄武岩の不定形剥片で、縁辺部に微細剥離が散発的にみられる。

SB10竪穴住居(第28図)

C-99グリッドに位置し、円形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は18.57ｍで、規模は長径4.16m、短径3.80m以上、深さ0.10ｍである。遺構の切り合い関係はSK19に切られて検出した。

住居内は支柱穴を含む多柱穴であったが、検出状況から主柱穴は4本柱で構成する。4本の主柱穴の中央には小型な炉の可能性がある小穴が確認できた。

埋土からは弥生土器が出土しており、床面からは石包丁様石器(2)が出土した。また埋土からは三万田式土器や鳥井原式土器、縄文時代後期の高坏(1)が出土したが混入と考えられる。

SB10出土遺物(第29図)

1は縄文時代後期の三万田式土器である。高坏の脚部で、表面はナデ調整を行い、正面に小さな刺突文を施し、裏面に細線による文様を施す。2は安山岩の板状節理による岩片を素材とした石包丁様石器である。研磨により刃部を形成するものの、摩耗により研磨痕は消失している。磨製石斧

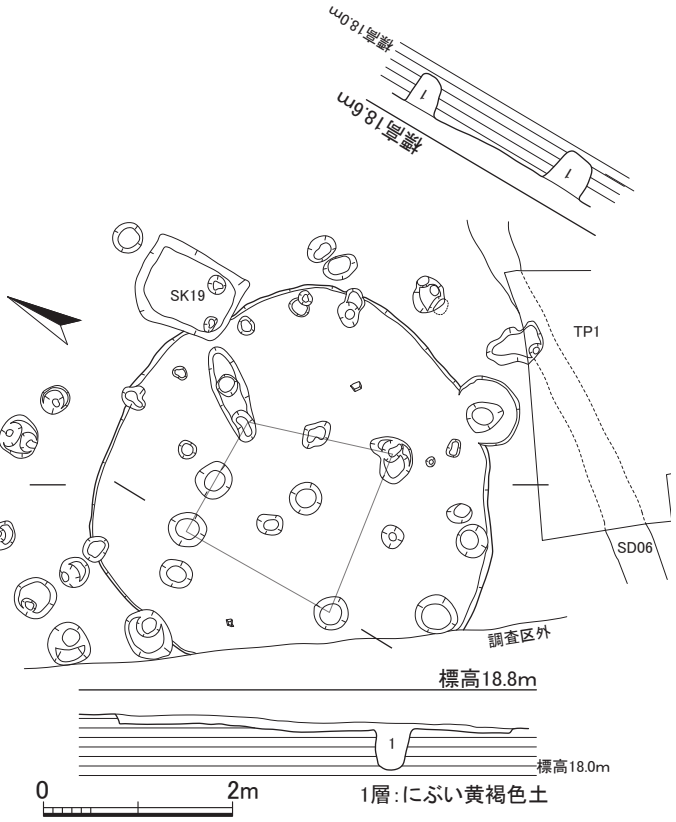
の転用品と思われる。両面の節理による礫面には、使用痕のほかに一部摩耗がみられる。

SB24竪穴住居(第30図)

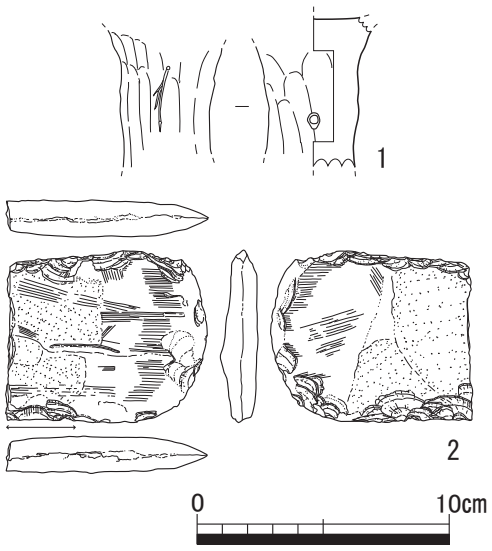
B-1グリッドに位置し、不定形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は17.85ｍで、規模は長径6.15ｍ、短径2.11ｍ以上、深さ0.19ｍである。他遺構との切り合い関係は認められず、土層でも確認できなかったが、出土状況･遺物から同位置に縄文時代の住居を削平して造られた可能性がある。そのため住居が不定形を呈していると考えられる。

住居内は支柱穴を含む多柱穴であったが、検出状況から主柱穴は3本確認できた。その主柱穴の配置から調査区外にもう2～3本存在することが考えられて、5･6本柱で構成する多主柱穴と考えられる。確認できた3つの主柱穴の内、2つの柱穴で根固の礫を検出した。住居の外周には杭穴が列状に多数確認できた。この杭穴は周堤の構造に関する可能性が高い。主柱穴の中央には2つの礫が確認できており、調査区外に続く炉の一部の可能性がある。

埋土からは弥生時代中期の須玖Ⅱ式土器(1)や石皿(2)が出土した。また縄文時代後期の太郎迫式土器から鳥井原式土器が多く混入していた。



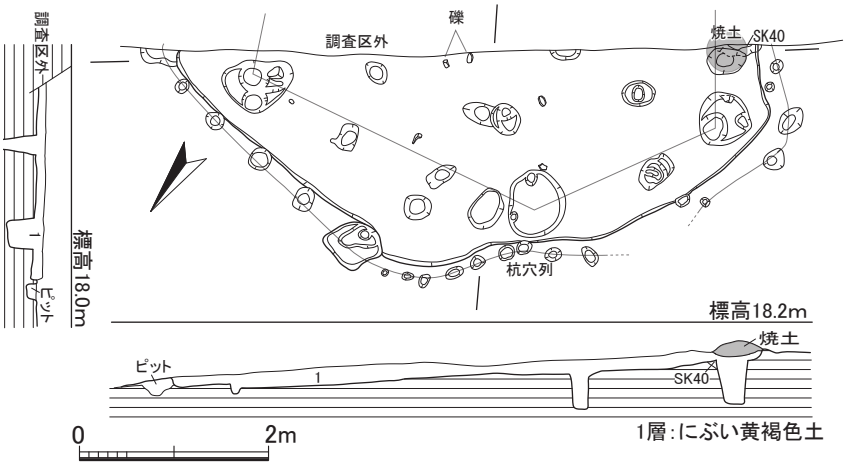
第28図　SB10竪穴住居実測図(S=1/80)



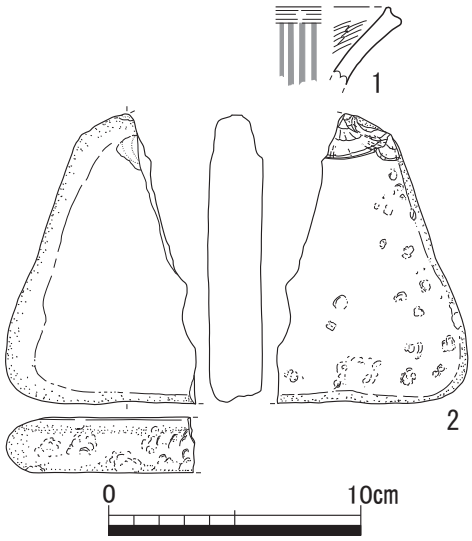
第29図　SB10出土遺物実測図(S=1/3)

SB24出土遺物(第31図)

1は弥生時代中期の須玖Ⅱ式土器の広口壺である。口縁部が外反し、稜角付口唇部である。外面はナデ調整後に丹塗と暗文を施し、内面はミガキ調整後に丹塗を施す。2は砂岩の扁平な水磨礫を素材とした石皿である。破損により中央部は失われている。上下平坦面は滑面を有し、下面と側面に被敲打痕がみられる。また撃打による破砕もあり、多目的に使用されている。



第30図　SB24竪穴住居実測図(S=1/80)



第31図　SB24出土遺物実測図(S=1/3)

SB30竪穴住居(第32図)

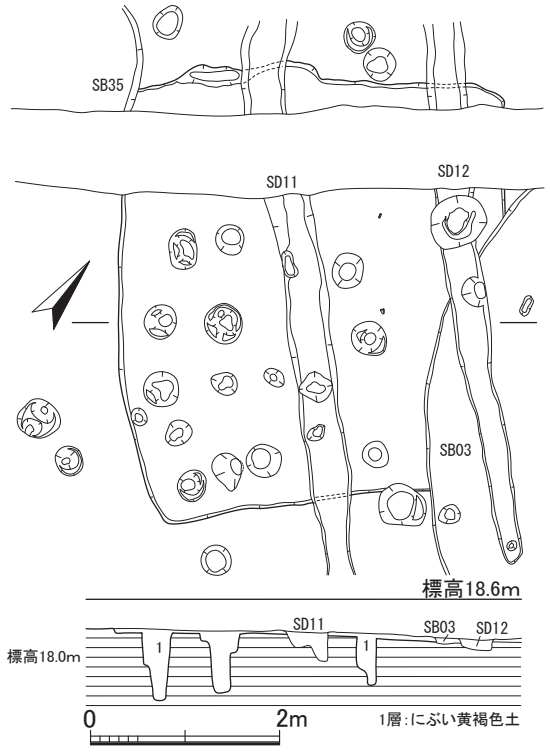
B･C-99グリッドに位置し、長方形を呈する竪穴建物で住居もしくは他住居と特徴が異なるため、何等らかの施設の建物の可能性もある。検出面の標高は18.35mで、規模は長径4.71m、短径3.41m以上、深さ0.06mである。切り合い関係はSB03･35、SD11･12･32に切られて検出した。

住居内からは多くの柱穴が検出されたが、何れが主柱穴になるかは判断つかなかった。

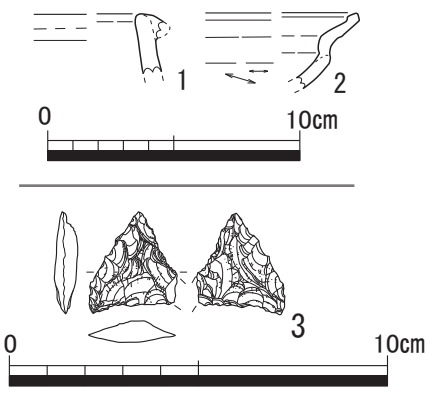
埋土からは弥生時代中期の城ノ越式土器(1)が出土し、縄文時代晩期の古閑3式～黒川式土器古段階の土器(2)が混入して出土した。その他、石鏃(3)や磨石･敲石が出土した。

SB30出土遺物(第33図)

1は弥生時代中期の城ノ越式土器の甕である。口縁部は断面三角形で、口縁部の内面上部から外面にかけてヨコナデを施す。口縁部の内面下部に斜ナデを施す。2は縄文時代晩期の清田編年の古閑3式土器または黒川式土器古段階と考えられる。口縁部の外面にヨコナデを施し、内面及び胴部の外面にミガキを施す。また、外面に赤色顔料が付着する。3は無斑晶質玄武岩製の石鏃の未製品である。器体の整形･加工の途中で脚の一部を破損したものと思われる。先端部付近に瘤が残っており、減厚も完成していない。



第32図　SB30竪穴住居実測図(S=1/80)



第33図　SB30出土遺物実測図(S=1/3･1/2)

SB33竪穴住居(第34図)

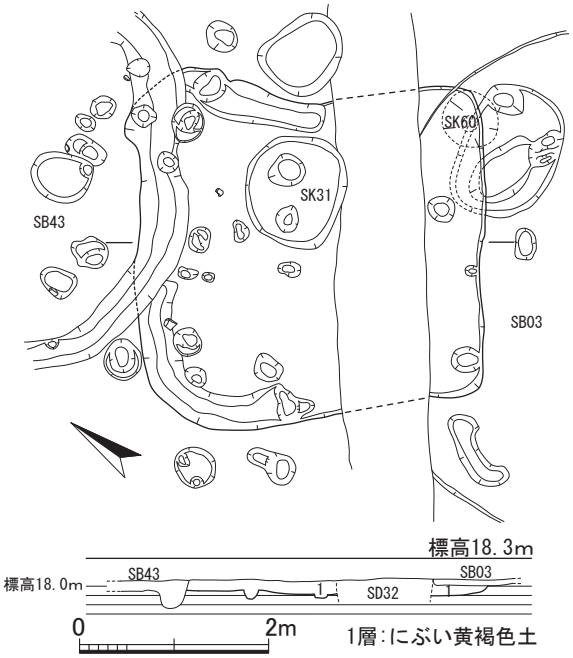
B-99･100グリッドに位置し、隅丸方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は18.13ｍで、規模は長径3.64ｍ、短径3.30ｍ、深さ0.13ｍである。切り合い関係はSB30･43、SK29･31･60、SD32に切られて検出した。

住居内からは疎らに柱穴が検出されたが、遺構の中央を近世のSD32やSK31に切られていることもあり、何れが主柱穴になるかは判断つかなかった。同様の理由から炉も確認できなかった。住居の床面には焼土や炭化物を多く含み、壁面には壁溝が巡る。

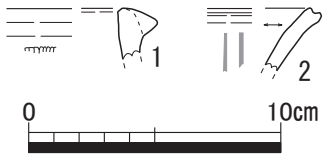
埋土からは弥生時代中期の城ノ越式土器(1)が出土している。弥生時代中期の須玖Ⅱ式土器(2)が混入して出土する。その他、磨石･敲石などが出土した。

SB33出土遺物(第35図)

1は弥生時代中期の城ノ越式土器の甕である。口縁部は断面三角形でヨコナデを施す。その下位にハケメ調整を行い、内面にナデを施す。2は弥生時代中期の須玖Ⅱ式土器の広口壺である。口縁部が外反し、稜角付口唇部である。外面はヨコナデ調整後に暗文を施すが、残存状況が悪いため、丹塗は認められない。内面は横方向のミガキ調整後に丹塗を施す。



第34図　SB33竪穴住居実測図(S=1/80)



第35図　SB33出土遺物実測図(S=1/3)

SB35竪穴住居(第36図)

B-98･99グリッドに位置し、隅丸方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は18.38ｍで、規模は長径2.52ｍ、短径1.65ｍ以上、深さ0.06ｍである。遺構の切り合い関係はSB30を切り、SD32に切られて検出した。

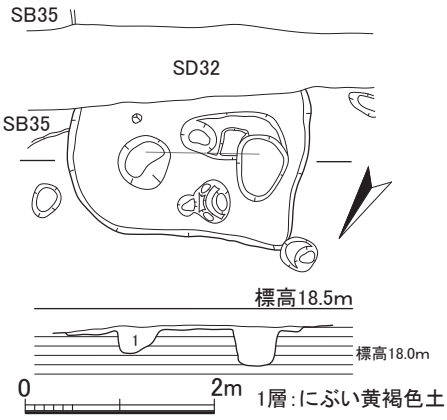
住居内からは疎らに柱穴を検出し、その内、検出状況から主柱穴は2本柱で構成すると考えられる。

埋土からは弥生土器が出土しており、縄文土器が混入して出土した。その他、磨石･敲石が出土した。

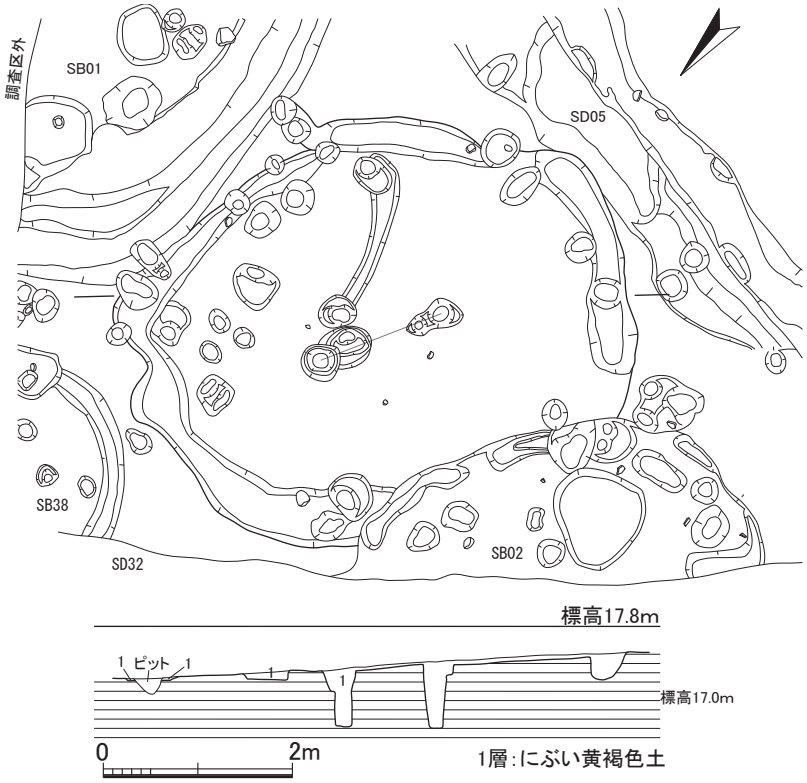
SB37竪穴住居(第37図)

A-1グリッドに位置し、楕円形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は17.54ｍで、規模は長径5.37ｍ、短径4.51ｍ、深さ0.05ｍである。遺構の切り合い関係はSB30を切り、SD32に切られて検出した。

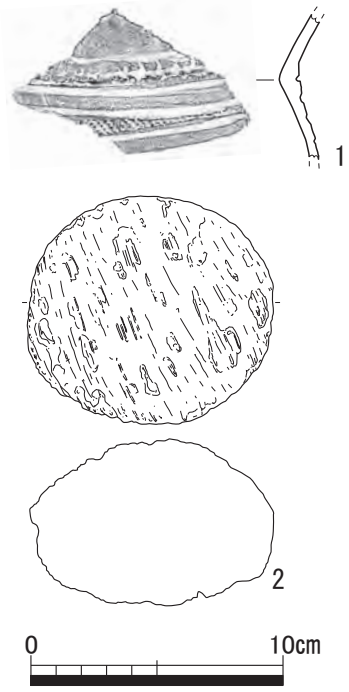
住居内は疎らに支柱穴を含む柱穴を検出し、その内、検出状況から主柱穴は2本柱で構成すると考えられる。竪穴住居の壁面には壁溝が巡る。壁面付近からは石皿や焼石を検出した。床面からは中央から壁面に向かって延びる小溝を検出した。



第36図　SB35竪穴住居実測図(S=1/80)



第37図　SB37竪穴住居実測図(S=1/80)



第38図　SB37出土遺物実測図(S=1/3)

埋土からは弥生土器が出土しており、縄文時代後期の西平式土器(1)が混入して出土した。その他、軽石(2)が出土した。

SB37出土遺物(第38図)

1は縄文時代後期の西平式土器の鉢である。外面はミガキ調整を行い、4条の沈線を巡らせて、縄文を施す。その後、一部の縄文を残して、それ以外をナデ消している。また屈曲する頸部の外面には貝殻による刺突列点文を巡らせる。内面はナデ調整を施す。外面に煤が付着する。2はボール状の軽石である。搬入品であるが用途は不明である。被熱によりうすく変色している部分があることから、支脚的に使用されたことも考えられる。軽石は1区で大量に出土したものの当調査区から出土した軽石はこの遺物を除けば僅か2点であった。

SB38竪穴住居(第39図)

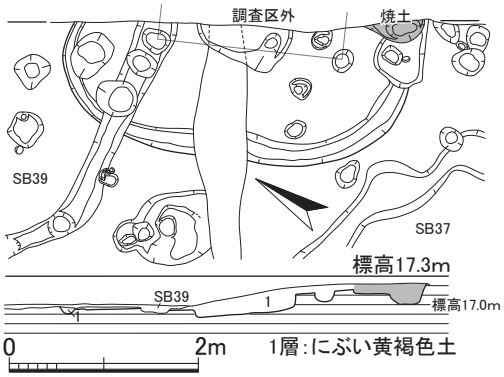
A･ZZ-1グリッドに位置し、楕円形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は17.19ｍで、規模は長径3.74m、短径1.51m以上、深さ0.07ｍである。遺構の切り合い関係はSB39･SD32に切られて検出した。

住居内からは疎らに柱穴が確認できたが、検出状況から主柱穴は2本確認できた。その主柱穴の配置から調査区外にもう2本存在することが考えられ、4本柱で構成すると考えられる。遺構の壁面には壁溝が巡る。推定4本の主柱穴の中央には炉の可能性がある土坑を確認した。土坑内には僅かに焼土や炭化物が確認できた。また遺構内からは焼土を多く検出した。

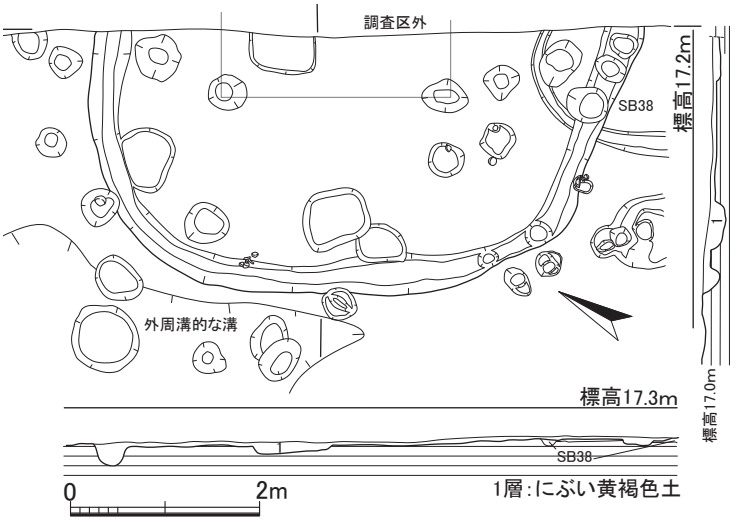
埋土からは弥生土器が出土しており、縄文土器が混入して出土した。

SB39竪穴住居(第40図)

ZZ-1グリッドに位置し、円形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は17.14ｍで、規模は長径



第39図　SB38竪穴住居実測図(S=1/80)



第40図　SB39竪穴住居実測図(S=1/80)

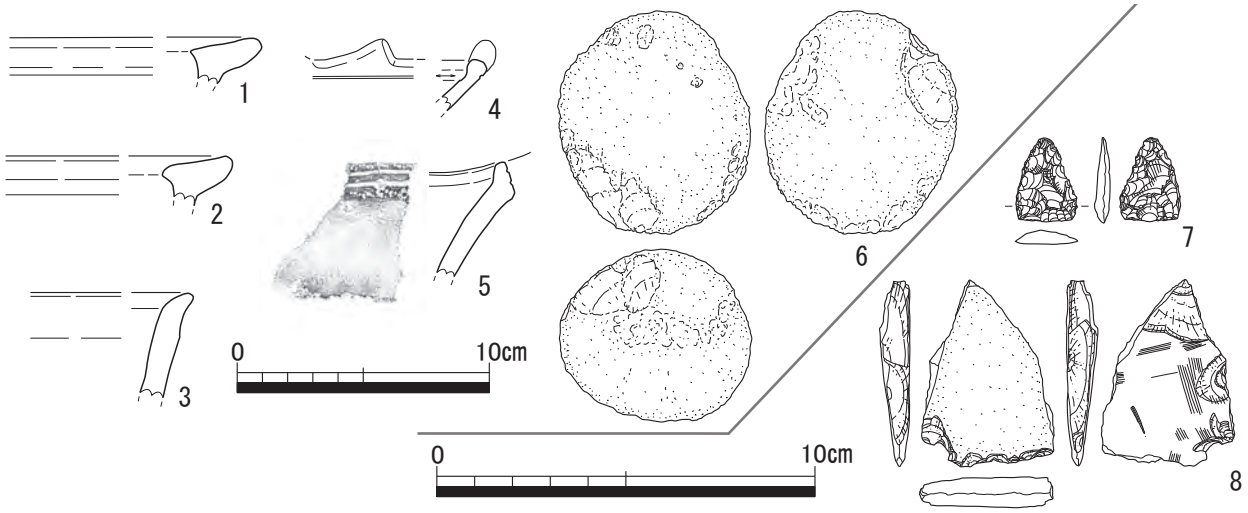
5.80m、短径2.71m以上、深さ0.06mである。遺構の切り合い関係はSB38を切って検出した。

住居内は支柱穴を含む多柱穴であったが、検出状況から主柱穴は2本確認できた。その主柱穴の配置から調査区外にもう2本存在することが考えられ、4本柱で構成すると考えられる。推定4本の主柱穴の内側には炉の可能性がある土坑を確認した。しかし、土坑内には焼土や炭化物といった物が確認できなかった。遺構の壁面には壁溝が巡る。住居の外周には竪穴外柱穴が多数確認できた。また住居外の西側には溝状の窪みが確認できており、検出状況から外周溝的な性格の溝と考えられる。当住居の壁溝から外周溝的な溝までの間が、僅かに帯状の堤になっていることから、周堤があった可能性が考えられる。

遺構からは住居の壁面付近の床面より弥生時代中期の須玖Ⅰ式土器併行の中九州系の黒髪式土器(1･2)や石鏃が出土した。その他、弥生時代中期の土器(3)が集中して出土した。また縄文時代後･晩期の太郎迫式(5)･黒川式土器(4)が混入している。磨石や敲石(6)も出土した。

SB39出土遺物(第41図)

1･2は弥生時代中期の須玖Ⅰ式土器併行の中九州系の黒髪式土器の壺もしくは高坏である。壺の可能性が高い。鋤先状(逆L字状)口縁部が上向き、内面に若干突出する。器壁が肥厚して、口唇部がやや丸みをもつ。1は内外面にナデ調整を行う。1は内面には丹塗を施し、外面は残存状況が悪く確認できない。2は内外面にナデ調整を行い、外面に黒色顔料を施している可能性がある。3は器種や時期が明確でないが、鉢か器台の可能性がある。時期に関しては鉢であれば弥生時代中器の城ノ越式土器で、器台であれば出土状況も含めて1･2に併行する須玖Ⅰ式土器の頃のものと考えられる。内外面にヨコナデを施す。4は縄文時代後期の黒川式土器の浅鉢である。口縁部にヒレ状突起を付し、内外面にミガキを施し、沈線文を1条巡らせる。5は縄文時代後期の太郎迫式土器の鉢である。口縁部は波状口縁で、内外面にミガキ調整を行う。口縁部の文様帯に2条の沈線を巡らせる。その文様帯に貝殻による疑似縄文を施し、沈線間をナデ消す。外面のみ煤が付着する。6は安山岩製の敲石である。敲打痕･被敲打痕がみられる。7は平基の黒曜石製石鏃である。裏面に主要剥離面を残す。先端部は二次加工により丸く整形されている。再調整加工が一側辺にとどまっていることから、未製品やサイドブレイド的な用途の可能性もある。8は安山岩の非常に薄い板状節理の岩片を素材としたスクレイパーである。二辺を折断して三角形に器体整形し、残りの一辺に片側から刃部加工を施している。擦痕らしきものがみられ、掻･削器のほかに農工具の可能性もある。



第41図　SB39出土遺物実測図(S=1/3･1/2)

SB43竪穴住居(第42図)

A･B-99グリッドに位置し、基本形状は楕円形(厳密には柄鏡形)を呈する竪穴住居である。検出面の標高は18.02ｍで、規模は長径4.66ｍ、短径3.77ｍ、深さ0.12ｍである。遺構の切り合い関係はSB33を切り、SD16に切られて検出し、SX47が付帯する。

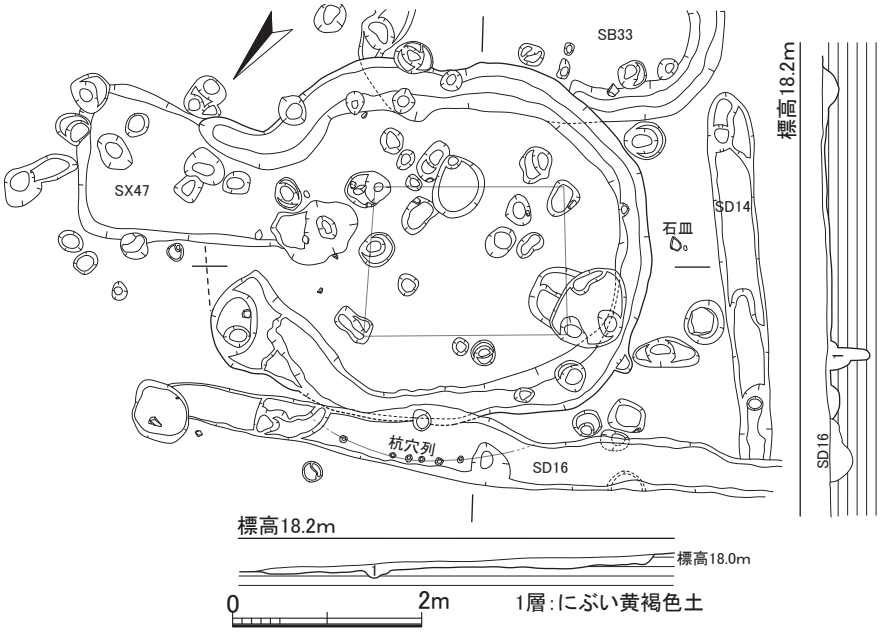
住居内は支柱穴を含む多柱穴であったが、検出状況から主柱穴は4本柱で構成すると考えられる。主柱穴からはいずれも根固めの礫が出土した。住居の外周には竪穴外柱穴が確認できた。遺構の壁面には壁溝が巡る。住居の中央からやや外れて土坑状に炉の可能性がある遺構が確認できた。その土坑からは焼土や炭化物が確認できなかった。SD16河床からは杭穴が列状に検出できた。この杭穴は周堤の構造に関する可能性が高い。SX47は壁溝の配置から考えて、当遺構に付帯する出入口施設の可能性がある。住居の屋外の西側には石皿が出土している。

埋土の床面からは弥生時代中期の城ノ越式土器(1)が出土して、壁溝からも弥生土器が出土した。また縄文土器の太郎迫式土器が混入して出土した。その他、石包丁様石器(2)や磨石が出土した。

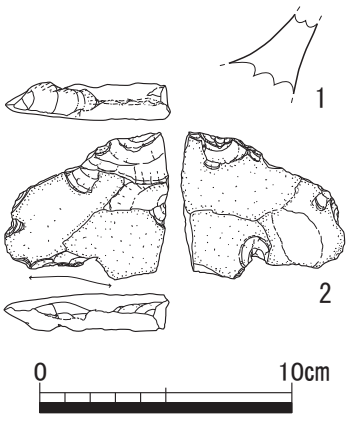
SB43出土遺物(第43図)

1は弥生時代中期の城ノ越式土器の甕である。内外面にナデを施す厚底の底部である。

2は安山岩製の石包丁様石器である。節理に沿った板状の岩片素材に数ヶ所撃打を加えて刃部を作出して



第42図　SB43竪穴住居実測図(S=1/80)



第43図　SB43出土遺物実測図(S=1/3)

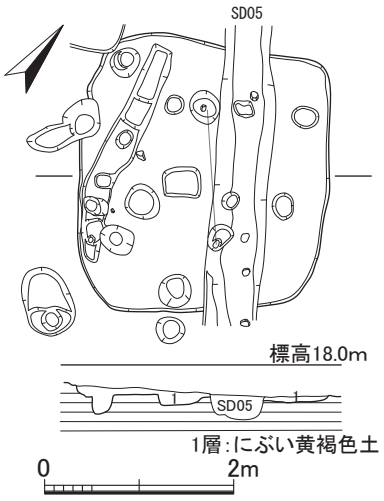
いる。一辺を折断して大きさを整え、他の二辺には部分的に平坦部を作出している。また表裏の節理面には摩耗か研磨によると思われる滑面化がみられる。磨製石斧の刃部のような部分もあり、他の石包丁様石器とは少し異なる。

SB50竪穴住居(第44図)

A-100グリッドに位置し、隅丸方形を呈する竪穴住居である。検出面の標高は17.71ｍで、規模は長径2.95ｍ、短径2.64ｍ、深さ0.12ｍである。遺構の切り合い関係はSD05に切られて検出した。

住居内は疎らに柱穴が確認できたが、検出状況から主柱穴は2本柱で構成すると考えられる。片方の主柱穴からは根固めの礫が出土した。

埋土からは弥生土器が出土しており、縄文土器が混入して出土した。また磨石が出土した。

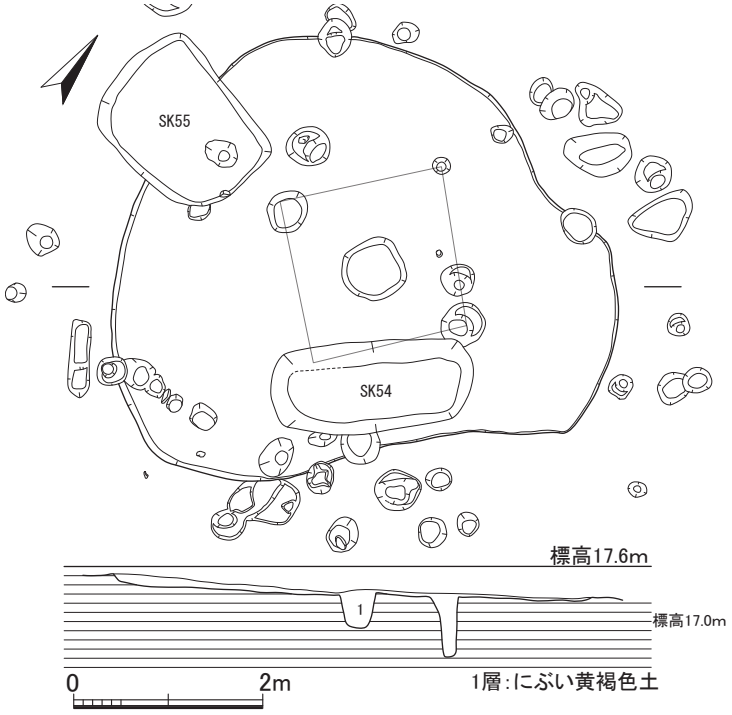


第44図　SB50竪穴住居実測図(S=1/80)

SB52竪穴住居(第45図)

ZZ･A-100グリッドに位置し、部分的に削平を受けているが本来、円形を呈していたと思われる竪穴住居である。検出面の標高は17.50ｍで、規模は長径5.31ｍ、短径4.65ｍ、深さ0.12ｍである。遺構の切り合い関係はSK54･55に切られて検出した。

住居内は支柱穴を含む多柱穴であったが、検出状況から主柱穴は4本柱で構成すると考えられる。住居の外周には竪穴外柱穴が多数確認できた。遺構の壁面には壁溝が巡る。検出状況から主柱穴は2本確認できた。その主柱穴の配置から調査区外にもう2本存在することが考えられ、4本柱で構成すると考えられる。推定4本の主柱穴の内側には炉の可能性がある土坑を確認した。しかし、土坑内には焼土や炭化物といった物が確認できなかった。住居外の西側には溝状の窪みが確認できており、検出状況から外周溝的な性格の溝と考えられる。

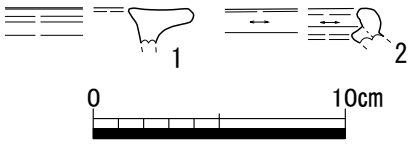


第45図　SB52竪穴住居実測図(S=1/80)

埋土からは弥生時代中期の須玖Ⅰ式土器(1)が出土した。縄文時代晩期の黒川式土器(2)が混入する。その他、磨石･敲石が出土した。

SB52出土遺物(第46図)

1は弥生時代中期の須玖Ⅰ式土器の甕である。口縁部は鋤先状で、内外面にナデを施す。2は縄文時代晩期の黒川式土器の浅鉢である。内外面に横方向のミガキ調整を行う。



第46図　SB52出土遺物実測図(S=1/3)

2　土坑

SK08土坑(第47図)

C-100グリッドに位置し、楕円形を呈する土坑である。検出面の標高は18.41ｍで、規模は長径1.60ｍ、短径0.61ｍ以上、深さ0.66ｍである。他遺構との切り合い関係は認められない。遺構内には段状(テラス)があり、小穴を検出した。

埋土からは弥生土器片が出土した。

SK17土坑(第48図)

C-1･100グリッドに位置し、長方形を呈する土坑である。検出面の標高は18.18ｍで、規模は長径1.61ｍ、短径0.71ｍ以上、深さ0.15ｍである。他遺構との切り合い関係は認められない。遺構内には小穴を検出した。

埋土には遺物を含んでいなかった。

SK19土坑(第49図)

C-99グリッドに位置し、長方形もしくは隅丸方形を呈する土坑である。検出面の標高は18.37ｍで、規模は長径1.09ｍ、短径0.90ｍ、深さ0.42ｍである。切り合い関係はSB10を切って検出した。

埋土からは弥生土器が出土しており、縄文土器が混入して出土した。

SK23土坑(第50図)

B-1グリッドに位置し、隅丸方形を呈する。検出状況から貯蔵穴の可能性がある土坑である。検出面の標高は17.43ｍで、規模は長径1.33ｍ、短径1.27ｍ、深さ0.57ｍである。切り合い関係はSD05に切られて検出した。

埋土からは弥生土器が出土しており、黒川式土器が混入して出土した。

SK26土坑(第51図)

B-100グリッドに位置し、隅丸方形を呈する。検出状況から貯蔵穴の可能性がある土坑である。検出面の標高は17.88ｍで、規模は長径1.59ｍ、短径1.42ｍ、深さ0.55ｍである。切り合い関係はSB25・SX61を切って検出した。

埋土からは弥生土器が出土しており、中世土師器が混入して出土した。

SK49土坑(第52図)

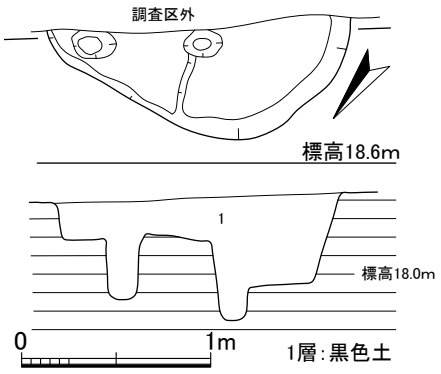
A-100グリッドに位置し、楕円形を呈する土坑である。検出面の標高は17.80ｍで、規模は長径1.33ｍ、短径0.57ｍ以上、深さ0.12ｍである。切り合い関係はSD32から切られて検出した。遺構内には小穴を検出した。

埋土からは弥生土器が出土した。

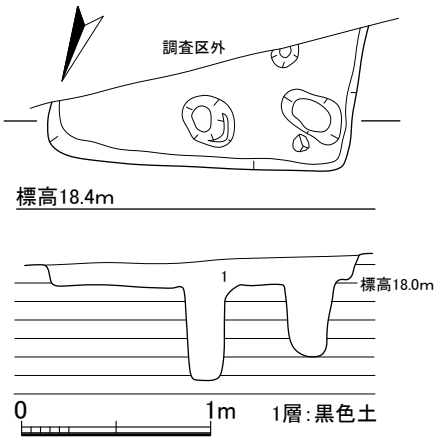
SK54土壙墓(第53図)

ZZ･A-100グリッドに位置し、隅丸の長方形を呈する土坑である。検出状況から土壙墓と考えられる。検出面の標高は17.42ｍで、規模は長径2.14ｍ、幅0.97ｍ、深さ0.36ｍである。切り合い関係はSB52を切って検出した。

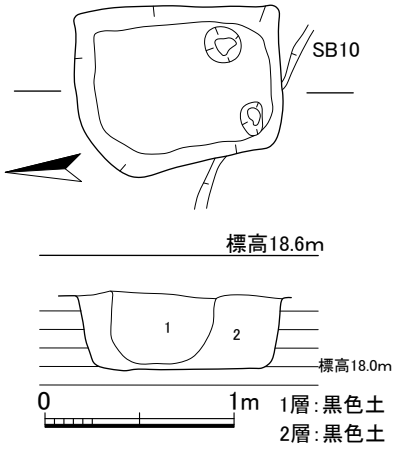
主軸方向は北東から南西方向で、床面は南西側が高く、北東が低いため、頭位は南西側と考えられる。主軸の南西方向には舞岳やさらに先には普賢岳がそびえる。



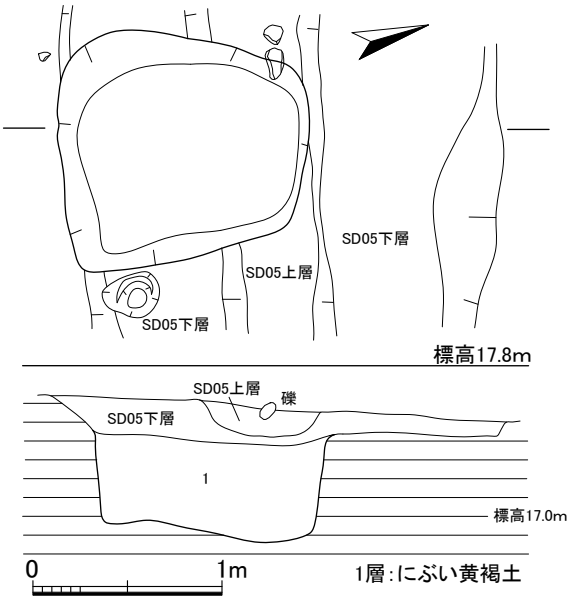
第47図　SK08土坑実測図(S=1/40)



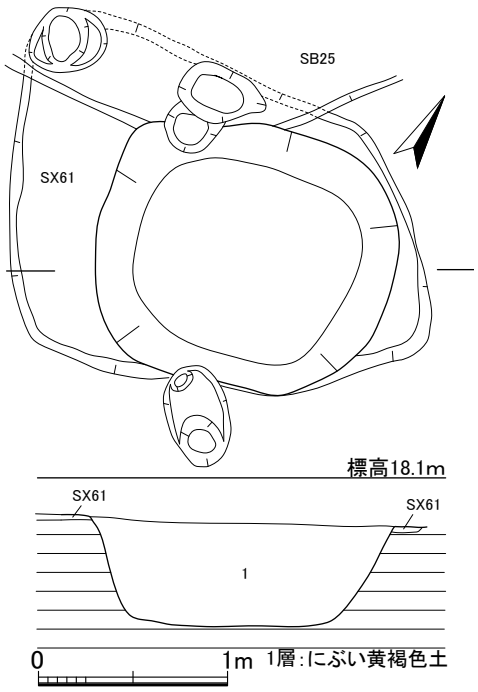
第48図　SK17土坑実測図(S=1/40)



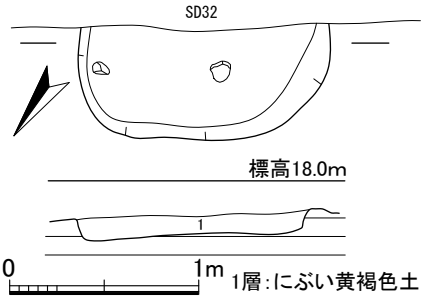
第49図　SK19土坑実測図(S=1/40)



第50図　SK23土坑実測図(S=1/40)



第51図　SK26土坑実測図(S=1/40)

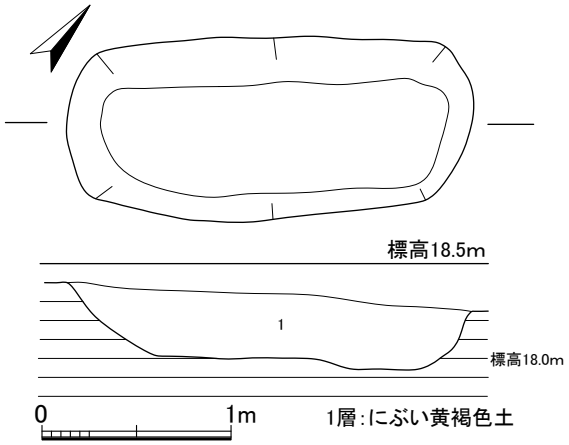


第52図　SK49土坑実測図(S=1/40)

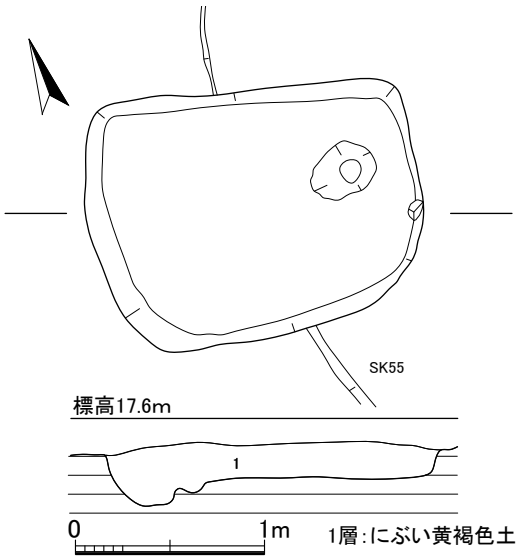
埋土からは弥生土器が出土した。その他、粘土塊や敲石が出土した。

SK55土坑(第54図)

ZZ-100グリッドに位置し、隅丸方形を呈する土坑である。検出面の標高は17.44mで、規模は長



第53図　SK54土坑実測図(S=1/40)



第54図　SK55土坑実測図(S=1/40)

径1.79m、短径1.36m、深さ0.31mである。切り合い関係はSB52を切って検出した。

埋土からは弥生土器が出土しており、縄文土器が混入して出土した。その他、磨石･敲石が出土した。

3　溝

SD05区画溝(第55図)

ZZ-99、A-99･100･1、B-100･1･2グリッドに位置する。遺構は大きく上･下層の2層に分層できて、河床面の勾配から東から北西に向かって走行する溝である。SD05上層の検出面の標高は17.67mで、規模は長さ26.88m以上、幅0.45～1.09m、深さ0.25mである。SD05下層の検出面の標高は17.78mで、規模は長さ26.88m以上、幅1.06～2.32m、深さ0.33mである。基本は直線的な溝で、A-100グリッド付近で若干屈曲がみられる。この屈曲により、溝全体は地形に沿って、比較的標高の低い住居群を取り囲むように内湾して見える。切り合い関係はSB50(SD05上層のみ)･SK23･SX36(SD05上層のみ)を切り、SD32･SK23･SX36(SD05下層のみ)に切られて検出した。SD06はSD05下層を切り、SD05上層に切られて検出したが、SD05上層とは同時期の可能性もある。SB01もSD05上層を切っている部分もあるが、同時期の可能性もある。SD06とSB01との新旧関係は慎重を期したい。SD05上層は凡そ同一幅であるが、SD05下層はB-２からA-100グリッドにかけて幅広である。

SD05の両脇には竪穴住居が多く集中することから、住居もしくは集落を造営･形成する際にSD05の掘削土を周堤等に用いている可能性も考えられる。SD05の用途は排水的役割を担っていただけでなく、比較的標高が低い住居群と標高が高い住居群とを区画する溝としての役割を兼ね備えていた可能性がある。

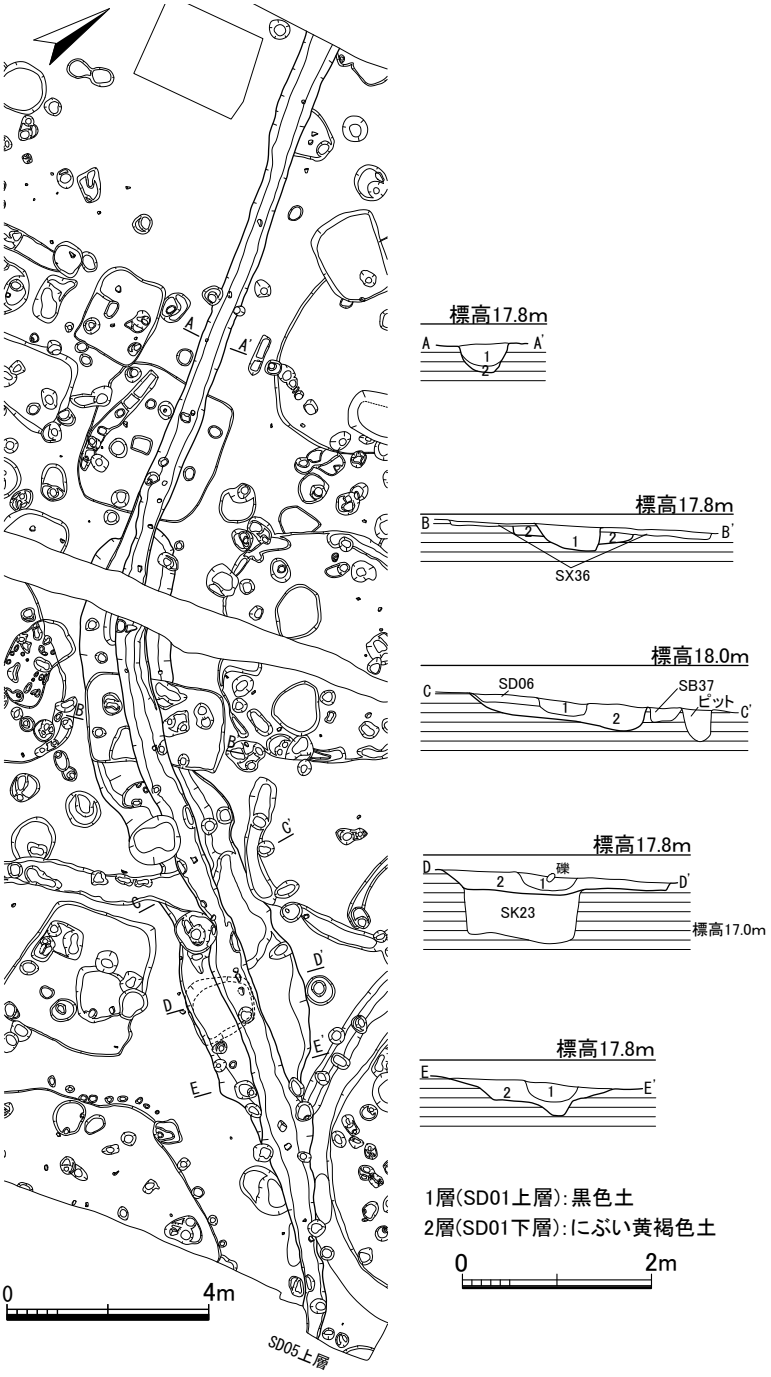
SD05上層からは弥生時代中期の須玖Ⅱ式土器併行の中九州系の黒髪式土器(1)が出土し、縄文時代晩期の黒川式土器(3)が混入していた。その他、埋土からは敲石(5)、石皿(6)や磨石(4)が出土している。

SD05下層からは弥生時代中期の須玖Ⅰ式土器や丹塗土器、砥石やスクレイパー(7)が出土している。また須玖Ⅱ式土器(2)が出土しているが上層からの混入と考えられる。

そのため、SD05下層の成立期は城ノ越式土器から須玖Ⅰ式土器の頃で、廃絶期は集落が衰退する須玖Ⅱ式土器以降の頃と考えられる。

SD05出土遺物(第56図)

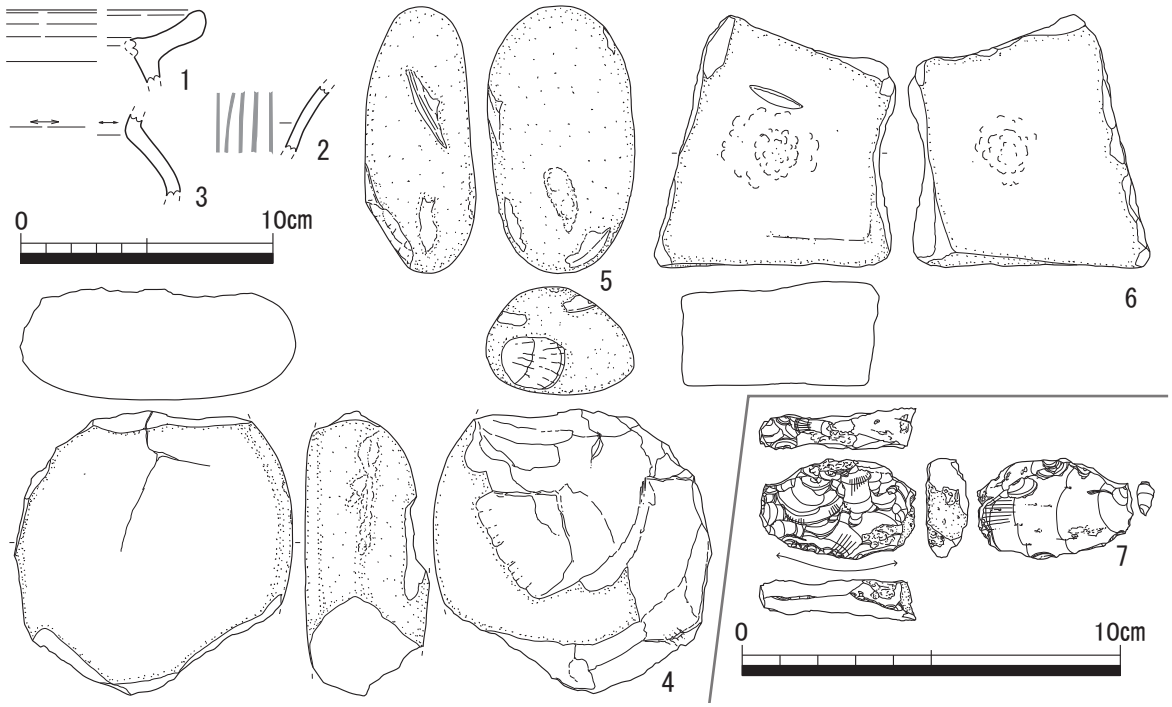
1は弥生時代中期の須玖Ⅱ式土器併行の中九州系の黒髪式土器の甕である。鋤先状(逆L字状)口縁部が内湾気味に上向き、器壁が肥厚して、口唇部がやや丸みをもつ。内面の突出部が欠損している。外面にナデを施し、内面にヨコナデを施す。2は弥生時代中期の須玖Ⅱ式土器と思われる広口壺である。外面にナデ調整を行い、丹塗と暗文を施す。内面はミガキ調整を行い、丹塗を施す。3は縄文時代晩期の黒川式土器の浅鉢である。内外面に横方向のミガキを施す。4は安山岩の水磨礫の円礫を素材とした磨石である。表裏の平坦面は滑面化している。被熱により周囲と裏面の大部分がハジケている。周囲の残存部分には僅かに敲打痕がみられる。磨石の他に敲石としても使用したと思われる。5は安山岩の楕円形の水磨礫を素材とする敲石である。敲打痕･被敲打痕･キズなどがみられる。6は四角形の砂岩を素材とする石皿である。上下平坦面には中央に被敲打痕があり、また全体が滑面を呈している。被敲打痕の後に滑面化しているので台石として利用された後に石皿として使用されたものであろう。7は不純物の多く混じる黒曜石剥片を素材とするスクレイパーである。図正面の下縁に連続する小規模な剥離を施す。



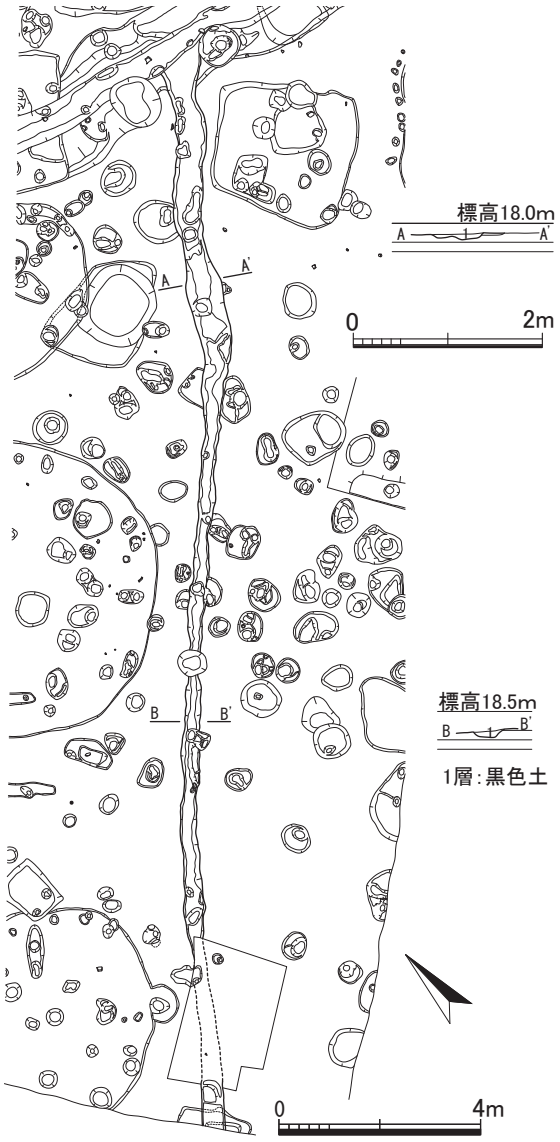
第55図　SD05区画溝実測図(S=1/150･1/80)

SD06溝(第57図)

B-100･1、C-99･100、D-99グリッドに位置し、凡そ直線的な溝である。検出面の標高は18.60mで、規模は長さ21.35m以上、幅0.20～0.69m、深さ0.07mである。河床面の勾配から南から北東に向かって走行する溝である。切り合い関係はSK07･SD05下層･SX21を切り、SB04に切られる。SD06の埋没期の状況はSD05上層に切られた形で検出したが、それ以前はSD05と共時性の可能性がある。つまり、検出状況よりSD06はSD05に連結し、雨水等は河床面の標高値よりSD06からSD05へ排水されていたものと考えられる。また、SD06から南側の区域では弥生時代中期の住居は1軒のみである



第56図　SD05出土遺物実測図(S=1/3･1/2)



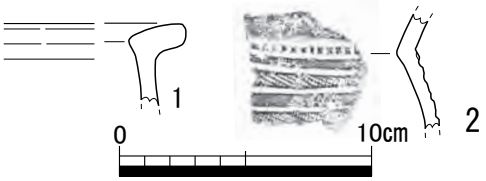
第57図　SD06溝実測図(S=1/150･1/80)

が、SD06からSD16の間は弥生時代中期の住居群が密集することから、区画性も兼ね備えている可能性もある。

遺構からは弥生時代中期の須玖Ⅰ式土器に併行する在地系土器の可能性のある土器(1)が出土した。縄文時代後期の太郎迫式土器(2)が混入している。その他、磨石･敲石が出土している。

SD06出土遺物(第58図)

1は弥生時代中期の須玖Ⅰ式土器に併行する在地系土器の可能性がある壺である。鋤先状(逆L字状)口縁部が上向き、器壁が肥厚して、口唇部が丸みをもつ。内外面にヨコナデを施す。2は縄文時代後期の太郎迫式土器の鉢である。頸部の外面に2条の沈線間に刻目列点文を巡らせる。その下位の胴部に沈線を3条巡らせて、その間に縄文とそれをナデ消した無文とを交互に配している。内外面の文様帯以外にナデ調整を行う。胴部外面に赤色顔料が付着している。



第58図　SD06出土遺物実測図(S=1/3)

SD11～16溝状遺構群(第59図)

A～C-98･99グリッドに位置し、いずれも凡そ直線的な溝である。

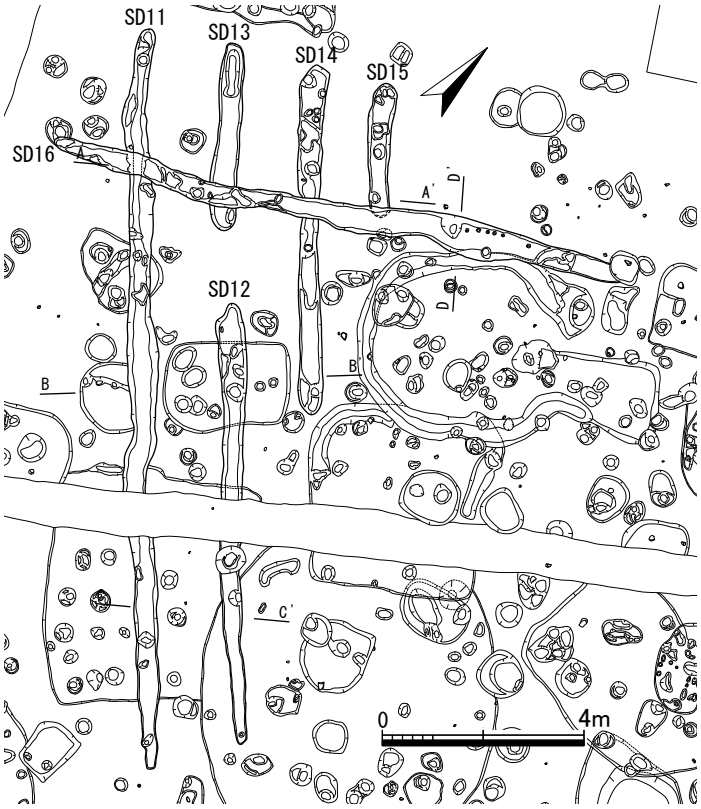
SD11は検出面の標高は18.30ｍで、規模は長さ14.68m、幅0.31～0.63m、深さ0.30ｍである。切り合い関係はSX42･46、SB30を切り、SD16･32に切られて検出した。SD12は検出面の標高は18.23ｍで、規模は長さ8.72m、幅0.23～0.57m、深さ0.11ｍである。切り合い関係はSB03･30、SX45を切り、SD32に切られて検出した。SD13は検出面の標高は18.08ｍで、規模は長さ3.71m、幅0.42～0.51m、深さ0.13ｍである。切り合い関係はSD16に切られて検出した。SD14は検出面の標高は18.10ｍで、規模は長さ6.94m、幅0.33～0.54m、深さ0.13ｍである。切り合い関係はSD16に切られて検出した。SD15は検出面の標高は17.97ｍで、規模は長さ2.66m、幅0.35～0.50m、深さ0.21ｍである。切り合い関係はSD16に切られて検出した。SD16の検出面の標高は18.17ｍで、規模は長さ11.58m、幅0.34～0.74m、深さ0.15ｍである。切り合い関係はSB43、SD11･13･14･15を切って検出した。

この溝状遺構群はSD16を除いて全て併走しており、溝の床面の起伏がある。SD16のみ、SD06的な排水溝や区画溝の可能性があるが、その他の溝状遺構群は畠の可能性がある。

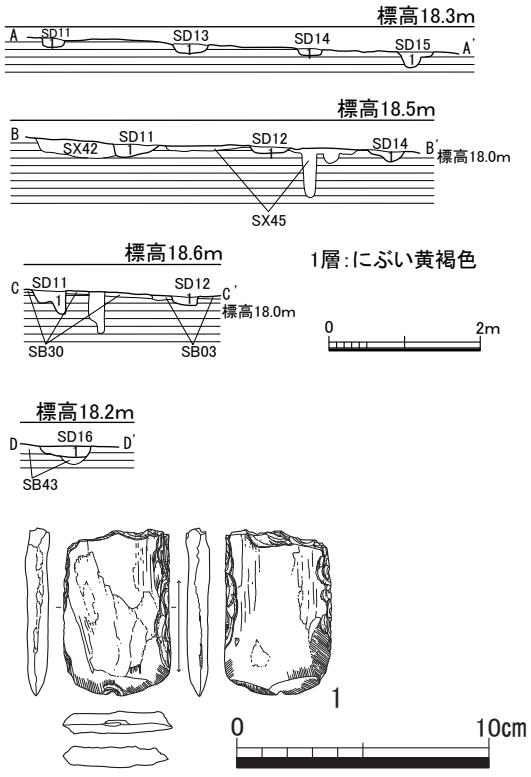
SD11の埋土からは弥生土器や磨製石斧(1)･磨石が出土した。また縄文土器が混入していた。SD12･16の埋土からは弥生土器が出土した。SD13からは弥生土器や石皿か台石･磨石･敲石が出土した。SD14･15の埋土からは弥生土器が出土しており、縄文土器が混入して出土した。

SD11出土遺物(第60図)

1は薄い緑色片岩を素材とする小形の磨製石斧である。刃部は研磨により作出する。右側縁には刃部の作り出しを意図した加工がみられる。また左側縁は鋭利にならないように刃潰し状に加工が施されている。基部は折損ではなく撃打加工がされている。以上のことから磨製石斧を石包丁様石器に転用したものと思われる。



第59図　SD11～16溝状遺構群実測図(S=1/150･100)



第60図　SD11出土遺物実測図(S=1/3)

4　不明遺構

SX36不明遺構(第61図)

A･B-100･1グリッドに位置し、長方形もしくは隅丸方形を呈する性格不明遺構である。検出面の標高は17.75ｍで、規模は長径2.85ｍ、短径1.84ｍ、深さ0.08ｍである。切り合い関係はSD05下層を切り、SD05上層に切られて検出した。遺構内には小穴を検出した。遺構の性格は明らかでないが、小屋などの可能性もある。

埋土からは弥生土器が出土しており、縄文時代後期の土製円盤(1)が混入して出土した。

SX36出土遺物(第62図)

1は縄文時代後期の土製円盤である。胎土･器壁･赤褐色の色調の厚みから北久根山式土器と考えられ、それを転用したものである。表裏面はナデ調整し、縁辺部を加工して、ミガキ調整を行っている。

SX44不明遺構(第63図)

A･99-100グリッドに位置し、長方形もしくは隅丸方形を呈する性格不明遺構である。検出面の標高は17.72ｍで、規模は長径1.99ｍ、短径1.66ｍ、深さ0.17ｍである。切り合い関係はSB50を切る。遺構内には小穴を検出した。遺構の性格は明らかでないが、小屋などの可能性もある。遺構からは弥生時代中期の城ノ越式土器(1)が出土した。埋土の上位から古代の須恵器の椀(2)が混入して出土した。

SX44出土遺物(第64図)

1は弥生時代中期の城ノ越式土器の甕か壺である。甕の可能性が高い。胴部に断面三角形の突帯が付く。内外面にナデ調整を施して、外面に煤が付着する。2は古代の須恵器の椀で、内外面に回転ナデを施し、高台脇はヘラ切り離しを行う。

SX45不明遺構(第65図)

B-99グリッドに位置し、長方形もしくは隅丸方形を呈する性格不明遺構である。検出面の標高は18.18ｍで、規模は長径2.52ｍ、短径1.81ｍ、深さ0.65ｍである。切り合い関係はSD12に切られる。遺構内には小穴を検出した。遺構の性格は明らかでないが、小屋などの可能性もある。

遺構からは弥生時代中期の城ノ越式土器(1)が出土した。

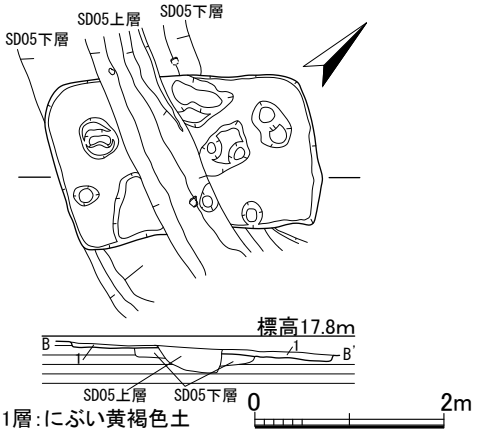
SX45出土遺物(第66図)

1は弥生時代中期の城ノ越式土器の甕か壺である。壺の可能性が高い。胴部に突帯が付く。内面にナデ調整を行い、外面にヨコナデを施して、煤が付着する。

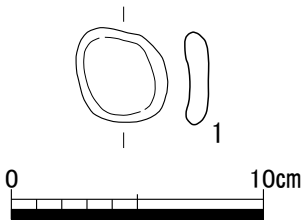
SX47不明遺構(第67図)

A-99･100グリッドに位置し、隅丸方形を呈するSB43に付帯する遺構である。検出面の標高は17.77ｍで、規模は長径2.25ｍ、短径1.64ｍ、深さ0.68ｍである。遺構内には小穴を検出した。出入口施設の可能性がある。

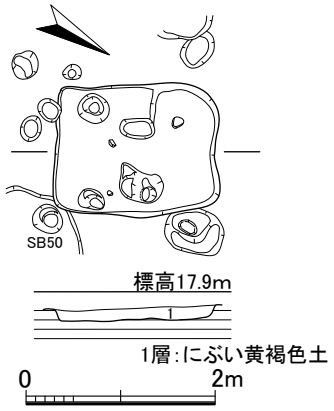
埋土からは弥生土器が出土しており、縄文土器が混入していた。



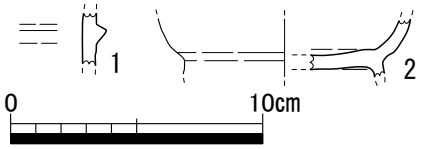
第61図　SX36不明遺構実測図(S=1/80)



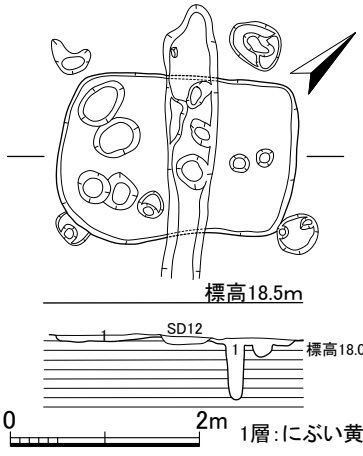
第62図　SX36出土遺物実測図(S=1/3)



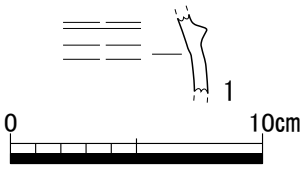
第63図　SX44不明遺構実測図(S=1/80)



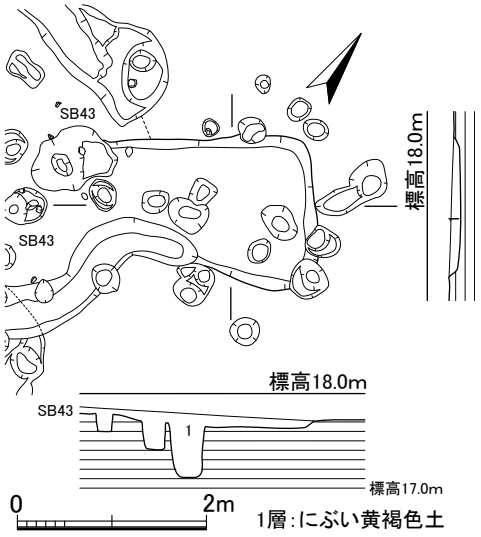
第64図　SX44出土遺物実測図(S=1/3)



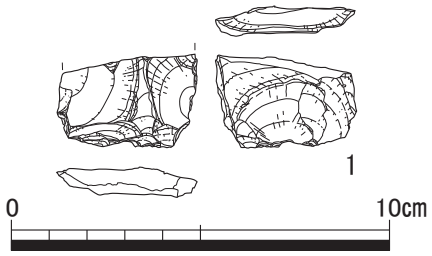
第65図　SX45不明遺構実測図(S=1/80)



第66図　SX45出土遺物実測図(S=1/3)



第67図　SX47不明遺構実測図(S=1/80)



第68図　SX18出土遺物実測図(S=1/2)

その他の不明遺構出土遺物(第68図)

SX18出土遺物

1は加工痕ある石器である。無斑晶質玄武岩の剥片の両側に粗い二次加工の剥離を施している。下縁には片側から丁寧な二次加工が施されている。

第３節　中世の遺構と遺物

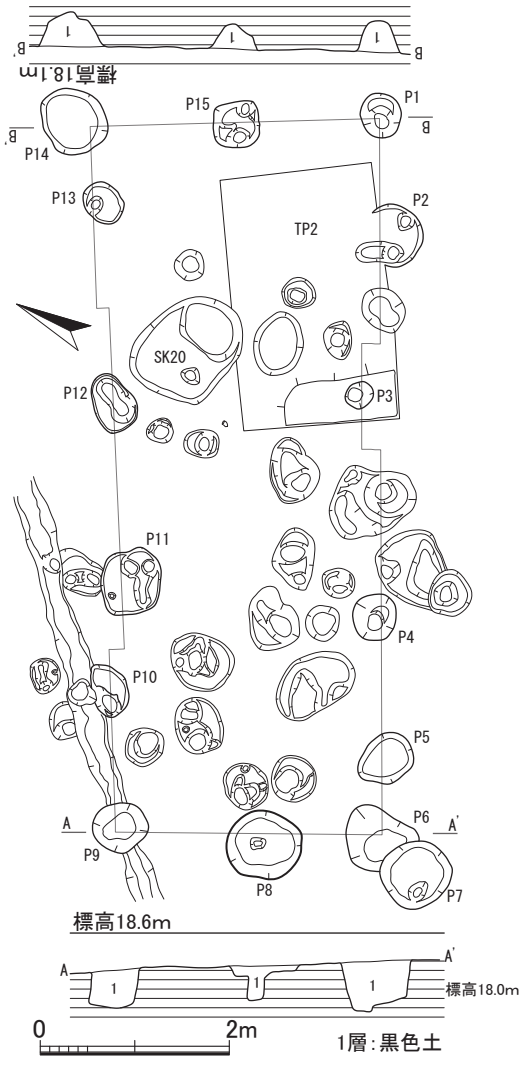
本調査で確認できた中世の遺構は掘立柱建物が1棟、土坑が1基であった。

１　掘立柱建物

SB04掘立柱建物(第69図)

B･C－100･1グリッドで検出した。検出面の標高は17.90～18.28ｍを測る。切り合い関係はSD06を切って検出した。建物の規模は桁行5間、梁行2間で、北東から南西軸の大型の建物である。梁行×桁行は3.06×7.57ｍで床面積は23.16ｍ^2(約7.41坪)である。柱間の心身距離は梁行1.31～1.55ｍで、桁行0.79～2.41ｍで、柱穴の形状は円形や楕円形である。深さ0.14～0.78ｍを測る。

埋土からは中世の遺物を含んでいなかった。遺構のP9柱穴からは縄文時代後期の太郎迫式土器の鉢が出土したが混入品と考えられる。その他に弥生土器が出土しているが混入と考えられる。



第69図　SB04掘立柱建物実測図(S=1/80)

SB04P9出土遺物(第70図)

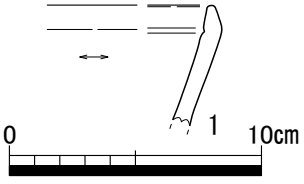
1は縄文時代後期の太郎迫式土器の鉢である。口縁部の内面に1条沈線を巡らせる。外面にミガキ調整を行い、内面にナデを施す。赤色顔料を施す。

２　土坑

SK20土坑(第71図)

B･C-100グリッドに位置し、楕円形を呈する土坑である。検出面の標高は18.02ｍで、規模は長径1.22m、短径0.96m、深さ0.29ｍである。他遺構との切り合い関係は認められないが、SB04の内域で確認できた。

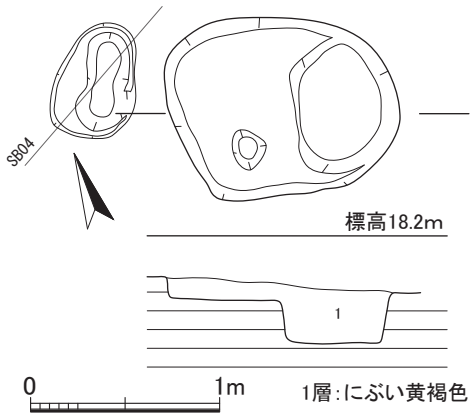
遺構からは中世前期の土師器の坏(1)が出土しており、祭祀遺構の可能性がある。その他、埋土からは弥生土器が混入して出土した。



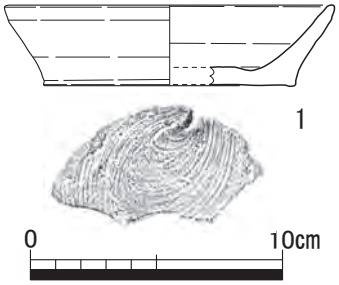
第70図　SB04出土遺物実測図(S=1/3)

SK20出土遺物(第72図)

1は中世前期の土師器の坏である。内外面は回転ナデ調整を行い、底部は糸切離しを行う。内外面に煤が付着する。器形と法量から13世紀後半から14世紀前半の可能性がある。



第71図　SK20土坑実測図(S=1/40)



第72図　SK20出土遺物
実測図(S=1/3)

第４節　近世の遺構と遺物

本調査で確認できた近世の遺構は土坑が1基、溝が1条、性格不明遺構が1基であった。

１　土坑

SK31土坑(第73図)

B-99グリッドに位置し、円形を呈する土坑である。検出面の標高は18.05ｍで、規模は長径1.18m、短径1.03m、深さ0.21ｍである。切り合い関係はSB33･SD32を切って検出した。

埋土からは近世の陶磁器や青磁･擂鉢などが出土した。

２　溝

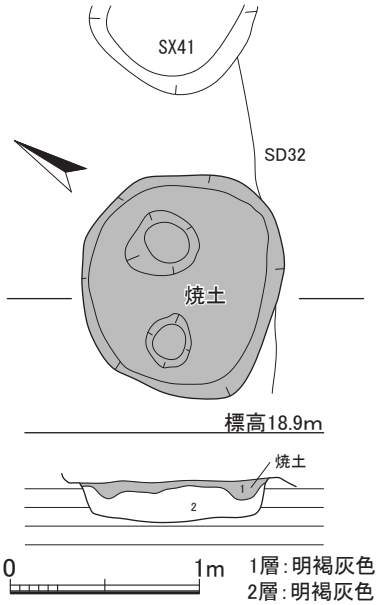
SD32溝状遺構(第74図)

A-100･1、B-98～100、C-98･99グリッドに位置し、直線的な溝である。検出面の標高は18.44ｍで、長さ27.67ｍ以上、幅0.34～0.94ｍである。切り合い関係は縄文･弥生時代の多くの遺構を切り、近世ではSK31･SX41に切られて検出した。

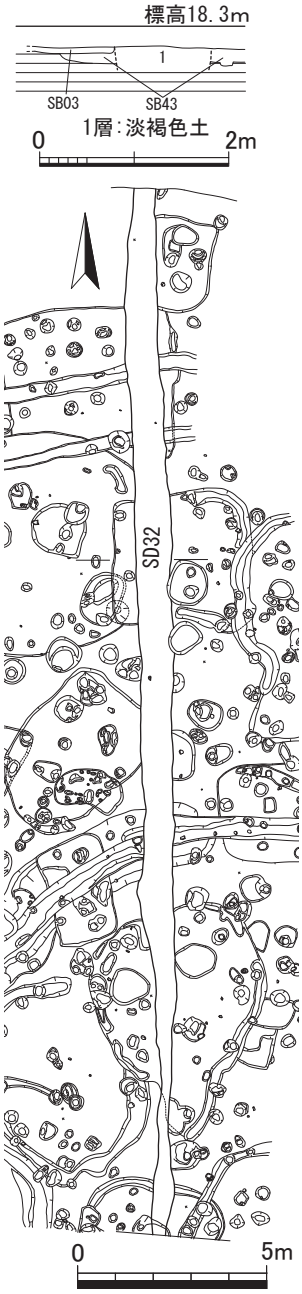
遺構からは近世(18ｃ後半)の肥前系陶胎染付碗(1)が出土した。

SD32出土遺物(第75図)

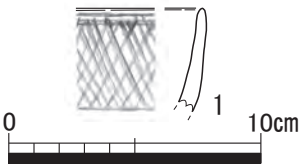
1は近世の肥前系陶胎染付碗(くらわんか碗)で、18ｃ後半の頃のものである。内外面に施釉し、文様は口縁部の外面に、口唇部付近から2重を巡らせて、その下の体部に斜格子文を施す。



第73図　SK31土坑実測図(S=1/40)



第74図　SD32溝状遺構
実測図(S=1/200･1/80)



第75図　SD32出土遺物
実測図(S=1/3)

第５節　その他の出土遺物

本調査及び範囲確認調査の遺構以外から出土した遺物の中から主要な遺物の説明を行う。

１　範囲確認調査の出土遺物（第76図）

範囲確認調査は9地点に調査坑を入れて調査した。調査坑からは弥生時代前期を除く縄文時代後期から弥生時代中期の遺物を中心に出土した。

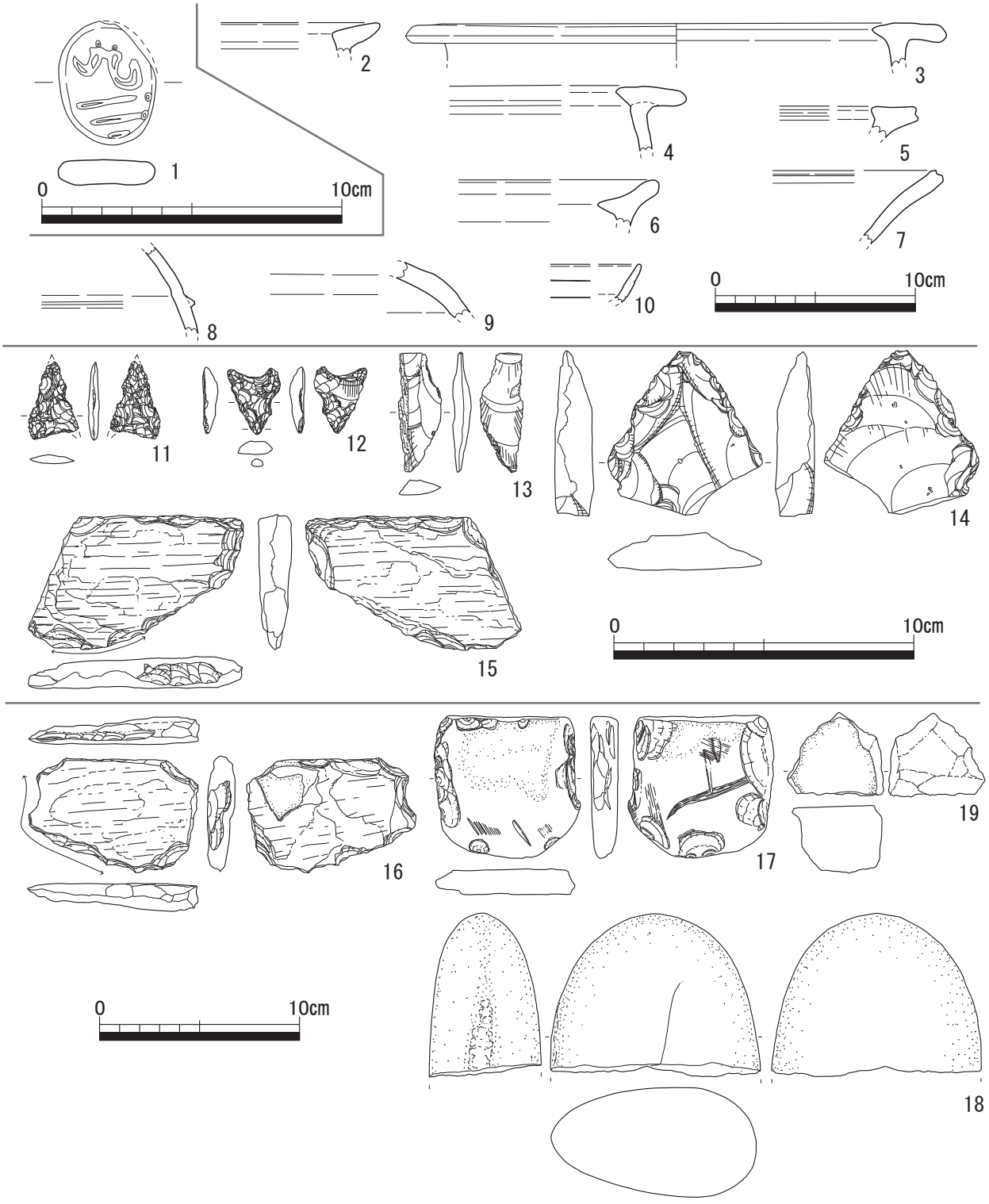
1は調査坑の位置関係から本調査のSB58に帰属する遺物である。縄文時代後期の西平式～太郎迫式土器に併行する土版である。遺物は土器を2次加工して楕円形に成形･調整し、文様を施している。表面はナデである。文様は象嵌による。文様構成は西平式土器で見られる「ハ」の字状の文様を大胆に施し、その下に刺突と沈線を施す。2は弥生時代中期の須玖Ⅰ式土器併行の在地系土器もしくは黒髪式土器である。口縁部が跳ね上げ状なため黒髪式土器とも考えられるが、口唇部が丸みがなく尖ることから須玖Ⅰ式土器との折衷の在地系の土器の可能性もある。内外面にナデを施す。3･4は弥生時代中期の須玖Ⅱ式土器の甕である。鋤先状の口縁部は長くのびて、内面に突出する。内外面にヨコナデを施す。外面に煤が付着する。4の外面に黒色顔料の可能性があるものが付着する。5は須玖Ⅰ式土器の広口壺か高坏である。口縁部が外反し、稜角付口唇部である。口縁部は若干内面に突出する。外面はナデ調整を行い、内面はヨコナデを施す。6は須玖Ⅱ式土器併行の中九州系の黒髪式土器の壺である。鋤先状（逆L字状）口縁部が内湾気味に上向き、内面に突出する。器壁が肥厚して、口唇部がやや丸みをもつ。内外にナデを施す。口唇部から外面にかけて黒色顔料を施す。7は須玖Ⅱ式土器の広口壺である。口縁部が外反し、稜角付口唇部である。内外面は摩耗が著しいため不明瞭だが、ナデ調整であろう。丹塗等も不明である。8は弥生時代中期の城ノ越式～須玖Ⅱ式土器の壺である。胴部に断面台形状の突帯が付き、外面にナデ･ヨコナデ調整を施し、内面にナデ調整を行う。外面に黒斑が見られる。9は古墳時代の須恵器で外面に回転ナデを行い、内面にナデ調整を施す。外面に煤が付着する。10は中世後期の朝鮮系灰釉陶器の皿もしくはぐいのみである。外面に2条の稜線が巡り、内外面に施釉する。11は浅い抉りの入ったいびつな形の石鏃である。一側縁中央部にノッチ状の加工がみられる。再調整加工を行っている部分とそうでない部分とがある。12は黒曜石製の石錐である。石鏃を逆さにしたような形で、片側縁にノッチ状の加工を施している。石鏃でいう先端部にあたるところが錐部となる。側縁に擦痕はあるが稜にはさほど磨滅が見られないことから、作業対象物は比較的軟らかいもので厚さ5～6㎜内のものと推測される。石鏃の転用品の可能性が高い。13･14はスクレイパーである。13は背面に自然面を残す小形の縦長剥片を素材とする。背面の打点近くの縁辺に微細剥離がみられる。腹面は主要剥離面となっており、下部の縁辺に微細剥離がみられる。14は厚みのある比較的大形の剥片に粗い加工を行い、概形三角形に整形したもので第81図8と同種のものと思われる。15･16は石包丁様石器である。15は片理にそって薄く割れた結晶片岩の岩片を素材とする。簡単な剥離で全体を整形し、下縁の一部に両面からの剥離で刃部を作出する。刃部に続く下縁には急角度加工による平坦面、続いて鋭さを持たせない二次加工を行っており、意図して整形したものと思われる。また上縁部から刃部に対しやや鈍角に折断しており、上縁は両面加工で平坦面を作りだしている。全体にやや摩耗が見られる。16もほぼ同様である。片理に沿って薄く割れた緑色片岩の岩片を素材とし、下縁には刃部と急角度加工による平坦部を作出する。上縁部は二次加工によりやや丸みを帯びた平坦面になっている。一部に摩耗がみられる。17は打製石斧と思われる。安山岩の板状節理の水磨礫を素材としており、部分的な撃打で刃部を形成している。両側縁にも整形を意図した加工が施され、基部は主軸に直交するように折断されている。全体に使用による摩耗が著しい。18は磨石である。破損か折断により残存部は二分の一ほどと思われる。上下の平坦面はよく使い込まれて滑面化が著しく、側面の一部に僅かであるが被敲打痕･擦痕がみられる。19は被熱による破砕で作業面の一部のみ

が残る砂岩製の石皿片である。

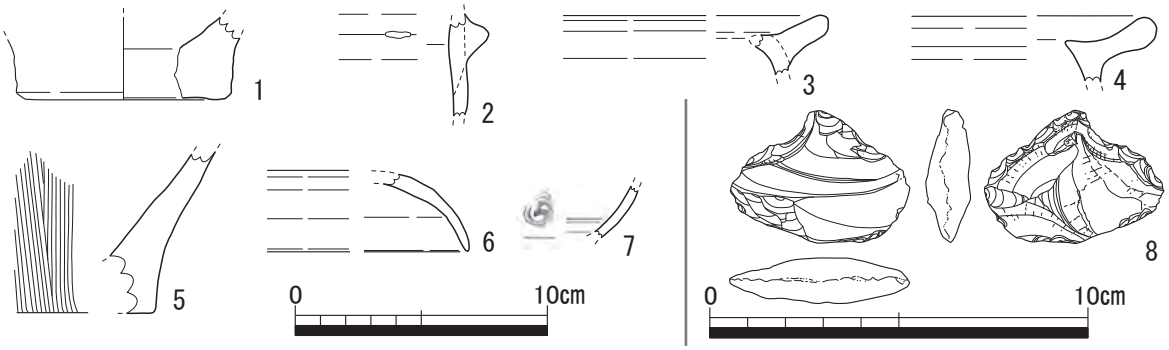
２　遺物包含層(1･2層)の出土遺物(第77図)

1･2層の包含層から出土した遺物については重機による表土剥ぎ及び調査区壁面から出土した遺物が主である。

1は縄文時代後期の西平式～鳥井原式土器の底部である。内外面の表面には空隙の見られ、ナデ調整を行う。底部の中央には内外の両方向から打ちかいて穿孔する。2は弥生時代早期の山ノ寺式土器



第76図　範囲確認調査出土遺物実測図(S=1/2･1/3)



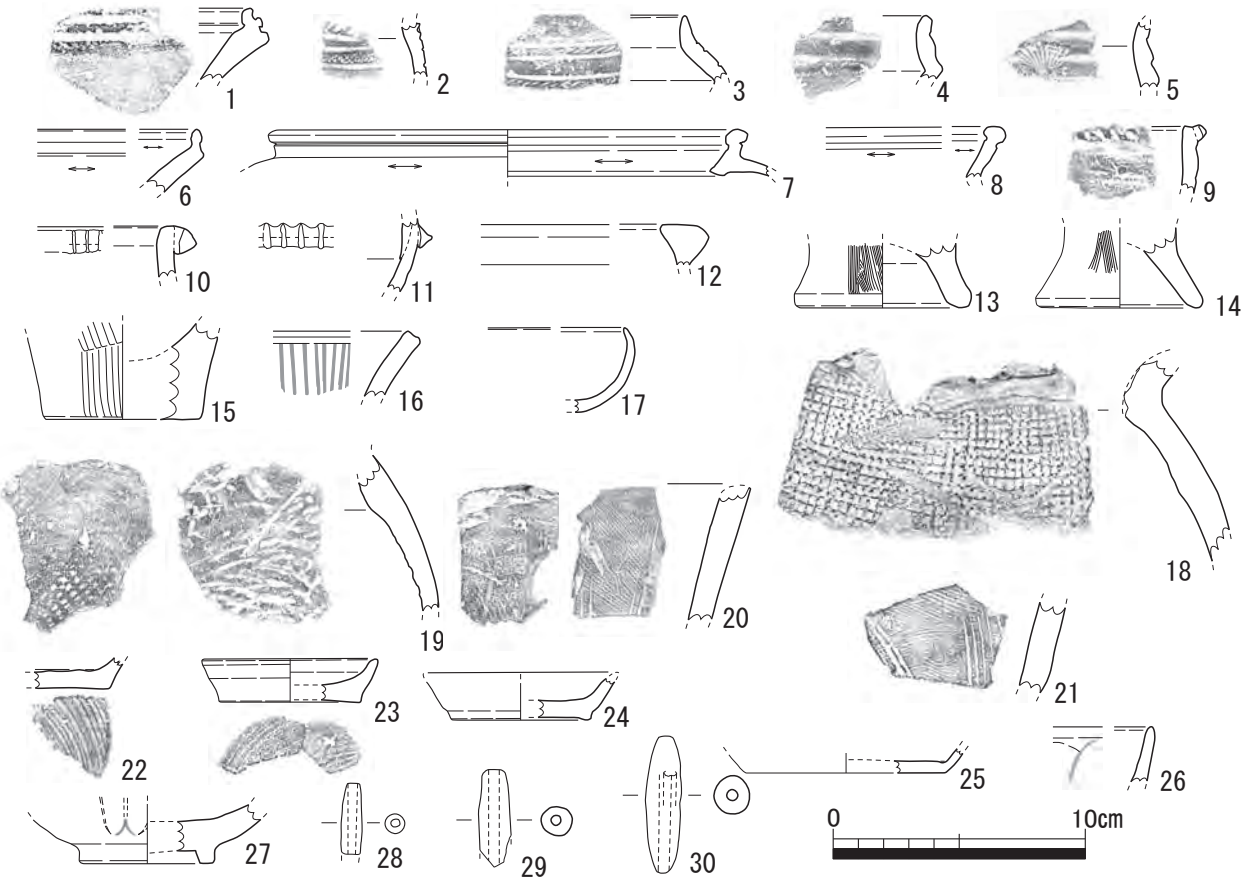
第77図　遺物包含層(1･2層)出土遺物実測図(S=1/3･1/2)

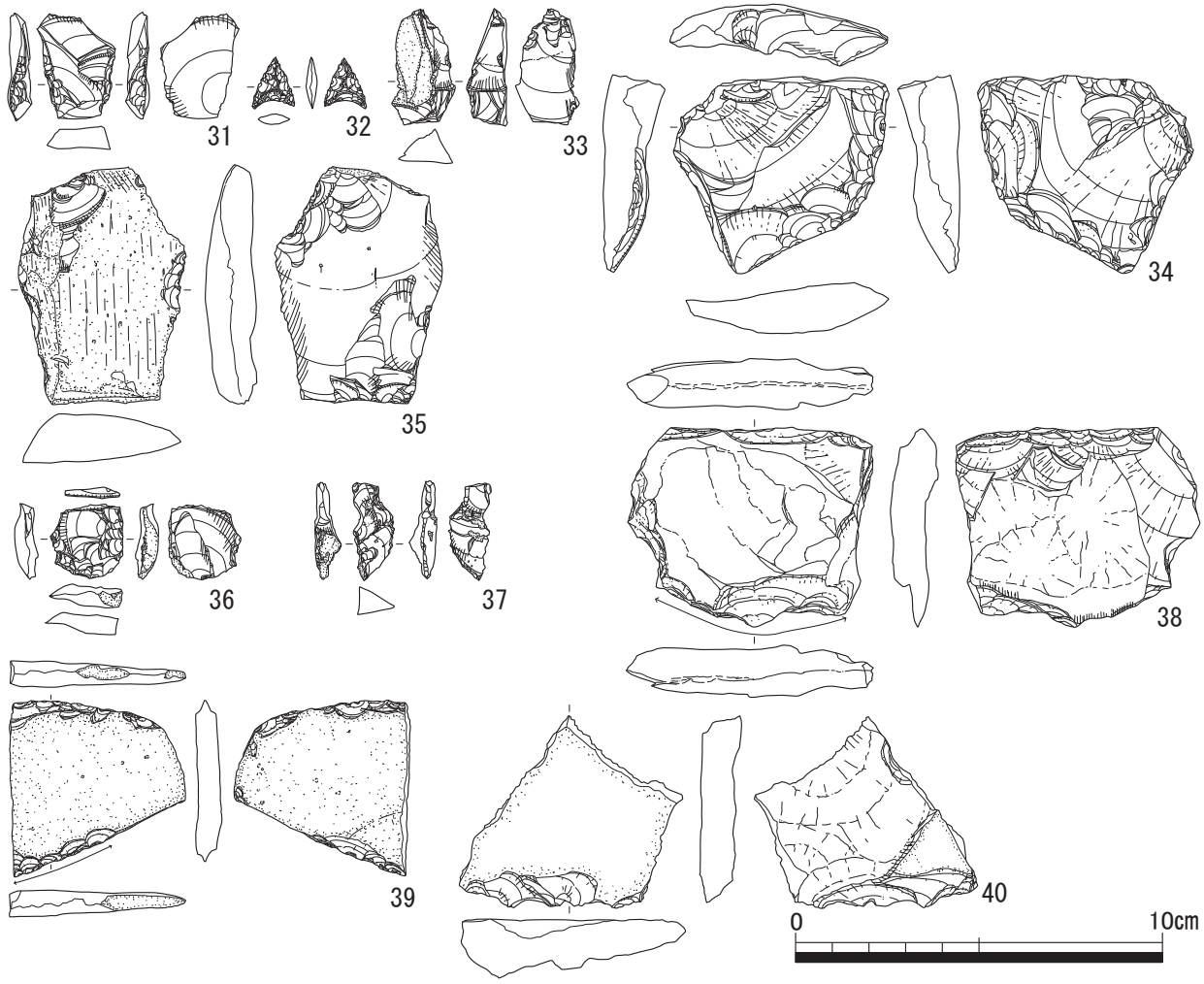
の甕である。外面に突帯を付け、弱く刻目を入れる。突帯と内面にヨコナデを施し、外面にナデを施す。3･4は弥生時代中期の須玖Ⅱ式土器併行の中九州系の黒髪式土器の甕である。鋤先状(逆L字状)口縁部が内湾気味に上向き、内面に突出する。器壁が肥厚して、口唇部がやや丸みをもつ。3は外面にヨコナデを施して、内面にナデを施す。外面には黒色顔料の可能性があるものが付着する。4は内外面にナデを施す。5は弥生時代中期の城ノ越式土器の甕である。外面にハケメ調整を行い、内面と底面にナデを施す。底部の外面に1センチ程の範囲に、黒色に変化した数ミリの輪郭が確認できており、支脚の接地面の可能性がある。6は古墳時代の須恵器の坏蓋である。外面は回転ナデを施し、内面はナデ調整を行う。6ｃ後半～7ｃ前半頃と考えられる。7は中世後期の磁器の碗である。外面に渦唐草文を施し、高台脇に一重圏線を巡らせる。内面の見込に3重圏線を巡らせる。8は南西壁面から出土した石匙である。幅広肉厚な横長剥片を素材としておりバルブの部分を除去するように整形している。つまみの作り出しが不十分で全体はローリングが著しい。

3　遺物包含層(3層)の出土遺物(第78･79図)

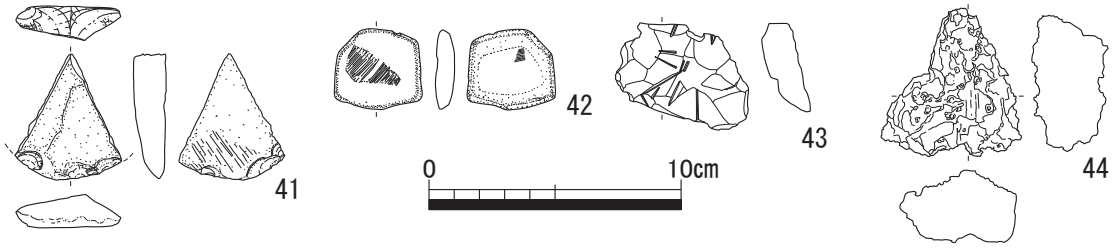
当調査区において最も遺物が出土したのは遺構検出面直上の3層(3a層)の遺物包含層から出土した遺物である。弥生時代前期を除く縄文時代後期から弥生時代中期の遺物を中心に出土した。

1は縄文時代後期の太郎迫式土器併行の南九州の影響を受けた土器である。口縁部の「く」の字の屈曲が潰れて断面三角形を呈し、口唇部にやや面取りを行い、器壁が厚く、文様の施文も粗い点から、中岳Ⅰ式土器の範疇の可能性がある。口縁部の文様帯に2条の沈線文を巡らせて、疑似縄文を施す。外面にミガキを施して、内面にナデ調整を行う。2は太郎迫式土器の鉢で、頸部の外面の2条の沈線間に刺突列点文を巡らせる。その下位に2条の沈線文を巡らせて、縄文を施す。3は縄文時代後期の三万田式土器の浅鉢か注口土器である。注口土器の可能性が高い。外面にミガキ調整後に沈線文を巡らせて、細線文を施す。赤色顔料が付着し、内面にヨコナデを施す。4は縄文時代後期の鳥井原式土器の鉢である。外面に凹線を巡らせて、内外面にナデ調整を施す。外面に赤色顔料が付着する。5は縄文時代後期の鳥井原式土器の鉢である。口縁部の外面に凹線文どうしが接することにより視覚的に稜をなして見える稜線文を2条巡らせる。また貝殻による凹点文を施す。内外面にナデを施す。6は縄文時代晩期の清田編年の古閑3式土器または黒川式土器古段階と考えられる。口縁部の外面に1条沈線を巡らせて、内外面にミガキを施す。また、外面に赤色顔料が付着する。7･8は縄文時代晩期の黒川式土器の浅鉢である。口縁部の内外面に沈線を1条巡らせて、ミガキ調整を行う。9～11は弥生時代早期の夜臼式土器の甕である。9･10は口縁部に、11は胴部に刻目突帯文を巡らせる。9は外面にケズリ後にナデ調整を行い、内面にナデを施す。10･11は内外面にナデを施す。12は弥生時代中期の城ノ越式土器併行の中九州系黒髪式土器である。断面は三角形を呈しており、内面に若干突出して、器壁が厚く丸みがある。内外面にナデを施す。13･14は弥生時代中期の中九州系の黒髪式土器の台付甕である。脚部の外面はハケメ調整を行い、内面はナデを施す。15は弥生時代中期の城ノ越式土器で、甕の



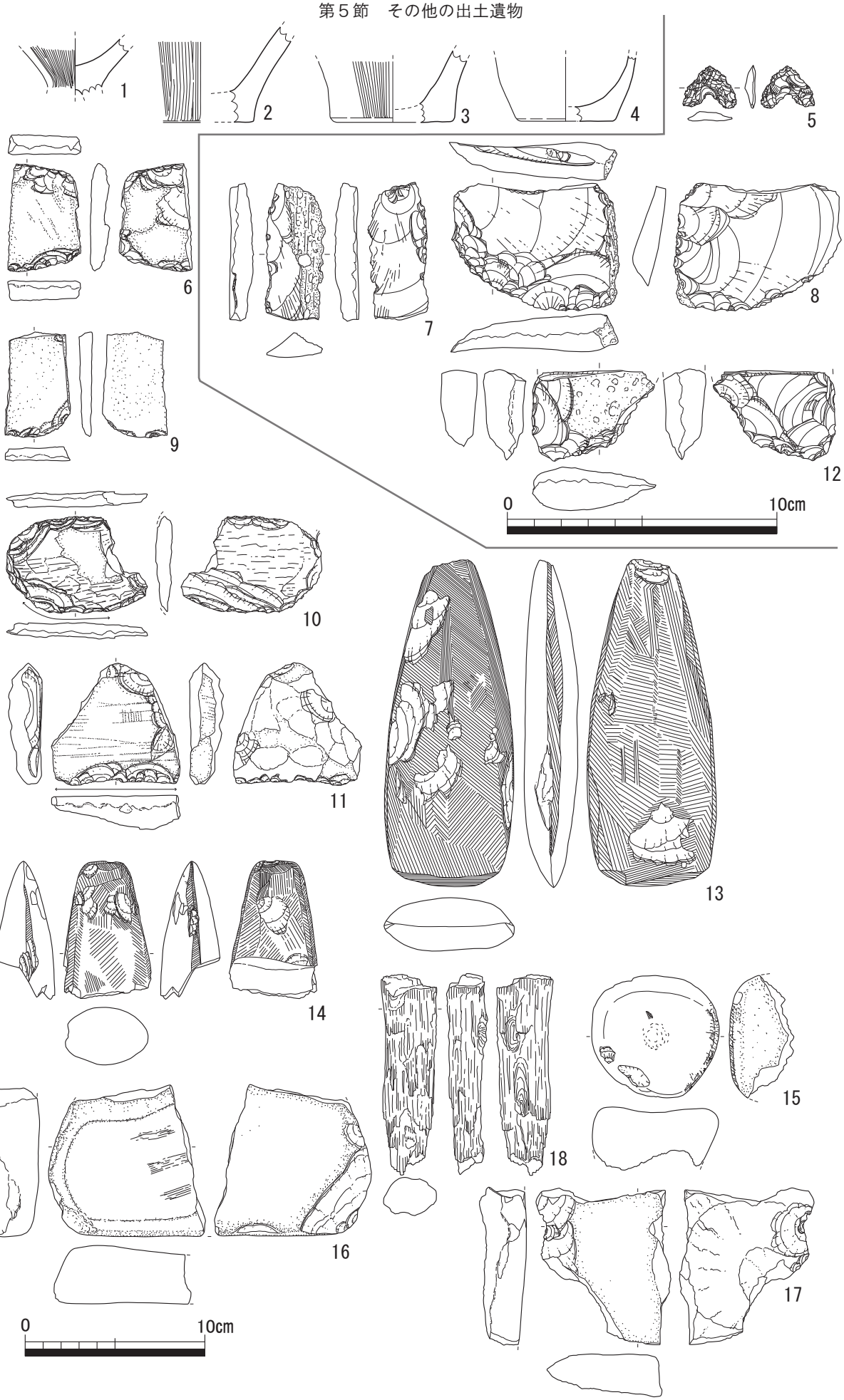


第78図　遺物包含層(3層)出土遺物実測図①(S=1/3･1/2)



第79図　遺物包含層(3層)出土遺物実測図②(S=1/3)

底部である。外面はハケメ調整を行い、内面と底面にナデを施す。16は弥生時代中期の須玖Ⅱ式土器の広口壺である。口縁部が外反し、稜角付口唇部である。外面はヨコナデ調整後に丹塗と暗文を施す。内面はナデ調整後に丹塗を施す。17は弥生時代中期の須玖Ⅰ～Ⅱ式土器の小型の鉢か無頸壺である。内外面にナデ調整を行い、丹塗を施す。18･19は中世の須恵器の甕である。18は外面に格子目のタタキを施し、内面は板状工具痕が残る。19は内外面にタタキを施す。20･21は中世の瓦質土器の擂鉢である。内面にハケメ調整後に擂目を施す。20は口縁部の外面の上位にナデを施し、その下にハケメ調整を行う。21は外面にナデ調整を行う。22は中世の坏で内外面は回転ナデ調整を行い、底部は糸切離しを行う。23･24は中世前期の土師器の小皿で、内外面は回転ナデ調整を行い、底部は糸切離しを行う。25は中世と考えられる中国産の青白磁の皿か碗である。内外面に施釉する。26･27は中世前期の龍泉窯系青磁の碗である。外面に鎬連弁を施し、内外面に施釉する。13世紀初頭から中頃のものと考えられる。27は高台の畳付から高台内にかけて露胎である。28～30は中世と考えられる土錘で、表面はナデ調整を行う。31は暗灰色黒曜石製の台形石器である。両側縁に主要剥離面側からブランティング加工を施している。刃部を欠損し、全体にパテナが著しい。32は正三角形に近い小形の石鏃である。浅い弧状の抉りを持ち、先端角は48度を測る。33は黒色黒曜石製の彫器である。縦長剥片の背面に残された剥離面に樋状剥離を施し、彫刀面を作出する。34～36はスクレイパーである。34は石材表面に二重パテナが観察され、古い剥片を利用して器体整形と刃部整形を行っている。平坦面と折断面を持ち、鋭い刃部と鋭さを抑えた二次加工を持つもので石包丁様石器として使用された可能性もある。35は比較的大形の剥片を素材とし、背面はほぼ自然面である。右側縁の中央付近には素材の縁辺につながるようにエッジを入れており、左側縁には背部を作り出すための加工を行っている。また主要剥離面にはバルブと下縁に減厚のための二次加工がなされている。36は黒色黒曜石製で親指形をしており、削器と思われる。主要剥離面では、バルブをやや幅広の樋状の剥離で減厚し、背面にかけて二次加工で刃部を作出している。37は微細剥離を有する剥片で、不純物を多く含む黒曜石剥片が素材である。38～40は石包丁様石器である。38は頁岩の葉理面に沿って割れた薄い板状の岩片を素材としている。下縁部に刃部を作出し、背縁部にも二次加工を行っている。また折断により大きさを整えている。一部に摩耗がみられる。39は安山岩の薄い板状節理片を素材としている。一辺は折断されており、残りの三辺の一部にはそれぞれ節理面の平坦部を残す。下縁に両面からの二次加工で刃部を作出し、背縁部にも二次加工が施されている。表裏面に摩耗の痕跡がみられ手擦痕とも考えられる。40は安山岩の板状節理片を素材としている。下縁に粗い剥離を施して刃部を形成し、他の三辺を折断することにより形を整えている。図正面左上には、折断後に両面から撃打が施されている。また表裏面には摩耗がみられる。41は打製石斧の刃部片で安山岩の板状節理片を素材としている。使用による摩耗が著しい。42は小形の砥石である。扁平で僅か3.5cm四方の砂岩水磨礫で、砥面には短く直線的で鋭い研磨痕が残るが、ノミ痕のようにもみえる。作業対象物は非常に鋭いもので、おそらく金属ではないかと思われる。サイズから考えると手持ち砥石であろう。43は滑石片で石鍋の破片だと思われる。ノミ痕･ケズリ痕がみられる。44は鉄滓である。今回の調査ではこれ1点のみの出土である。

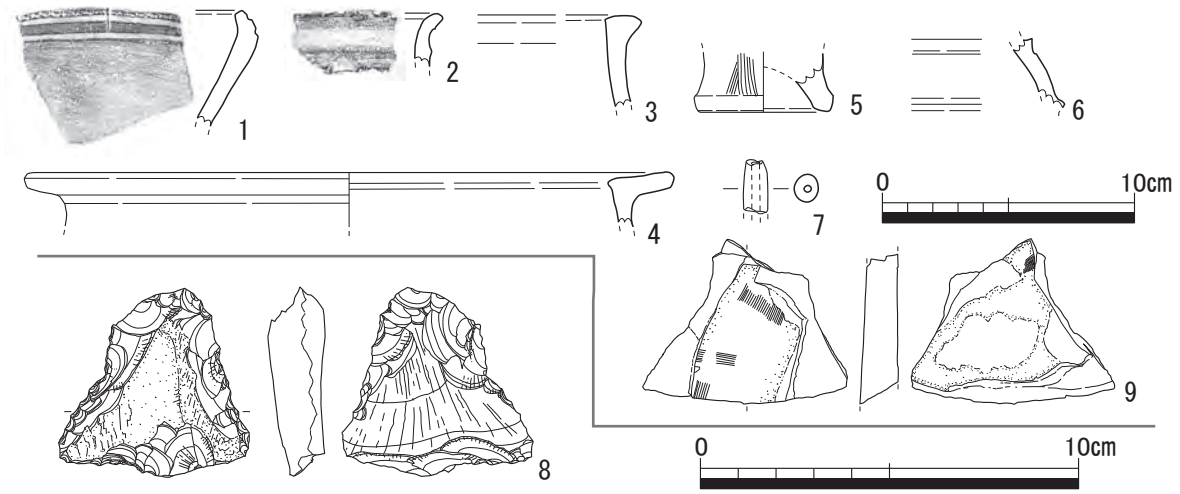


第80図　遺構検出面出土遺物実測図(S=1/3･1/2)

4　遺構検出面の出土遺物(第80図)

4層上面の遺構検出面からの遺物については弥生時代前期を除く縄文時代後期から弥生時代中期の遺物を中心に出土した。遺物の出土状況は1区4層上面の検出面に比べれば、圧倒的に縄文時代後期の遺物が減少して、弥生時代中期の遺物が増加した。

1は弥生時代中期の城ノ越式～須玖Ⅱ式土器の高坏もしくは黒髪式土器の台付甕である。外面にハケメ調整を行い、内面にナデを施す。2は城ノ越式土器で、3は須玖Ⅰ式土器の甕である。2･3は底部で、外面にハケメ調整をして、内面と底面にナデを施す。4は須玖Ⅰ～Ⅱ式土器で、鉢の底部である。内外面にナデを施す。5は黒色黒曜石製の石鏃である。基部の抉りは山形、先端角は100度で、裏面に主要剥離面が残る。6～9はスクレイパーである。6は安山岩の板状節理片を素材としている。短冊型の打製石斧の転用品と思われ、石斧側辺の連続する剥離をスクレイパーの刃部とし、それに直交するように折断することで長方形に整形している。刃部にはさらに簡単な二次加工を施し鋭利な部分を作出。上･下縁辺には一部摩耗もみられる。7は背面に自然面を残す縦長剥片を素材とする。左側縁に二次加工で刃部を作出し、右側縁は自然面の凹凸により粗い鋸歯状をなす。主要剥離面にも簡単な剥離を施している。8は無斑晶質玄武岩を素材とする。弧状の下縁に主要剥離面側からの剥離で刃部を作出し、上縁部は折断により平坦面をなす。上縁部に直交する右側面は平坦な自然面である。主要剥離面には減厚のための二次調整がみられる。この遺物は大きさや形態･整形が石包丁様石器と酷似するが、石材や厚みの点で違いがありスクレイパーに分類した。機能的には石包丁様石器と同様の用途を持つものと考えられる。9は6と素材や形は似ているが刃部は下縁のみで上縁と左側縁は折断部、右側縁は自然面でなっている。刃部に摩耗がみられる。素材の薄さから考えて打製石斧の転用の可能性は低く、石包丁様石器に類するものとも考えられる。10･11は石包丁様石器である。10は緑色片岩を素材としている。本来はもっと厚みのある短冊型の打製石斧だったと思われるが、片理面に沿って割れた破片を石包丁様石器に転用したと思われる。11はやや厚みのある安山岩の板状節理片を素材としており、礫面利用と折断により概形三角形に器体整形している。下縁に両面から二次加工を施し刃部を作出する。刃部と裏面に摩耗がみられる。12は篦状石器で、自然面を残した大形で厚みのある剥片を素材としている。両面に粗い剥離を施し上部は切損している。13･14は磨製石斧である。13は蛇紋岩製で大形、刃部は両刃で弧状をなしている。全面に丁寧な研磨を施している。14は頁岩製の磨製石斧の基部である。全面に丁寧な研磨が施されている。15は頁岩のノジュールを素材とするストーンリタッチャーである。被熱により下半分を破砕している。周縁部に細かい擦痕と鼠歯状痕が、表面中央には被敲打痕がみられる。16は砂岩製の砥石片である。砥面は1面であり、中央部が窪み僅かに研磨痕が残る。下面は平坦で滑面となっており石皿としても使用されたものか。角部は撃打により破損している。被熱による変色がみられる。17は安山岩製の石皿で、本来かなり大形であったと思われ



第81図　小穴出土遺物実測図(S=1/3･1/2)

表1　遺物観察表

挿図番号	出土地点		種別	法量			色調		焼成	胎土					
	グリッド	遺構・層等		口径	器径	底径	外面	内面		角	石	長	雲	赤	他
第 7図 1	B-100	SB25	縄文時代後期後半土器　深鉢	—	〈4.3〉	8.4	黄橙	淡黄橙	良	○	—	○	○	—	—
第 7図 2	B-99	SB25	縄文時代中～後期土器　深鉢	—	〈2.7〉	〈2.4〉	橙	橙	良好	—	—	—	○	—	滑石
第16図 1	B-100	SK29	縄文時代後期土器　小型浅鉢	(7.9)	(4.8)	3.7	褐灰	褐灰	良好	○	—	○	○	○	—
第18図 1	B-1	SK40	縄文時代後期土器　埋甕(深鉢)	—	〈27.2〉	(10.5)	橙	橙	良	○	○	○	○	—	—
第20図 1	B-100	SK60	縄文時代後期土器　埋甕(深鉢)	45.2	49.2	6.2	浅黄橙	浅黄橙	良好	○	—	○	○	—	—
第20図 2	B-100	SK60	縄文時代後期土器　浅鉢	(14.0)	(4.8)	(2.8)	浅黄橙	浅黄橙	良好	○	—	○	○	○	—
第21図 1	B-98	SX46P	縄文時代後期土器　注口土器？	—	〈2.4〉	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	○	—	○	○	—	—
第23図 2	A-2	SB02	弥生時代中期土器　甕	—	〈1.9〉	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	—	○	○	○	○	—
第25図 1	A-100	SB02	弥生時代中期土器　甕	—	〈2.5〉	—	橙	橙	良好	○	○	○	○	○	—
第25図 2	A-100・1	SB02	弥生時代中期土器　広口壺	—	〈2.4〉	—	橙	橙	良好	○	○	—	○	—	—
第25図 3	A-100	SB02	縄文時代後期土器　鉢	—	〈3.4〉	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	○	—	○	—	○	—
第25図 4	A-1	SB02	縄文時代早期押型文土器　深鉢	—	〈3.9〉	—	暗赤褐	暗赤褐	良好	○	○	○	○	—	—
第27図 1	B-100	SB03	弥生時代中期土器　甕	(27.4)	〈3.6〉	—	橙	橙	良好	○	○	—	○	○	—
第27図 2	B-100	SB03	弥生時代中期土器　壺	—	〈4.4〉	—	橙	橙	良好	—	○	○	○	○	—
第27図 3	B-100	SB03P	弥生時代中期土器　無頸壺	(16.0)	〈8.2〉	—	橙	橙	良好	—	○	○	○	○	—
第29図 1	C-99	SB10	縄文時代後期土器　高坏	—	〈6.0〉	—	橙	橙	良好	○	○	○	○	—	—
第31図 1	B-1	SB24P	弥生時代中期土器　壺	—	〈3.1〉	—	橙	橙	良好	○	○	○	○	—	—
第33図 1	B-99	SB30	弥生時代中期土器　甕	—	〈2.3〉	—	橙	橙	良	○	○	—	○	—	—
第33図 2	C-99	SB30P	縄文時代晩期土器　浅鉢	—	〈3.0〉	—	明黄褐	明黄褐	良好	○	—	○	○	○	—
第35図 1	B-99	SB33	弥生時代中期土器　甕	—	〈2.0〉	—	橙	橙	良好	○	○	—	○	○	—
第35図 2	B-99	SB33	弥生時代中期土器　壺	—	〈2.5〉	—	橙	橙	良好	○	○	—	○	○	—
第38図 1	A-1	SB37	縄文時代後期土器　鉢	—	〈5.7〉	—	黒褐	灰白	良好	○	○	○	○	○	—
第41図 4	ZZ-1	SB39	縄文時代晩期土器　浅鉢	—	〈2.8〉	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	○	—	—	○	○	—
第41図 1	ZZ-1	SB39	弥生時代中期土器　壺	—	〈1.8〉	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	○	—	○	○	○	—
第41図 2	ZZ-1	SB39	弥生時代中期土器　壺	—	〈2.0〉	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	○	—	○	○	○	—
第41図 5	ZZ-1	SB39	縄文時代後期土器　鉢	—	〈4.5〉	—	黒褐	黒褐	良好	○	—	○	○	○	—
第41図 3	ZZ-1	SB39	弥生時代中期土器　鉢か器台	—	〈4.2〉	—	浅黄橙	浅黄橙	良好	○	—	○	○	○	—
第43図 1	A-99	SB43	弥生時代中期土器　甕	—	〈3.2〉	—	橙	灰白	良好	○	—	○	○	○	—
第46図 1	ZZ-100	SB52	弥生時代中期土器　甕	—	〈1.4〉	—	橙	橙	良好	○	○	○	○	○	—
第46図 2	ZZ-100	SB52	縄文時代晩期土器　浅鉢	—	〈1.4〉	—	黒褐	黒褐	良好	○	—	○	○	○	—
第56図 1	A-100	SD05上層	弥生時代中期土器　甕	—	〈2.9〉	—	黄橙	黄橙	良	○	○	○	○	○	—
第56図 3	A-100	SD05上層	縄文時代後期土器　浅鉢	—	〈3.2〉	—	灰黄褐	灰黄褐	良好	○	—	—	○	○	—
第56図 2	B-1	SD05上層	弥生時代中期土器　壺	—	〈2.5〉	—	橙	橙	良好	—	—	○	○	○	—
第58図 1	B-100	SD06	弥生時代中期土器　甕	—	〈3.2〉	—	橙	橙	良	○	○	—	○	○	—
第58図 2	B-1	SD06	縄文時代後期土器　鉢	—	〈4.5〉	—	淡黄	淡黄	良	○	○	—	○	○	—
第62図 1	B-100	SX36P	縄文時代後期　円形土製品	長3.8	短3.6	厚0.8	明赤褐	—	良好	○	—	○	○	○	—
第64図 2	A-99	SX44	古代須恵器　碗	—	〈2.8〉	—	赤灰	にぶい橙	良好	—	○	—	○	—	—
第64図 1	A-99	SX44P	弥生時代中期土器　甕？	—	〈2.1〉	—	橙	橙	良好	○	○	—	○	○	—
第66図 1	B-99	SX45	弥生時代中期土器　壺？	—	〈3.1〉	—	黄橙	黄橙	良好	○	—	○	○	○	—
第70図 1	C-100	SB04P9	縄文時代後期土器　鉢	—	〈4.8〉	—	浅黄橙	浅黄橙	良好	○	○	○	○	○	—
第72図 1	B-100	SK20	中世前期土師器　坏	(13.0)	3.2	(10.0)	浅黄橙	浅黄橙	良好	○	—	○	○	○	—
第75図 1	B-99	SD32	近世肥前系陶胎染付　碗	—	〈4.1〉	—	灰	灰	良好	○	○	○	○	—	—
第76図 1	(SB58)	TP4(3層)	縄文時代後期土製品　土版	長4.1	短3.2	厚0.9	黄灰	黄灰	良	○	○	○	○	—	—
第76図 2	—	TP6(1層)	弥生時代中期土器　甕	—	〈1.5〉	—	浅黄橙	浅黄橙	良	○	—	○	○	○	—
第76図 3	—	TP7(3層)	弥生時代中期土器　甕	(26.0)	〈1.8〉	—	浅黄橙	浅黄橙	良好	○	○	○	○	○	—
第76図 4	—	TP7(4層)	弥生時代中期土器　甕	—	〈3.2〉	—	橙	橙	良好	○	○	○	○	○	—
第76図 5	—	TP2(4層)	弥生時代中期土器　壺か高坏	—	〈1.5〉	—	橙	橙	良好	—	○	○	○	○	—
第76図 6	—	TP1(4層)	弥生時代中期土器　壺	—	〈2.3〉	—	浅黄橙	浅黄橙	良好	—	○	○	○	—	—
第76図 7	—	TP2(4層)	弥生時代中期土器　壺	—	〈3.7〉	—	橙	橙	良	—	○	○	○	○	—
第76図 8	—	TP7(4層)	弥生時代中期土器　壺	—	〈4.4〉	—	浅黄橙	浅黄橙	良好	○	○	○	○	○	—
第76図 9	—	TP6(1層)	古墳時代須恵器　坏蓋	—	〈2.3〉	—	灰黄褐	灰黄褐	良	○	—	○	○	—	—
第76図10	—	TP8(1層)	中世後期朝鮮系灰釉陶器　皿	—	〈1.9〉	—	灰白	灰白	良好	—	○	○	○	—	—
第77図 1	—	包(1・2層)	縄文時代後期土器　粗製深鉢	—	〈3.8〉	(7.8)	橙	橙	良	○	—	○	○	○	—
第77図 2	—	包(1・2層)	弥生時代早期土器　甕	—	〈4.0〉	—	橙	橙	良好	○	○	○	○	—	—
第77図 3	—	包(1・2層)	弥生時代中期土器　甕	—	〈2.3〉	—	浅黄橙	浅黄橙	良好	○	○	○	○	○	—
第77図 4	—	包(1・2層)	弥生時代中期土器　甕	—	〈2.3〉	—	橙	浅黄橙	良	○	○	○	○	—	—
第77図 5	—	包(1・2層)	弥生時代中期土器　甕	—	〈6.4〉	〈1.6〉	橙	橙	良好	○	○	○	○	—	—
第77図 6	—	包(1・2層)	古墳時代須恵器　坏蓋	—	〈3.0〉	—	灰白	灰白	良好	○	—	○	○	—	—
第77図 7	—	包(1・2層)	中世後期・景徳窯系磁器　碗	—	〈2.1〉	—	明緑灰	明緑灰	良好	—	○	○	—	—	—
第78図 1	B-99	包(3層)	縄文時代後期土器　鉢	—	〈2.8〉	—	浅黄橙	褐灰	良	○	○	○	○	○	—
第78図 2	C-100	包(3層)	縄文時代後期土器　鉢	—	〈2.1〉	—	黒褐	黒褐	良好	○	○	○	○	—	—
第78図 3	C-99	包(3層)	縄文時代後期土器　浅鉢か注口土器	—	〈2.7〉	—	橙	浅黄橙	良好	○	—	—	—	○	—
第78図 4	A-1	包(3層)	縄文時代後期土器　鉢	—	〈2.9〉	—	橙	橙	良好	○	—	—	—	—	—
第78図 5	C-100	包(3層)	縄文時代後期土器　鉢	—	〈2.6〉	—	橙	橙	良好	○	○	○	○	—	—
第78図 6	ZZ-100	包(3層)	縄文時代晩期土器　浅鉢	—	〈2.5〉	—	赤灰	赤灰	良好	○	—	—	—	○	—
第78図 7	A-1	包(3層)	縄文時代晩期土器　浅鉢	—	〈1.9〉	—	褐灰	褐灰	良好	—	○	—	—	—	—
第78図 8	B-100	包(3層)	縄文時代晩期土器　浅鉢	—	〈2.0〉	—	浅黄橙	浅黄橙	良好	○	—	—	○	—	—
第78図 9	B-99	包(3層)	弥生時代早期土器　甕	—	〈2.7〉	—	橙	橙	良好	○	—	○	—	—	—
第78図10	C-99	包(3層)	弥生時代早期土器　甕	—	〈2.1〉	—	橙	橙	良好	○	○	○	○	○	—
第78図11	C-99	包(3層)	弥生時代早期土器　甕	—	〈2.9〉	—	褐灰	褐灰	良好	○	○	—	○	○	—
第78図12	B-100	包(3層)	弥生時代中期土器　甕	—	〈1.6〉	—	浅黄橙	浅黄橙	良	○	○	—	○	○	—
第78図13	A-1	包(3層)	弥生時代中期土器　台付甕	—	〈2.6〉	(6.7)	橙	橙	良好	○	○	○	○	○	—
第78図14	A-1	包(3層)	弥生時代中期土器　台付甕	—	〈3.2〉	(6.4)	明黄褐	明黄褐	良	○	○	—	○	—	—
第78図15	B-1	包(3層)	弥生時代中期土器　甕	—	〈3.7〉	(6.0)	橙	橙	良好	—	○	—	—	—	—
第78図16	B-99	包(3層)	弥生時代中期土器　壺	—	〈2.5〉	—	橙	橙	良好	○	○	—	○	○	—
第78図17	A-99	包(3層)	弥生時代中期土器　小型鉢か無頸壺	—	(3.4)	—	明赤褐	明赤褐	良好	—	○	—	○	○	—
第78図18	ZZ-1	包(3層)	中世須恵器　甕	—	〈7.9〉	—	浅黄橙	浅黄橙	良	○	—	—	○	—	—
第78図19	A-1	包(3層)	中世須恵器　甕	—	〈6.2〉	—	淡黄	淡黄	良	—	—	—	○	○	—
第78図20	A-1	包(3層)	中世後期瓦質土器　擂鉢	—	〈5.3〉	—	橙	橙	良好	○	—	—	○	—	—
第78図21	B-99	包(3層)	中世後期瓦質土器　擂鉢	—	〈3.7〉	—	浅黄橙	浅黄橙	良好	○	—	○	○	○	—
第78図22	B-100	包(3層)	中世前期土師器　坏	—	〈1.2〉	〈2.9〉	橙	橙	良好	○	—	○	○	○	—
第78図23	B-1	包(3層)	中世前期土師器　小皿	(6.8)	1.7	(5.6)	橙	橙	良好	○	—	○	○	○	—
第78図24	B-99	包(3層)	中世前期　小皿	(7.7)	〈1.9〉	(5.4)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	○	—	○	○	○	—
第78図25	A-1	包(3層)	中世青白磁　皿か碗	—	〈0.8〉	(8.0)	灰白	灰白	良好	○	○	○	—	—	—
第78図26	B-1	包(3層)	中世前期龍泉窯系青磁　碗	—	〈2.1〉	—	オリーブ灰	オリーブ灰	良好	○	—	○	○	—	—
第78図27	B-100	包(3層)	中世前期龍泉窯系青磁　碗	—	〈2.4〉	(5.1)	オリーブ灰	オリーブ灰	良好	○	—	—	—	—	—
第78図28	C-99	包(3層)	中世土製品　土錘	長〈2.8〉	—	厚0.8	赤橙	—	良好	—	—	—	○	○	—
第78図29	C-99	包(3層)	中世土製品　土錘	長〈3.9〉	—	厚1.8	淡黄	—	良好	○	—	○	○	○	—
第78図30	B-99	包(3層)	中世土製品　土錘	長5.4	—	厚1.4	赤褐	—	良好	○	—	○	○	○	—
第80図 1	B-1	検出面	弥生時代中期土器高　坏か台付甕	—	〈3.1〉	—	橙	橙	良好	○	○	○	○	—	—
第80図 2	A-1	検出面	弥生時代中期土器　甕	—	5.3	〈1.4〉	橙	にぶい黄橙	良好	○	○	○	○	○	—
第80図 3	A-1	検出面	弥生時代中期土器　甕	—	〈3.4〉	(6.5)	橙	浅黄	良好	—	○	○	○	○	—
第80図 4	B-1	検出面	弥生時代中期土器　鉢？	—	〈3.6〉	(5.1)	橙	橙	良好	○	—	—	○	○	—
第81図 4	C-100	小穴	弥生時代中期土器　甕	(25.8)	〈2.1〉	—	橙	橙	良好	—	○	—	○	○	—
第81図 5	A-1	小穴	弥生時代中期土器　台付甕	—	〈2.4〉	(5.1)	明赤褐	明赤褐	不良	—	○	○	○	—	—
第81図 7	A-1	小穴	中世土製品　土錘	長〈2.2〉	—	厚0.8	橙	—	良好	○	—	—	○	○	—
第81図 6	B-99	小穴	弥生時代中期土器　壺	—	〈2.7〉	—	黄橙	橙	良好	○	○	○	○	○	—
第81図 1	B-100	小穴	縄文時代後期土器　鉢	—	〈4.6〉	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	○	—	○	○	○	—
第81図 3	B-99	小穴	弥生時代中期土器　甕	—	〈3.6〉	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	—	○	—	○	○	—
第81図 2	ZZ-100	小穴	縄文時代後期土器　鉢	—	〈2.1〉	—	橙	橙	良好	○	—	—	○	—	—

包：遺物包含層の略
遺検面：遺構検出の略
TP：範囲確認調査坑の略
P：小穴のこと

( )復元径、〈 〉残存長
単位はcm・g

○色の色は割愛

角：角閃石の略、石：石英の略
長：長石の略、雲：雲母の略
赤：赤色粒の略

る。下面は破砕により失われている。皿部は滑面になっている。18は木杭である。B-98の遺構検出面から突き刺さった状態で出土した。枝は落とされて、先端を細く加工している。残存長11.2㎝、

杭の頭の円周が約8.5㎝を測る。腐食した部分を考慮しても小形であるように思われる。

5　小穴の出土遺物(第81図)

竪穴住居などの帰属不明な柱穴等の小穴(ピット)からは弥生時代前期を除く縄文時代後期から弥生時代中期の遺物を中心に出土した。

1は縄文時代後期の太郎迫式土器の鉢である。口縁部の文様帯に2条沈線を巡らせて、疑似縄文を施す。外面はミガキ調整を行い、内面はナデを施す。2は縄文時代後期の鳥井原式土器の鉢である。口縁部の外面に凹線文どうしが接することで視覚的に稜をなして見える稜線文を巡らせる。また凹点文を施す。内外面にナデ調整を行う。3は弥生時代中期の城ノ越式土器の甕である。口縁部は断面三角形で、内外面にヨコナデを施す。4は弥生時代中期の須玖Ⅰ式土器の甕である。鋤先状(逆L字状)口縁部が若干上向き、器壁は比較的薄手である。このことから、中九州系土器の影響を受けているものと考えられる。内外面にヨコナデを施す。外面に煤が付着する。5は弥生時代中期の中九州系の黒髪式土器の台付甕である。脚部の外面はハケメ調整を行い、内面はナデを施す。6は弥生時代中期の須玖Ⅰ～Ⅱ式土器の壺である。胴部の外面に突帯を巡らせて、内外面にヨコナデを施す。7は中世と考えられる土錘で、表面はナデ調整を行う。8はスクレイパーである。比較的大形の剥片の周囲に粗い加工を施し、概形三角形に整形している。第76図14と同種のものと思われる。9は板状の砂岩を素材とした砥石であるが、破損により表裏2面に砥面が僅かに残るのみである。被熱しており破損の原因と思われる。研磨痕が微かに認められる。

表2　遺物観察表

挿図番号	出土地点		種別	材質	法量			
	グリッド	遺構・層等			長さ	幅	厚さ	重量
第 7図 3	B-100	SB25P	石包丁様石器	安山岩	6.5	5.8	0.9	35.2
第 9図 1	B-1	SB27P	石錘	砂岩	7.1	8.3	1.8	140.9
第12図 1	ZZ-100	SB59	石鏃	安山岩	2.7	〈1.5〉	0.5	〈1.6〉
第23図 2	A-1	SB01	打製石斧	結晶片岩	14.2	6.3	14.2	207.4
第23図 3	B-1	SB01	鉄鏃	鉄	〈3.5〉	〈1.0〉	〈0.4〉	〈4.1〉
第23図 4	A-1	SB01	鉄製品	鉄	〈3.6〉	〈2.7〉	〈0.4〉	〈8.7〉
第23図 5	B-2	SB01P	鉄鏃	鉄	〈3.4〉	1.1	〈0.2〉	〈1.7〉
第23図 6	A-1	SB01	鉄鏃(茎部)	鉄	〈5.9〉	〈0.5〉	〈0.5〉	〈5.7〉
第23図 7	B-1	SB01	石鏃	黒色黒曜石	2.7	〈1.6〉	0.45	〈0.9〉
第27図 4	B-100	SB03	礫(支脚?)	安山岩	〈9.4〉	〈9.1〉	〈7.0〉	〈640.0〉
第27図 5	B-100	SB03	石皿	砂岩	〈9.5〉	〈13.7〉	〈3.7〉	〈635.0〉
第27図 6	B-100	SB03P	石包丁様石器	安山岩	6.6	5.8	1.1	48.5
第27図 7	B-99	SB03P	微細剥離を有する剥片	黒色黒曜石	1.8	2.6	0.6	2.0
第27図 8	B-100	SB03	微細剥離を有する剥片	無斑晶質玄武岩	2.7	2.8	0.6	3.6
第29図 2	C-99	SB10	石包丁様石器	安山岩	8.0	6.9	1.5	110.7
第31図 2	B-1	SB24	石皿	砂岩	〈11.5〉	〈7.5〉	〈2.2〉	〈283.0〉
第33図 3	B-99	SB30	石鏃	無斑晶質玄武岩	2.7	〈2.4〉	0.6	〈3.0〉
第38図 2	A-1	SB37	軽石	軽石	10.0	9.8	6.6	127.0
第41図 6	ZZ-1	SB39	敲石	安山岩	8.8	7.7	6.9	〈450.0〉
第41図 8	ZZ-1	SB39	スクレイパー	安山岩	7.9	3.5	0.8	13.8
第41図 7	ZZ-1	SB39	石鏃	黒色黒曜石	2.3	1.6	0.4	1.2
第43図 2	A-99	SB43P	石包丁様石器	安山岩	5.9	6.5	1.5	59.2
第56図 4	A-100	SD05上層	磨石	安山岩	〈11.2〉	〈11.0〉	〈5.0〉	〈880.0〉
第56図 5	ZZ-99	SD05	敲石	安山岩	10.6	5.9	4.4	372.6
第56図 6	A-100	SD05上層	石皿	砂岩	〈10.0〉	〈9.6〉	〈4.3〉	〈615.0〉
第56図 7	B-1	SD05下層	スクレイパー	黒色黒曜石	2.7	4.2	1.2	11.7
第60図 1	B-98	SD11	磨製石斧	緑色片岩	〈6.6〉	〈4.3〉	〈0.9〉	〈49.9〉
第68図 1	B-1	SX18	加工痕ある石器	無斑晶質玄武岩	2.5	3.7	0.75	7.7
第76図 11	—	TP5(3層)	石鏃	黒色黒曜石	〈2.6〉	〈1.7〉	0.4	〈1.1〉
第76図 12	—	TP3(3層)	石錐	黒色黒曜石	2.25	1.8	0.5	1.6
第76図 13	—	TP1(4層)	スクレイパー	無斑晶質玄武岩	4.0	1.45	0.6	2.6
第76図 14	—	TP1(4層)	スクレイパー	無斑晶質玄武岩	5.4	5.2	1.3	31.5
第76図 15	—	TP1(4層)	石包丁様石器	結晶片岩	4.5	7.2	1.1	42.0
第76図 16	—	TP7(4層)	石包丁様石器	緑色片岩	3.9	5.7	2.0	27.6
第76図 17	—	TP6(3層)	打製石斧	安山岩	〈7.1〉	〈7.3〉	〈1.4〉	〈130.3〉
第76図 18	—	TP2(4層)	磨石	砂岩	〈8.2〉	〈10.5〉	〈5.6〉	〈610.0〉
第76図 19	—	TP4(3層)	石皿	砂岩	〈4.2〉	〈4.8〉	〈3.3〉	〈74.8〉
第77図 8	—	包(1・2層)	石匙	無斑晶質玄武岩	3.5	4.8	1.2	16.6
第78図 31	B-1	包(3層)	台形石器	暗灰色黒曜石	〈2.9〉	〈2.2〉	0.65	〈3.1〉
第78図 32	B-100	包(3層)	石鏃	黒色黒曜石	1.4	1.2	0.3	0.3
第78図 33	B-99	包(3層)	彫器	黒色黒曜石	3.2	1.75	1.1	4.0
第78図 34	A-1	包(3層)	スクレイパー	無斑晶質玄武岩	5.4	5.9	1.7	45.0
第78図 35	B-1	包(3層)	スクレイパー	無斑晶質玄武岩	6.4	4.6	1.4	45.1
第78図 36	B-100	包(3層)	スクレイパー	黒色黒曜石	2.0	2.0	0.65	2.2
第78図 37	C-100	包(3層)	微細剥離を有する剥片	黒色黒曜石	2.7	1.2	0.8	1.5
第78図 38	A-99	包(3層)	石包丁様石器	頁岩	5.4	6.7	1.4	54.7
第78図 39	A-1	包(3層)	石包丁様石器	安山岩	7.2	7.2	1.1	61.5
第78図 40	B-99	包(3層)	石包丁様石器	安山岩	5.2	6.1	1.6	36.0
第79図 41	B-100	包(3層)	打製石斧	安山岩	〈5.0〉	〈4.2〉	〈1.4〉	〈24.2〉
第79図 42	B-100	包(3層)	砥石	砂岩	3.2	3.5	0.8	11.3
第79図 43	A-1	包(3層)	石鍋片	滑石	〈4.2〉	〈5.4〉	〈2.1〉	〈35.5〉
第79図 44	ZZ-1	包(3層)	鉄滓	鉄	5.9	5.6	3.0	98.0
第80図 5	C-100	検出面	石鏃	黒色黒曜石	1.6	2.0	0.4	0.8
第80図 6	B-1	検出面	スクレイパー	安山岩	6.0	4.1	1.1	37.4
第80図 7	B-99	検出面	スクレイパー	無斑晶質玄武岩	5.1	2.2	0.9	10.0
第80図 8	C-100	検出面	スクレイパー	無斑晶質玄武岩	4.8	6.2	1.4	45.5
第80図 9	C-100	検出面	スクレイパー	安山岩	5.9	3.6	0.8	23.4
第80図 10	ZZ-100	検出面	石包丁様石器	緑色片岩	5.4	7.8	0.9	52.1
第80図 11	ZZ-100	検出面	石包丁様石器	安山岩	6.7	7.1	1.9	94.3
第80図 12	B-99	検出面	箆状石器	無斑晶質玄武岩	〈3.4〉	〈4.5〉	〈1.6〉	〈22.7〉
第80図 13	C-99	検出面	磨製石斧	蛇紋岩	〈18.2〉	〈7.2〉	〈3.0〉	〈535.0〉
第80図 14	ZZ-99	検出面	磨製石斧	頁岩	〈7.7〉	〈4.9〉	〈3.3〉	〈135.3〉
第80図 15	B-99	検出面	ストーンリタッチャー	頁岩	〈6.8〉	〈7.1〉	〈3.6〉	〈207.8〉
第80図 16	C-99	検出面	砥石	砂岩	〈8.5〉	〈8.7〉	〈3.2〉	〈319.3〉
第80図 17	ZZ-100	検出面	石皿	安山岩	〈8.6〉	〈7.5〉	〈2.6〉	〈193.3〉
第80図 18	B-98	検出面	木杭	木	〈11.2〉	〈3.1〉	〈2.3〉	〈25.4〉
第81図 8	ZZ-100	小穴	スクレイパー	無斑晶質玄武岩	5.0	5.0	1.5	33.1
第81図 9	ZZ-99	小穴	砥石	砂岩	〈6.6〉	〈8.1〉	〈1.5〉	〈70.4〉

包:遺物包含層の略
遺検面:遺構検出の略
TP:範囲確認調査坑の略
P:小穴のこと

〈 〉残存値
単位はcm・g

第Ⅳ章　総括

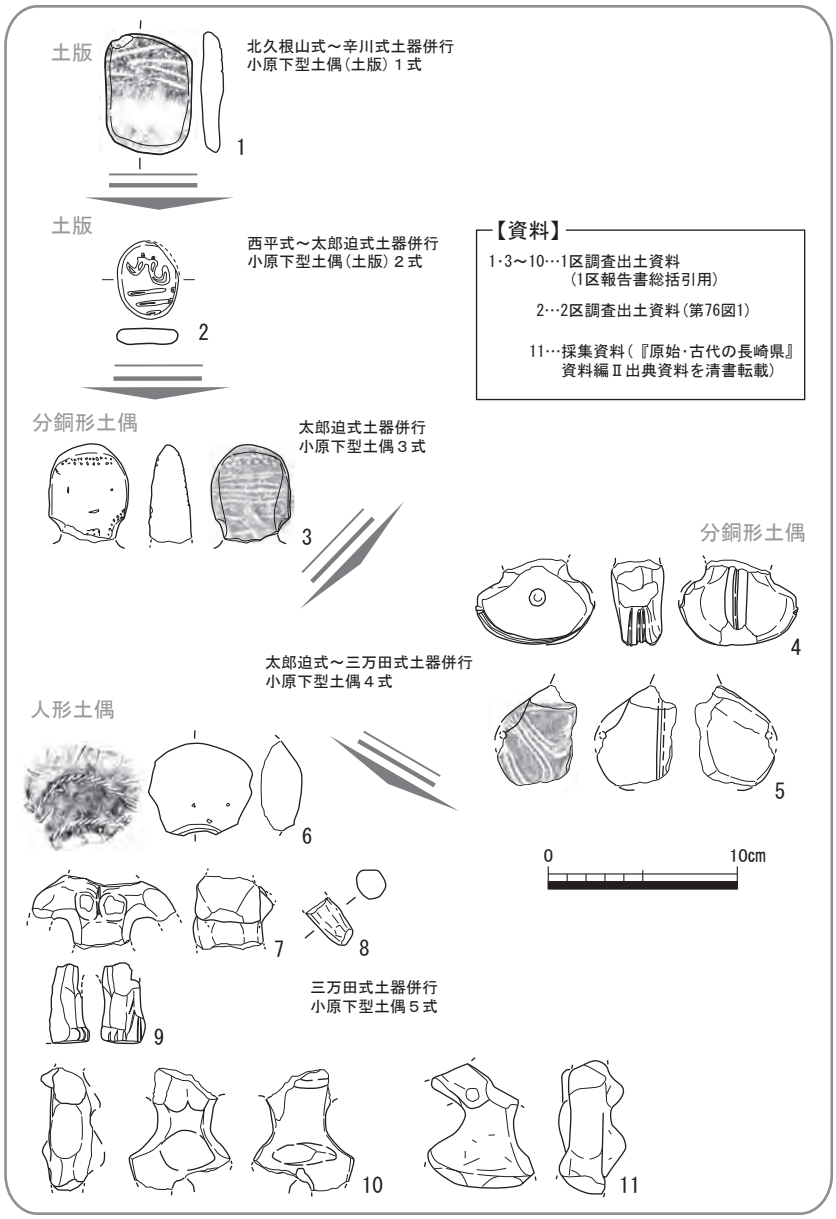
第１節　小原下遺跡2区の出土遺物

１　縄文土器について

小原下遺跡2区より出土した最も古い縄文土器は縄文時代早期後半の弘法原式土器(第25図4)である。この土器は一野式土器から続く円筒形を基調とする山形押型文の文様を施す土器である。

縄文時代前期の遺物は出土しておらず、中期から後期前半の阿高式系土器の深鉢と思われる滑石を胎土に含んだ底部(第7図2)が出土した。

当調査区では1区調査に比べると面積に占める土器の出土量は激減したものの、1区同様に縄文時代後期後半の西平式･太郎迫式･三万田式･鳥井原式土器が纏まって出土する様相は変化ない。SB37に混入して当遺跡では希少な西平式土器(第38図1)が出土している。注目すべきは西平式～太郎迫式土器に併行する象嵌を施した円形の土版(第76図1･第82図2)が出土した点である。1区で設定した土偶の編年(宇土･大坪2011)の小原下型土偶1式の土版より新しく、小原下型土偶2式より古く、新たに位置づけられるものである。したがって、今回出土した土版を小原下型土偶2式として追加することにより、前回の2式→3式、3式→4式、4式→5式の順に変更して第82図のように再設定した。詳しい説明は1区の前報告を参照していただきたい。続く太郎迫式土器も1区同様に多く出土するが、1点のみ南九州系の中岳Ⅰ式土器の影響を受けた土器(第78図1)が出土している。続く三万田式土器も太郎迫式土器と同様に多く出土しており、SB10に混入して三万田式土器の高坏(第29図1)が出土した。続く鳥井原式土器を最盛期として縄文土器は減少する。SK40･60から出土した埋甕や浅鉢はいずれも稜線文を特徴とする鳥井原式土器(新段階)である。そのSK60から出土した浅鉢(第20図2)は内面のみ全面に赤色顔料が付着するため顔料等を



第82図　小原下遺跡における土偶編年表(S=1/4)

入れる容器の可能性も考えられる。

1区調査と同様に鳥井原式土器以降の幾型式の土器は出土せず、再び晩期の古閑式・黒川式土器が確認できた。

2　弥生土器について

縄文時代の黒川式土器に後続する弥生時代早期の山ノ寺式･夜臼式土器が出土したが、その後の弥生時代前期の板付Ⅰ･Ⅱ式土器は全く出土しなかった。

小原下遺跡及び当調査区において縄文時代後期後半以降に再び集落の最盛期を迎えるのが弥生時代中期であり、当遺跡の中期の弥生土器をⅠ～Ⅲ期の3時期に分けて説明(第83図)する。また黒髪式(系)土器については西健一郎氏(1983)と中園聡氏(2004)の論考を、島原半島出土の中期土器については宮崎貴夫氏(1984)の考察を基に分類･編年した。

Ⅰ期

Ⅰ期とした弥生時代中期初頭に城ノ越式土器が出現する。ただし、中九州系の黒髪式土器(西1983)系の上の原式土器(中園2004)も同時に出現する。城ノ越式土器の甕の口縁部は断面三角形を特徴とする。一方、上の原式土器の口縁部の断面三角形も厚みがあり、丸みがある。

Ⅱ期

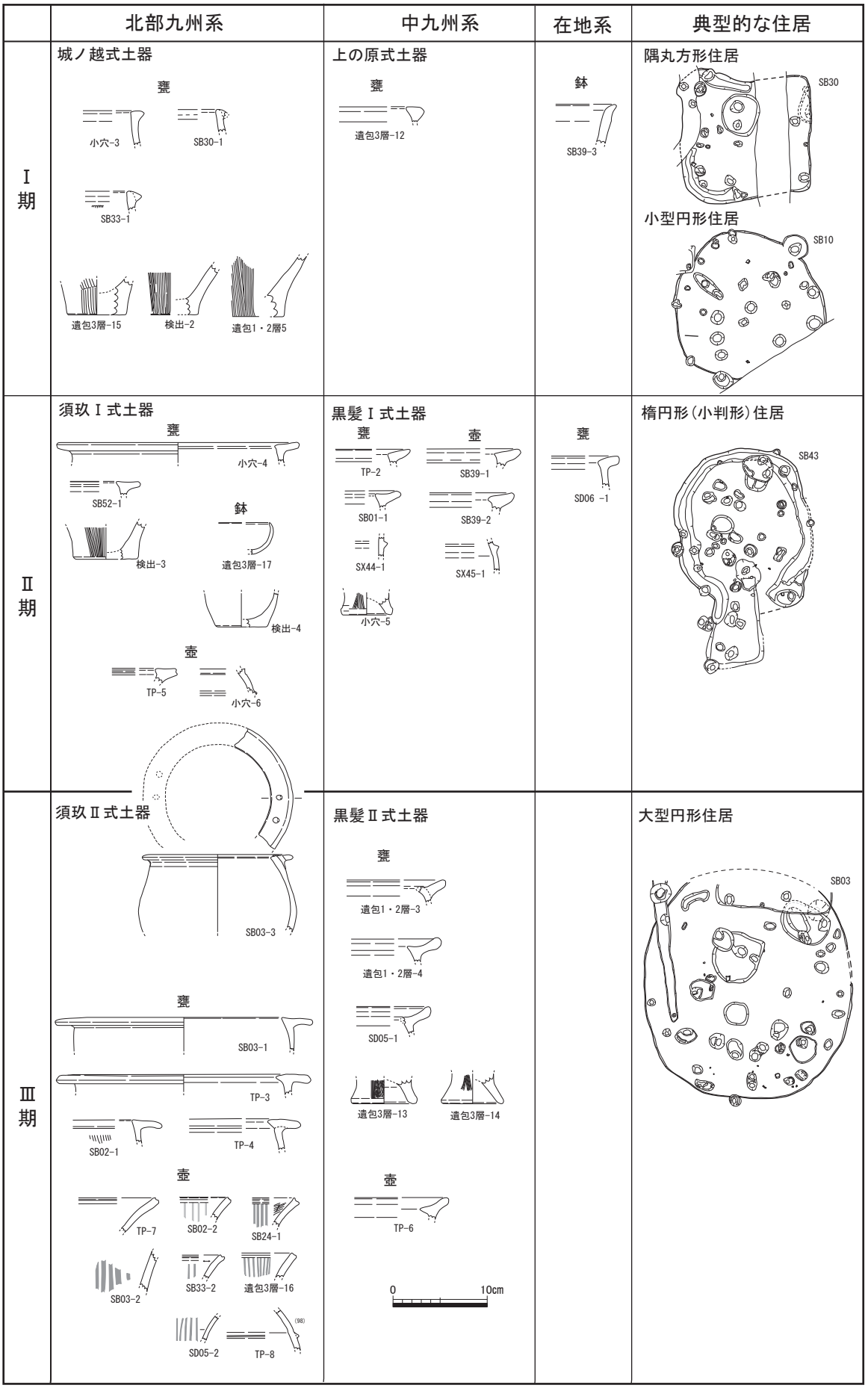
続くⅡ期とした須玖Ⅰ式土器の頃になると調査区では器種構成に壺などもの器種も加わり、出土量も増加する。甕は鋤先状口縁で、器壁は比較的薄手である。一方、調査区から出土した中九州系の黒髪Ⅰ式土器(中園2004)は逆L字形を呈する鋤先状の口縁部が若干内湾気味に上向き始め、器壁が肥厚して、口唇部がやや丸みをもつ。北部九州系の須玖Ⅰ･Ⅱ式土器と中九州系の黒髪Ⅰ･Ⅱ式土器とでは器形のみでなく、胎土･土器の色調にも違いが見られ、北部九州系土器は褐色で器面に砂粒が露出しないほど精巧な造りであるが、中九州系土器は相対的に白っぽい灰黄褐色で器面に砂粒が露出する。甕の底部は完形のものが出土しておらず破片のみの分析であるが、北部九州系は城ノ越式土器のよりも薄底化した平底で、中九州系土器は台付の脚台が付く。壺も破片が多く、口縁部の形態は甕に類似し、胴部は断面三角形の突帯が付く。

Ⅲ期

Ⅲ期とした須玖Ⅱ式土器の頃になると、須玖Ⅰ式土器よりも器種構成において壺の増加が見られる。甕は鋤先状の口縁部が水平もしくは下気味に長くのびて、器壁が薄い。底部は出土していない。一方、中九州系の黒髪Ⅱ式土器(中園2004)は逆L字形を呈する鋤先状の口縁部が内湾気味に上向きにのびて、器壁が肥厚して、口唇部がやや丸みをもつ。底部は台付の脚台が付く。北部九州系の壺の種類は無頸壺と広口壺が出土している。無形壺は鋤先口縁で口縁部に2個の紐を通すような穿孔を施す。北部九州系の壺は広口壺の出土量が圧倒的に多く、口縁部が外反し、稜角付の口唇部である。丹塗に暗文を施すものが多い。中九州系の壺は口縁部のみしか出土しておらず、特徴としては中九州系の甕と類似する。

以上の様に小原下遺跡2区の弥生時代中期土器は北部九州系の城ノ越式～須玖Ⅱ式土器と中九州系の上の原式～黒髪Ⅱ式土器とを受容して用いていたことが伺える。調査区で確認できた中期の住居では住居単位での遺物の出土状況から、北部九州系土器と中九州系土器のいずれか一方を用いる場合と共伴して出土する場合とがあった。

その後の弥生時代後期の土器は当調査区では全く確認することができなかった。



第83図　小原下遺跡2区における弥生時代中期の土器編年表(S=1/6･1/160)

3　石器について

小原下遺跡2区では主に縄文時代後期後半と弥生時代中期の遺構が確認できた。石器について言えば全体の出土量は少なく遺構に伴ったものも僅少であったが、石鏃･石錐･彫器･石匙･スクレイパー･石包丁様石器･微細剥離を有する剥片･加工痕ある石器･篦状石器･打製石斧･磨製石斧･磨石･敲石･ストーンリタッチャー･砥石･石皿･石錘･台石が出土した。

特に今回の調査で少ない出土量の石器にあって占有率の高い石包丁様石器は、本報告書に記載したものだけで11点を数え、小原下遺跡2区の特徴的な石器であるといえる。ここではこの石包丁様石器を中心に遺跡における出土石器の特徴を考えてみたいと思う。なお石器の分類については南島原市深江町権現脇遺跡での渡邊康行氏の器種分類(渡邊･島内2006)に習った。まず石材については安山岩･片岩類･頁岩の板状節理片を素材としており、中でも安山岩が最も多い。素材の薄さもほぼ共通している。形は石斧を横位に折断したような半楕円形や長方形がほとんどで、石器の大きさは掌に収まるサイズである。器体整形･再調整加工については、縁辺部に鋭利な刃部と鋭利さを抑えた二次加工、節理面や自然面を残した平坦部を作出しており、大きさを整えるための折断や撃打を行っている。比較的刃部が短いのも特徴である。また使用痕等については目視によるものだが、刃部には摩耗が見られる場合が多い。節理面などの表裏面には部分的に摩耗がみられ、実際に持ってみると手指が接する部分と重なるため、手擦れの可能性がある。また本調査出土の石包丁様石器は石斧の転用品が少なくとも3点含まれており石器利用の在り方を窺う事が出来る。

他にもスクレイパーに分類した第78図34･第80図8は石包丁様石器と多くの共通点を持ちながら、石材に相違点がある事で別に分類したものである。石包丁様石器と同様の機能を持つ可能性も高い。以上から石包丁様石器は石包丁に類似する石器であり、収穫具、特に刃部の短さから穂摘具的な用途を考えてよかろう。今回、小原下遺跡2区からはSD11～16が溝状遺構群として確認されているが、SD11～15については畠の可能性があり、石包丁様石器がこれだけまとまって出土した事と関係が高いと思われる。他に、農耕具の可能性があるものに第39図8･第80図6･9の石器がある。

今後の課題として、小原下遺跡2区からは漁労具の出土が皆無に等しい事や、剥片が少ない事、遺構に伴う石器の出土が少ない事などを検討する必要がある。

石器をまとめるにあたり、渡邊康行氏には多大なるご指導･ご教示をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。

4　その他の遺物について

弥生時代中期以降の確認できた遺物は古墳時代と古代の須恵器の坏や蓋が僅かに出土した。

中世の遺物は1･2区ともに纏まって出土している。遺構から出土した中世の遺物については2節で述べることにして、その他の包含層や検出面などから出土した中世の遺物は瓦質土器の擂鉢(第78図20･21)や須恵器の甕(第78図18･19)、石鍋片(第79図43)である。また、土錘が纏まって出土したため、漁労を営んでいたことを伺わせる。

中世前期の遺物は土師器の小皿(第78図23･24)や龍泉窯系青磁の碗(第78図26･27)が出土した。

中世後期の遺物は磁器の碗(第77図7)や朝鮮系灰釉陶器の皿もしくはぐいのみ(第76図10)が出土している。

国産品の土師器･瓦質土器･須恵器など以外に貿易陶磁が出土するのは島原半島が海に囲まれているという点で流通に適し、それを消費するだけの環境にあったと考えられる。

第２節　小原下遺跡2区の遺構

１　縄文時代後期後半の遺構について

小原下遺跡2区において確認できた主な縄文時代の遺構は竪穴建物が4軒、土坑が5基、性格不明遺構が数基である。その竪穴建物は全てが住居として用いられたと考えられる。また土坑は5基の内、2基は埋甕を埋設する遺構であった。いずれの遺構も出土遺物から縄文時代後期の太郎迫式～鳥井原式土器の頃であった。

竪穴住居の属性は形状が長方形もしくは隅丸方形を呈して、その他の性格も1区調査と類似する。SB24の弥生時代の住居は形態が不定形であることと、遺物に縄文時代後期の遺物が多く混入していることから、縄文時代の住居を削平して営まれた可能性がある。その他、埋甕を直立に埋設する土坑は2基確認しており墓壙と考えられる。時期は埋甕より判断して鳥井原式土器の頃であった。その内、SK60出土の埋甕は底部に水抜き用の単孔を設けている。

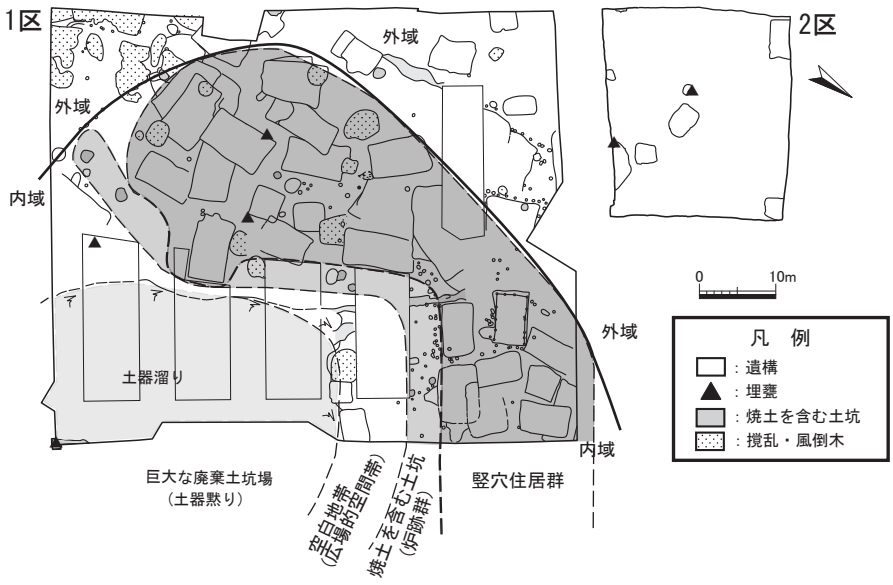
当遺跡における縄文時代後期後半の住居や土坑、遺物は1区に集中し、2区や1区の西側といった外へ向かうにつれて疎らになる。このことから、1区及び1区より東側から南側にかけてが集落の中心地の居住空間であり、2区の遺構はその周囲に疎らに点在する住居や墓壙等と考えられる。

また、続く晩期の頃になると、調査区の西側へ向かうにつれて遺物が増加するため、1･2区の西側付近に晩期の遺跡が広がる可能性も考えられる。

２　弥生時代中期の遺構について

小原下遺跡2区において確認できた主な弥生時代の遺構は竪穴建物が14軒、土坑が8基、溝が2条、5～6条の溝状遺構からなる畠と考えられる溝状遺構群1群、性格不明遺構が10基近くである。

調査区において確認できた弥生時代の竪穴住居は14軒である。竪穴住居の時期は弥生時代中期の城ノ越式土器や上の原式土器から須玖Ⅱ式や黒髪Ⅱ式土器にかけての頃であった。最も古い竪穴住居は城ノ越式土器や上の原式土器が出土したSB10･30･33･35･37･38･43･50である。次に後続する時期の須玖Ⅰ式土器や黒髪Ⅰ式土器が出土した竪穴住居はSB01･52、前時期から存続するSB37～39･43である。さらに後続する時期の須玖Ⅱ式土器や黒髪Ⅱ式土器が出土したのがSB02･03･24である。当調査区内では中期末をもって集落の終焉を迎えて、弥生時代後期の住居や遺構･遺物は全く確認することができなかった。



第84図　小原下遺跡縄文時代後期後半竪穴住居群(S=1/1,000)

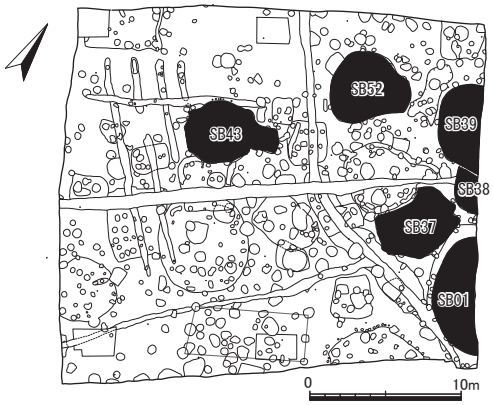
竪穴住居の形態は円形・楕円形・長方形・隅丸方形・不定形といった多種の形状が確認できた。比較的「大型円形」の竪穴住居はSB01～03・39で主に須玖Ⅰ式・黒髪Ⅰ式土器から須玖Ⅱ式・黒髪Ⅱ式土器の頃である。「小型円形」の竪穴住居はSB10で城ノ越式土器の頃である。「楕円形」の竪穴住居はSB37・38・43で主に城ノ越式土器から須玖Ⅰ式土器の頃である。「長方形」の竪穴住居はSB30で城ノ越式土器の頃である。「隅丸方形」の竪穴住居はSB33・35・50で主に城ノ越式土器の頃である。「不定形」を呈する竪穴住居はSB24のみであるが、この形状については縄文時代の住居の上に弥生時代の住居が重複して造られているため、同時に完掘した可能性がある。これらのことから、住居の形状が「長方形・隅丸方形・小型円形」のものが主に城ノ越式土器の時期で、小判形と呼ばれることもある「楕円形」のものが城ノ越式土器から須玖Ⅰ式土器の時期で、比較的「大型円形」のものが主に須玖Ⅰ式・黒髪Ⅰ式土器から須玖Ⅱ式・黒髪Ⅱ式土器の時期である。つまり、小原下遺跡2区における住居の形状は「長方形・隅丸方形・小型円形」→「楕円形(小判形)」→「大型円形」(第81図)と変遷すると考えられる。このことを切り合い関係と出土遺物で如実に示しているのがSB30→SB43→SB03の変遷である。

竪穴住居の規模は大型円形が長径5.80～7.97ｍで、小型円形が長径4.16ｍで、楕円形が長径3.74～5.37ｍである。長方形は長径4.71ｍ×短径3.41ｍで、隅丸方形は長径2.52～3.64ｍ×短径2.64～3.30ｍである。

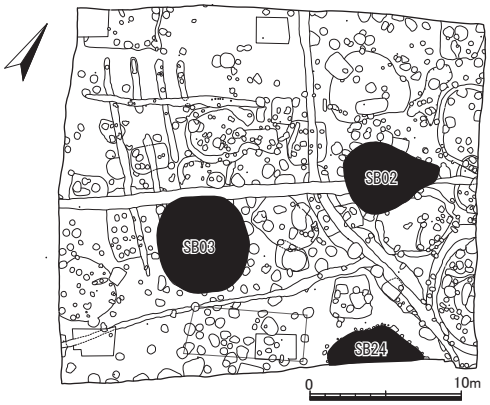
竪穴住居の構造は検出面の標高が17.14～18.57ｍである。残存する床面までの掘削深度はいずれも0.05～0.33ｍであるが、恐らく、遺構上半は後世に1区程ではないが削平を受けている。また、地山と埋土の土質・土色が近似するため、柱穴や壁溝の検出は困難であった。これらの中で中央に炉をもつものもあり、住居の形状が円形・楕円形で、主柱穴が2～4本で構成するものが多いことから、類型的に松菊里型住居から派生した可能性がある。

柱穴の配置は主柱穴は主に4本柱が多く、2本のものも見られる。住居内外には支柱穴と考えられる柱穴が疎らに点在する。炉は主柱穴の中央もしくはやや外れた箇所で確認できて、その炉と考えられる土坑には炭化物や焼土を含んで

1. 弥生時代中期城ノ越式
土器併行期竪穴住居



2. 弥生時代中期須玖Ⅰ式
土器併行期竪穴住居



3. 弥生時代中期須玖Ⅱ式
土器併行期竪穴住居

第85図　小原下遺跡2区主要遺構(竪穴住居)変遷図(S=1/500)

いた。

これらの竪穴住居の中で、SB01は覆土が厚く堆積していたために残存状況が最も良好であった。SB01からは断面形状が台形状を呈する周堤が確認できており、炭化物や多量の焼土を含んでいた。その周堤の廻りにはU字形の外周溝が巡り、排水的機能以外に、住居建築段階における周堤を造るための土採りを兼ねた可能性がある。また周堤内の床面は0.3m程貼床されていた。遺構には主柱穴とその中央に炉が確認できており、当調査区で住居の構造を掴む上で最も良好な遺構であった。また遺構からは中期中葉で希少な柳葉形の鉄鏃や鉄製品が出土している。

その他、SB43には出入口施設と考えられるSX47付属遺構が確認できている。

土坑は形状が楕円形と長方形とが多い。貯蔵穴と考えられるのがSK23･26の2基であり、いずれも掘削深度が他と比べて深く0.5～0.6m程ある。土壙墓と考えられるのがSK54であり、規模は径2.14mで幅0.94mで、深さ0.36mである。副葬品は確認できなかった。主軸方向は北東から南西方向で、床面は南西側が高く、北東が低いため、頭位は南西側と考えられる。主軸の南西方向には舞岳やさらに先には普賢岳がそびえており、山に対する信仰の現れの可能性が考えられる。SK54の土壙墓は須玖Ⅰ式土器の頃のSB52を切って検出されたことから須玖Ⅰ式土器以降の時期の遺構であろう。

遺構の西側から検出した溝状遺構群(SD11～16)はSD16を除いて全て併走しており、溝の床面に起伏がある。SD16のみ、SD06的な排水溝や区画溝の可能性があるが、その他の溝状遺構群は畠の可能性がある。またSD12は須玖Ⅱ式土器が出土するSB03を切っているため、須玖Ⅱ式土器以降の畠と考えられる。弥生時代であれば稲作が普及する中、畠の可能性がある遺構が集落内において確認されたということは当遺跡における生業の一部を伺い知ることができたと言えよう。

東から北西に向かって横断するSD05の溝と、南から北東に向かってSD05と縦断し交わるSD06の2本の溝は、それらの溝の両脇に竪穴住居が多く集中することから、住居もしくは集落を造営･形成する際にSD05の掘削土を周堤等に用いていた可能性も考えられる。SD05の用途は排水的役割を担っていただけでなく、比較的標高が低い住居群と標高が高い住居群とを区画する溝としての役割を兼ね備えていた可能性がある。実際、SD05より標高の低い住居群の方が住居の密度が高く、外側では住居の密度が低く、溝状遺構などの畠が見られる。この溝を境に集落内の空間利用が異なる可能性がある。また、SD06からSD16の間は弥生時代中期の住居群が密集するが、SD06から南側の区域では弥生時代中期の住居は1軒のみであった。

３　小原下遺跡2区の弥生時代中期の集落様相

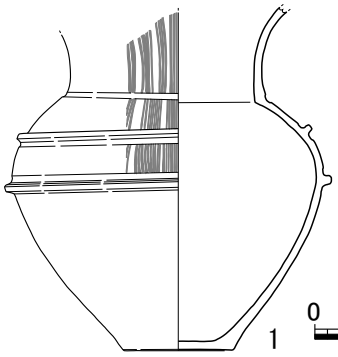
島原半島において弥生時代中期の竪穴住居が確認できた遺跡は環濠が見つかった雲仙市国見町十園遺跡で、中期の円形･方形の竪穴住居がそれぞれ2軒確認されている。この遺跡の円形住居は径が10～12m程であり、小原下遺跡2区で確認された大型円形の最終段階(須玖Ⅱ式･黒髪Ⅱ式土器)である径約8mと比較しても非常に大型である。十園遺跡の方形(隅丸方形)住居は約4.5×4mで、小原下遺跡2区の方形･長方形のものと時期は異なるようだが規模は類似する。十園遺跡の円形住居内からは主に須玖Ⅱ式･黒髪式土器が出土しており、小原下遺跡2区においても須玖Ⅱ式･黒髪式土器の段階で大型の円形住居である点は共通する。また同市の佃遺跡においても弥生時代(報文において遺物未掲載のため詳細時期不明だが、龍王遺跡の報告書の所見によれば中期後半頃)の径8～10m程や径14m超の大型円形住居が確認されている。また、住居内からは内行花文の小型仿製鏡が出土している。この遺跡に近接する龍王遺跡でも弥生時代終末の径8m超の大型円形住居や径8mの方形住居を検出されている。南島原市今福遺跡では弥生時代中期～古墳時代初頭の直径10m程の大型な円形の竪穴住居が2棟見つかり、その内1棟は4本の主柱穴や壁溝が確認されている。以上のように小

原下遺跡2区の結果と共通して、島原半島における弥生時代中期後半の竪穴住居は８ｍ超の大型円形住居が盛行するようである。

この様に島原半島において中期後半以降の資料は増加しつつあるものの、一方で「中期前半の竪穴住居」の検出例は希少であった。今回調査した小原下2区において約700m^2ほどの狭い調査区内から14軒も密集して中期初頭の城ノ越式土器から中期後半の須玖Ⅱ式土器までの連続した竪穴住居の変遷が確認できて、さらに、その住居の構造や性格が掴めたことは今後の島原半島における弥生時代の集落研究を行う上で大変重要な遺跡と言える。

さて、遺跡から南東へ1㎞も離れていない所に、景華園遺跡(第86図)がある。この遺跡から出土した遺物(第86図1)は弥生時代前期から後期に渡り、小原下遺跡と同じ中期の遺物、特に須玖Ⅱ式土器が最も多く出土している。景華園遺跡については小田富士雄･上田龍児両氏(2004)がまとめている。『深溝世紀』(元禄年間)には巨石の下より銅剣2本が出土したと伝えられており、弥生時代中期の甕棺内外から銅剣･銅矛が合わせて5本が出土している。その内、立岩式甕棺から出土した銅矛について、上田氏は景華園Ⅵ式甕棺と設定した超大型品(復元口径94.2㎝、推定高約120㎝)が、北部九州色が強い甕棺を採用し、北部九州の甕棺の中でも最大級とし、中細形銅矛を副葬する点でも北部九州の首長との繋がりを想定している。また、小田氏は現在知られているところでも5本以上の青銅利器を保有する島原半島における中核集落を形成していた可能性を言及している。また、氏は景華園遺跡の平らな巨石(大石)について、縄文時代晩期に島原半島に伝来した多くの大陸系支石墓の系譜が継承されていたことも考えて、同時期の奴国王墓の標石として地上に巨石が据えられていたことも参考例にあげている。そして、景華園遺跡の位置付けを「有明海を通じて筑紫連合政権の一国であった可能性は大きい」と述べている。

この景華園遺跡に近接する小原下遺跡2区は同じ弥生時代中期後半に最盛期を迎え、区画的な集



【遺物の説明】
この遺物は景華園遺跡から出土した暗文を施す丹塗の広口壺である。
また島原市大野原遺跡展示館で保管･展示している。

【写真の説明】
左上写真:現況の景華園遺跡の巨石(大石)。

下写真:小原下遺跡から景華園遺跡を望む。

第86図　関連資料　景華園遺跡出土遺物(S=1/6)と景華園遺跡写真

落を形成するなど一定の規格をもつ点からも考えて、その影響下にあった可能性が高い。つまり、景華園遺跡が島原半島における一つの拠点集落であるならば、小原下遺跡2区はその周辺的な集落と言えよう。

４　中世以降の遺構について

小原下遺跡2区で確認できた中世の遺構は掘立柱建物が1棟、土坑が1基であった。また、近世の遺構は土坑が1基、溝が1条、性格不明遺構が1基であった。その掘立柱建物のSB04は2間×5間の比較的大型な建物である。この建物は遺構の明確な時期を示す遺物が出土している。SK20はSB04の建物域内から確認されており、地鎮等に伴う土坑の可能性がある。

1･2区調査ともに中世の遺物が纏まった量出土する。特に土師器･須恵器･瓦質土器などの国産品以外に中国産や朝鮮系の遺物が出土することから、今後の調査で中世の遺構が続けて確認できる可能性がある。また、遺跡の北西に位置する八幡神社には溝や土塁の可能性があるものがあり、神社より谷を挟んで北側には東空閑城跡が位置するため、小原下遺跡はこれらの史跡･遺跡と関連する何らかの中世における場の利用が成された空間である可能性が考えられる。

【参考文献】

石野博信　1990　『日本原始･古代住居の研究』　吉川弘文館

宇土靖之･大坪芳典　2011　『小原下遺跡』　島原市教育委員会

宇土靖之･大坪芳典　2011　「島原市小原下遺跡の調査報告-縄文時代後期の集落様相-」『日韓新石器時代研究の現在』　第9回日韓新石器時代研究会発表資料集　九州縄文研究会･韓国新石器学会

大坪芳典　2000　「縄文後期後半の土器について」『蔵上遺跡Ⅲ』　鳥栖市教育委員会

大坪芳典　2000　「筑後川流域の縄文後期後半土器」『Fragments』第２号　さくら刊行会

大坪芳典　2001　「南に中岳式土器あり」『Frontier』第3号　海部考古学会

小田富士雄　1959　「島原半島景花(華)園の遺物」『考古学雑誌』第45巻第3号　日本考古学会

小田富士雄･上田龍児　2004　『長崎県･景華園遺跡の研究』福岡大学考古学研究室調査報告第3冊　福岡大学人文学部考古学研究室

賀川光夫･古田正隆　1970　「縄文後期磨消縄文Ⅲ式の文化」『古代学研究』No.57

片岡宏二　2003　「水田稲作農耕の定着と展開-三国丘陵における弥生時代前期社会の諸問題-」『三沢北中尾遺跡1地点』環濠編　小郡市教育委員会

金丸武司　2009　「九州の縄文後期集落」『考古学ジャーナル』No.584　ニュー･サイエンス社

亀田学他　2001　「考古学的分析　熊本平野周辺の弥生土器の編年案」『梅ノ木遺跡Ⅱ』(下)　熊本県教育委員会

川越哲志　1993　『弥生時代の鉄器文化』　雄山閣

清田純一　1998　「縄文後･晩期土器考-中九州の縄文後･晩期土器とのその並行型式について-」『肥後考古』第11号　肥後考古学会

小池史哲　2002　「北部九州の縄文後晩期集落‐住居跡を中心に‐」『考古学ジャーナル』No.485　ニュー･サイエンス社

小池史哲　2008　「北部九州の縄文時代住居跡について」『九州の縄文住居Ⅱ』第18回九州縄文研究会熊本大会　九州縄文研究会

島津義昭　2002　「西日本の集落研究について」『考古学ジャーナル』No.485　ニュー･サイエンス社

正林護　1984　「小原下遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅶ』　長崎県教育委員会

平美典　2044　「北部九州における中期～後期前半の土器と併行関係」『弥生中期土器の併行関係(発表要旨集)』　第53回埋蔵文化財研究集会

高橋信武　2007　「九州における縄紋時代集落の様相」『日韓新石器時代の住居と集落』　第7回日韓新石器時代研究会発表資料集　九州縄文研究会･韓国新石器学会･九州国立博物館

武末純一･柳田康雄･玉永光洋･西健一郎　1987　「2九州地方の弥生土器(1. 須玖式土器)」『弥生文化の研究』第4巻弥生土器Ⅱ　雄山閣

竹中(野澤)哲朗・辻田直人　2005　『十園遺跡Ⅱ』　国見町教育委員会

辻田直人　2008　『佃遺跡』　雲仙市教育委員会

辻田直人・小野綾夏　2008　『龍王遺跡Ⅲ』　雲仙市教育委員会

富田紘一　1977　『鳥井原遺跡発掘調査報告書』　熊本市教育委員会

富田紘一　1981　「三万田式土器」『縄文文化の研究』第4巻　雄山閣

富田紘一　1983　「太郎迫遺跡の縄文土器(1)」『肥後考古』第4号　肥後考古学会

富田紘一　1987　「太郎迫遺跡の縄文土器(2)」『肥後考古』第6号　肥後考古学会

中園聡　1998　「丹塗精製器種群盛行の背景とその性格-東アジアの中の須玖Ⅱ式土器-」『人類史研究』10　人類史研究会

中園聡　2004　「土器の分類・編年と様式の動態(中部九州)」『九州弥生文化の特質』　九州大学出版会

西健一郎　1983　「黒髪式土器の基礎的研究」『古文化談叢』第12集　九州古文化研究会

林田和人　2006　「考察　弥生土器」『八ノ坪遺跡Ⅰ』分析・考察・図版編　熊本市教育委員会

古田正隆　1963　『三会中野景華園遺跡(島原市三会の弥生文化)』　島原市教育委員会

古田正隆　1974　『重要遺跡の発見から破壊までの記録‐縄文晩期原山埋葬遺跡‐』　百人委員会

古田正隆　1974　『筏遺跡‐縄文後・晩期の埋葬遺跡‐』　百人委員会

古田正隆　1976　『続・筏遺跡‐主として第6次調査の新資料を中心に‐』　百人委員会

本多和典・渡邊康行・島内浩輔・大坪芳典・藤尾慎一郎・小林謙一・小畑弘己・仙波靖子・長岡信治・松末和之　2006　『権現脇遺跡』　深江町教育委員会

松本慎二　1991　『宅地造成に伴う景華園遺跡試掘調査の結果について』　島原市教育委員会

福田一志・渡邊康行　1996　『伊木力遺跡Ⅰ』　長崎県教育委員会

福田一志　2000　「景華園遺跡(島原市)」『県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅲ』　長崎県教育委員会

町田勝則　1996　「石器の研究法」『長野県の考古学』　(財)長野県埋蔵文化財センター

水ノ江和同　1992　「西平式土器に関する諸問題―福岡県築上郡築城町所在，松丸遺跡（D地区）出土縄文土器の位置付け―」『九州考古学』第67号　九州考古学会

水ノ江和同　1997　「北部九州の縄紋後・晩期土器―三万田式から突帯文時の直前まで―」『縄文時代』8　縄文時代文化研究会

宮内克己　1981　「三万田式土器の研究」『古文化談叢』第8集　古文化研究会

宮内克己　1985　「東貝塚の縄文式土器」『研究紀要』第2集　大分県立宇佐風土記の丘歴史民族資料館

宮内克己　1997　「九州の土偶」『西日本をとりまく土偶』発表要旨集　土偶シンポジウム6奈良大会実行委員会

宮崎貴夫　1984　「竪穴住居跡」・「弥生土器および古式土師器について」『今福遺跡Ⅲ』　長崎県教育委員会

宮本長二郎　1996　『日本原始古代の住居建物』　中央公論美術出版

渡邊康行・島内浩輔　2006　「石器・石製品」『権現脇遺跡』　深江町教育委員会

綿貫俊一　1991　「大野川流域を中心とした西平式系土器の変遷」『川南原遺跡群』　大分県教育委員会

山崎頼人・沖田正大・廣木誠・柿本慈　2008　「松菊里型住居の変容過程-筑紫平野北部三国丘陵における住居動態-」『古文化談叢』第59集　九州古文化研究会

長崎県教育委員会　1997　『原始・古代の長崎県』資料編Ⅱ

写　真　図　版

01. 小原下遺跡2区と周辺（北東から）

02. 小原下遺跡1・2区（1区のみ画像合成）（北東から）

03. 小原下遺跡2区全景（南東から）

04. 範囲確認調査

05. 表土掘削後

06. 遺構検出面

07. SB01検出

08. SB01床面

09. SB01土層

10. SB01周堤焼土

11. SB01完掘

12. SB03土層

13. SB03完掘

14. SB03遺物

15. SB03遺物

16. SB03遺物

17. SB10土層

18. SB10完掘

19. SB10遺物

20. SB30完掘

21. SB24土層

22. SB24完掘

23. SB27完掘

24. SB25完掘

26. SB43土層

28. SB43遺物（石皿）

30. SB02・38土層

31. SB39土層

32. SB39遺物

25. SB33土層

27. SB43・33、SX47完掘

29. SB02・37～39検出

33. SB02・37～39・52完掘

34. SB58土層

35. SB59土層･完掘

36. SB04完掘

37. SK23完掘

38. SK26完掘

39. SK54完掘

41. SK60埋甕

40. SK40埋甕

44. SD05完掘

42. SK20土坑

45. SD06完掘

43. SD05土層

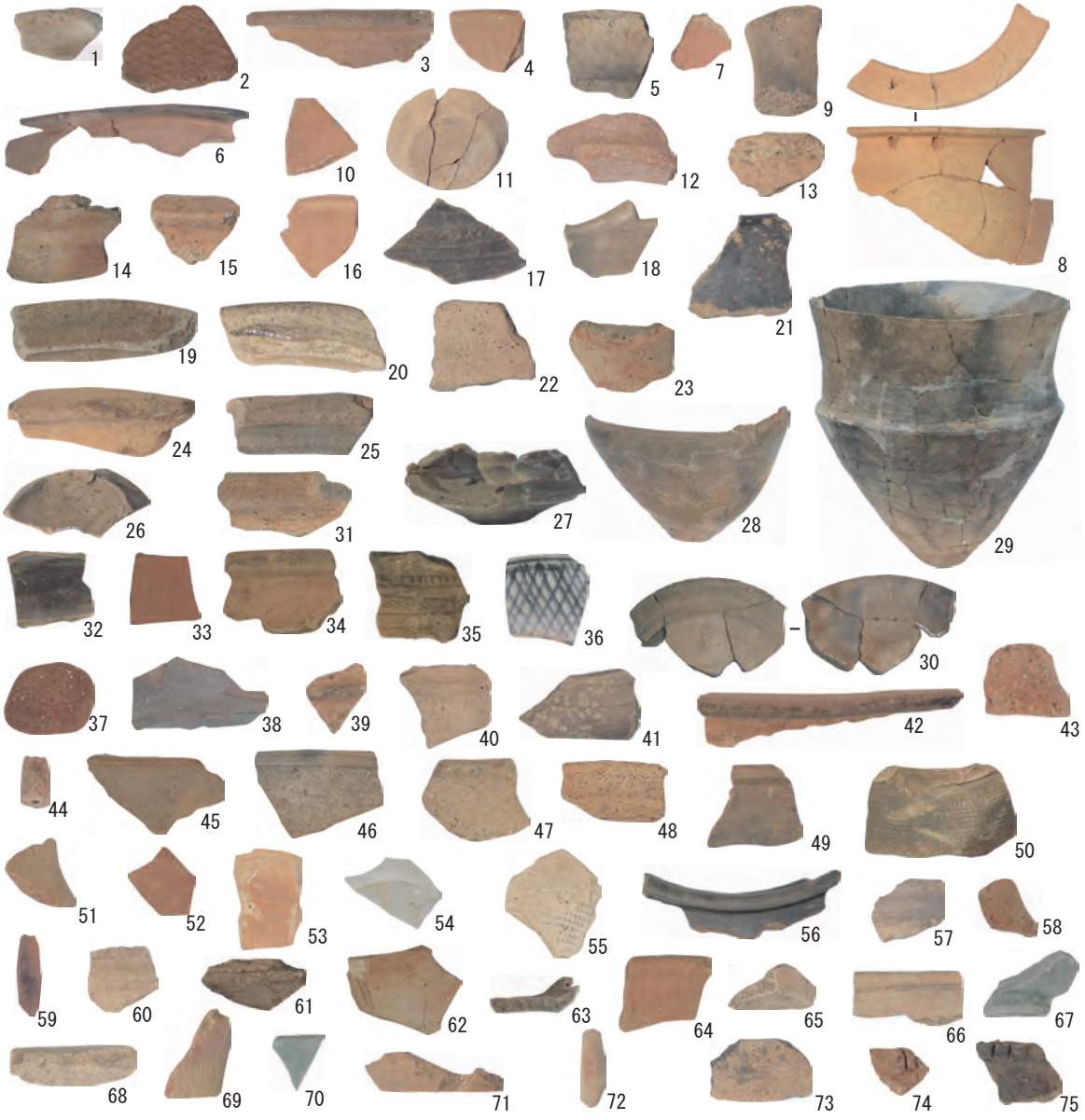
46. SD11～16完掘

47. B-98グリッド出土杭

48. C-99グリッド出土遺物

49. 調査区北西壁面土層

50. 調査区完掘



51. 出土遺物①

52. 出土遺物②

53. 出土遺物③

54. 関連資料（景華園遺跡出土遺物）

【遺物写真図版と本文遺物図版の対応表】

写真図版51(:本文図版番号)

1:第23図2　2:第25図4　3:第25図1　4:第25図2　5:第25図3　6:第27図1　7:第27図2　8:第27図3
9:第29図1　10:第31図1　11:第7図1　12:第7図2　13:第33図1　14:第33図2　15:第35図1　16:第35図2
17:第38図1　18:第48図4　19:第41図1　20:第41図2　21:第41図5　22:第41図3　23:第43図1　24:第46図1
25:第46図2　26:第72図2　27:第16図1　28:第18図1　29:第20図1　30:第20図2　31:第56図1　32:第56図3
33:第56図2　34:第58図1　35:第58図2　36:第75図1　37:第62図1　38:第64図2　39:第64図1　40:第66図1
41:第21図1　42:第81図4　43:第81図5　44:第81図7　45:第81図6　46:第81図1　47:第81図3　48:第81図2
49:第78図6　50:第78図18　51:第78図14　52:第78図17　53:第78図20　54:第78図25　55:第78図19　56:第78図7
57:第78図4　58:第78図13　59:第78図30　60:第78図9　61:第78図1　62:第78図21　63:第78図24　64:第78図16
65:第78図22　66:第78図8　68:第78図12　69:第78図15　70:第78図26　71:第78図23　72:第78図29　73:第78図3
74:第78図10　75:第78図11

写真図版52(:本文図版番号)

76:第78図28　77:第80図3　78:第80図2　79:第70図1　80:第80図4　81:第80図1　82:第78図2　83:第78図5
84:第77図3　85:第77図2　86:第77図4　87:第77図7　88:第77図5　89:第77図1　90:第77図6　91:第76図6
92:第76図5　93:第76図7　94:第76図2　95:第76図9　96:第76図3　97:第76図4
98:第76図8　99:第76図10　100:第76図1

写真図版53(:本文図版番号)

1:第23図2　2:第23図3　3:第23図4　4:第23図5　5:第23図7　6:第27図5　7:第27図4　8:第27図6
9:第27図7　10:第27図8　11:第29図2　12:第31図2　13:第7図3　14:第9図1　15:第33図3　16:第38図2
17:第41図6　18:第41図8　19:第41図7　20:第43図2　21:第12図1　22:第56図5　23:第56図7　24:第23図6
25:第56図6　26:第56図4　27:第60図1　28:第68図1　29:第81図9　30:第81図8　31:第80図14　32:第80図11
33:第80図10　34:第80図18　35:第80図12　36:第80図7　37:第80図6　38:第80図13　39:第80図16　40:第80図8
41:第80図5　42:第80図9　43:第80図15　44:第80図17　45:第80図44　46:第78図38　47:第78図34　48:第79図43
49:第78図35　50:第78図31　51:第79図41　52:第78図39　53:第78図40　54:第78図33　55:第79図42　56:第78図32
57:第78図36　58:第78図37　59:第77図8　60:第76図14　61:第76図13　62:第76図15　63:第76図19　64:第76図12
65:第76図11　66:第76図17　67:第76図18　68:第76図16

写真図版54(:本文図版番号)

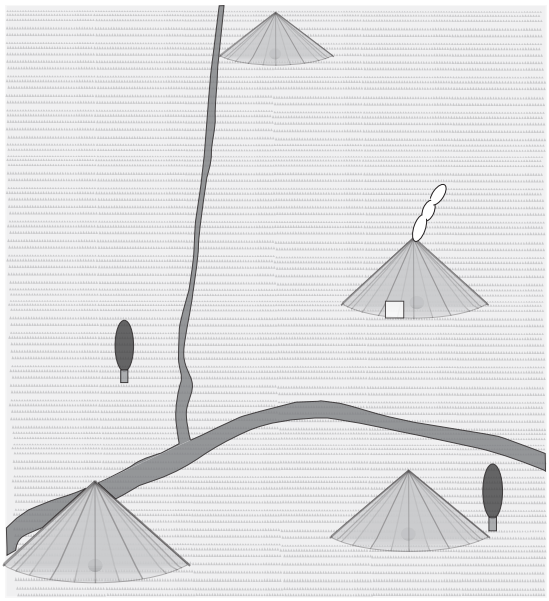
1:第86図1

55. 発掘作業

56. 遺物整理

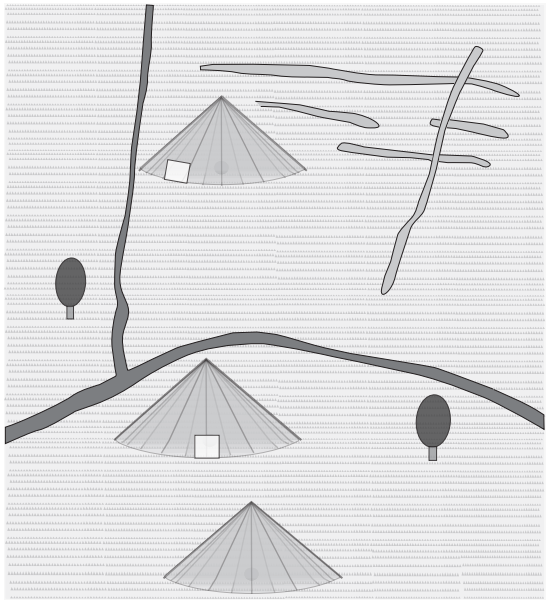
57. 現地説明会

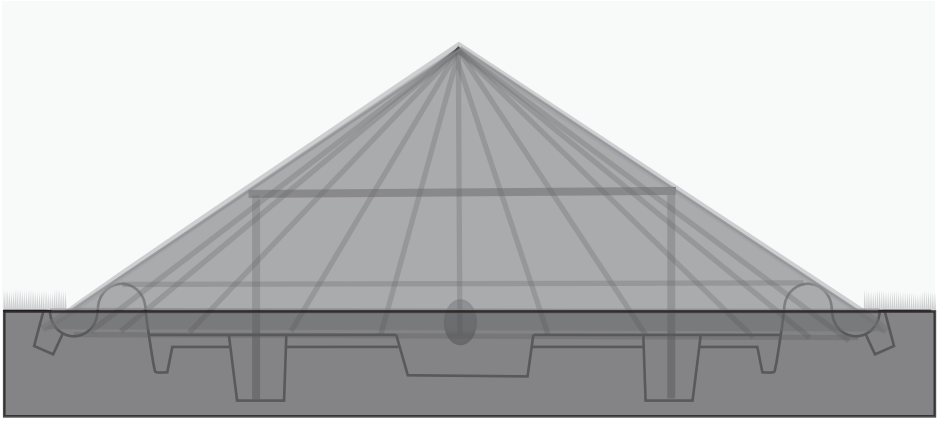
58. 北より小原下遺跡を望む



小原下遺跡2区の弥生時代中期
城ノ越式～須玖Ⅰ式期の集落景観想像図

小原下遺跡2区の弥生時代中期
須玖Ⅱ式期の集落景観想像図





小原下遺跡2区における弥生時代中期竪穴住居復元模式図

報 告 書 抄 録

ふ り が な	おばるしもいせき
書　　名	小 原 下 遺 跡 Ⅱ
副 書 名	株式会社東洋機工製作所工場建設に伴う発掘調査報告２
巻　　次	
シリーズ名	島原市文化財調査報告書
シリーズ番号	第13集
編 著 者 名	宇土靖之　大坪芳典　嘉村哲也　竹田ゆかり
編 集 機 関	島原市教育委員会
所 在 地	〒859－1492　長崎県島原市有明町大三東戊1327番地　TEL 0957－68－5473
発 行 年 月	西暦2011年10月

ふりがな 収蔵遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おばるしもいせき　く 小原下遺跡２区	ながさきけんしまばらし 長崎県島原市 ありあけまちおおみさき 有明町大三東 あざきのした　ばんち 字木下846番地 ばんち　いち 1･847番地1の一 ぶ 部	-	-	32° 50′ 14″	130° 20′ 35″	20110322～ 20110527	703.6㎡	民間工場に伴う緊急発掘調査

収蔵遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小原下遺跡２区	集落	縄文 弥生 中世 近世	竪穴住居 溝 溝状遺構(畠) 土坑 埋甕	土器　須恵器 陶磁器　瓦質土器 石器　土製品(土版) 木製品　鉄器(鉄鏃)	･弥生時代中期の集落跡 ･1区から続く縄文時代後期後半の集落跡の一部

小原下遺跡採集資料「人形土偶」

島原市文化財調査報告書　第13集

小原下遺跡Ⅱ

－株式会社東洋機工製作所工場建設に伴う発掘調査報告２－

発行月　　平成23(2011)年10月

編集・発行　島原市教育委員会
島原市有明町大三東戊1327
TEL　0957(68)5473

印刷　　大同印刷株式会社
佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20
TEL　0952(71)8520